

# 日蓮大聖人御書全集

かいもくしよう

じよう

げ

開目抄（上・下）

新版  
50  
〜  
121

かいもくしようじよう

# 開目抄上

ぶんえい ねん

文永9年(72)

がつ

2月

さい

51歳

もんかいちどう

門下一同

そ いったいしゆじよう

そんぎよう

ものみつ

夫れ、一切衆生の尊敬すべき者三つあり。いわゆる主・

し しん

しゆうがく

ものみつ

じゆ

師・親これなり。また習学すべき物三つあり。いわゆる儒・

げ ない

外・内これなり。

じゆか

さんこう

ごてい

さんおう

てんそん

ごう

しよしん

儒家には、三皇・五帝・三王、これらを天尊と号す。諸臣

とうもく

ばんみん

きようりよう

さんこういぜん

ちち

ひとみな

の頭目、万民の橋梁なり。三皇已前は父をしらず、人皆

きんじゆう

おな

ごてい

ふぼ

わきま

こう

禽獸に同じ。五帝已後は父母を弁えて孝をいたす。いわ

ちようか

頑

ちち

はいこう

みかど

ゆる、重華はかたくなわしき父をうやまい、沛公は帝とな

たいこう はい ぶおう せいはく もくぞう つく ていらん はは かたち  
つて太公を拝す。武王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形

刻  
をきざめり。これらは孝の手本なり。

ひかん いん よ 滅 強 みかど 諫  
比干は殷の世のほろぶべきを見て、しいて帝をいさめ、

こうべ 勿 ころえん もの いこう きも わ  
頭をはねらる。弘演といいし者は、懿公の肝をとつて我が

はら 割 きも い し ちゆう てほん  
腹をさき肝を入れて死しぬ。これらは忠の手本なり。

いんじゆ ぎようおう し むせい しゆんおう し たいこうぼう ぶんおう し  
尹寿は堯王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、

ろうし こうし し しせい 号 てんそんこうべ  
老子は孔子の師なり。これらを四聖とごうす。天尊頭を

傾  
かたぶけ、万民 掌 をあわす。

せいじん さんぶん ごてん さんしとう さんぜんよかん しょ  
これらの聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり。

しよせん さんげん 出 さんげん いち う げん しゆうこう

その所詮は三玄をいはず。三玄とは、一には有の玄、周公

とう た に む げん ろうしとう さん やくうやくむとう

等これを立つ。二には無の玄、老子等。三には亦有亦無等、

そうし げん げん くろ ぶもみしういぜん 尋

莊子が玄これなり。玄とは黒なり。父母未生已前をたずぬ

げんき しょう きせん くらく

れば、あるいは元氣よりして生じ、あるいは貴賤・苦楽・

ぜひ とくしつとう みなじねん とううんぬん

是非・得失等は皆自然なり等云々。

たく た かこ みらい

かくのごとく巧みに立つといえども、いまだ過去・未来を

いちぶん 知 げん くろ ゆう げん

一分もしらず。玄とは黒なり、幽なり、かるがゆえに玄と

げんぎい 知 似 げんぎい じん ぎ

いう。ただ現在ばかりしれるにいたり。現在において仁・義

せい み 守 くに やす そうい やから

を制して、身をまぼり、国を安んず。これに相違すれば族

亡

いえ

ほろ

とう

けんせい

ひとびと

せいじん

をほろぼし家を亡ぼす等いう。これらの賢聖の人々は、聖人

かこ

ほんぷ

せ

見

みらい

なりといえども、過去をしらざることに凡夫の背をみず、未来

鑑

もうじん

まえ

げんざい

をかがみざること盲人の前をみざることがとし。ただ現在に

かた

ごじよう

ぎよう

ほうばい

敬

家を治め孝をいたし堅く五常を行わずれば、傍輩もうやまい、

な

くに

聞

けんおう

め

しん

名も国にきこえ、賢王もこれを召してあるいは臣となし、

し 侍

くらい

讓

てん

きた

まも

あるいは師とたのみ、あるいは位をゆずり、天も来って守

仕

しゆう

ぶおう

ごろう

来

仕

ごかん

りつかう。いわゆる、周の武王には五老きたりつかえ、後漢

こうぶ

にじゆうはつしゆくきた

にじゆうはつしよう

の光武には二十八宿来って二十八将となりし、これなり。

かこ

みらい

ふぼ

しゆくん

しかりといえども、過去・未来をしらざれば、父母・主君・

ししよう 助 師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり。まことの賢聖に  
あらず。

こうし ど 孔子が「この土に賢聖なし。西方に仏陀という者あり。」

せいじん げてん ぶつぽう しょもん 孔子が「この土に賢聖なし。西方に仏陀という者あり。こ  
れ聖人なり」といいて、外典を仏法の初門となせし、こ

れなり。礼楽等を教えて、内典わたらば戒・定・慧をしり

易 ほうしん おし 易 王臣を教えて尊卑をさだめ、父母を教

えて孝の高きことをしらしめ、師匠を教えて帰依をしらし

む。妙楽大師云わく「仏教の流化、実にここに頼る。礼楽

前に駆せて、真道後に啓く」等云々。

てんだい

こんこうみようきよう

い

いつさいせけん

天台云わく「金光明経に云わく『一切世間のあらゆる

ぜんろん

みな

きよう

よ

ふか

せほう

し

すなわ

善論は、皆この経に因る。もし深く世法を識らば、即ち

ぶつぼう

とううんぬん

しかん

い

われ

さんせい

つか

これ仏法なり』と』等云々。止観に云わく「我、三聖を遣わ

か

しんたん

け

とううんぬん

ぐけつ

い

して、彼の真丹を化す』等云々。弘決に云わく

しょうじようほうぎようきよう

い

がっこうぼさつ

がんかい

「清浄法行経に云わく『月光菩薩は、かしこに顔回と

しょう

こうじようぼさつ

ちゆうじ

しょう

かしようぼさつ

称し、光浄菩薩は、かしこに仲尼と称し、迦葉菩薩は、

ろうし

しょう

てんじく

しんたん

さ

かしこに老子と称す』。天竺よりこの震旦を指して、かし

とううんぬん

ことなす』等云々。

に

がっし

げどう

さんもくはつび

まけいしゆらてん

びちゆうてん

二には月氏の外道。三目八臂の摩醯首羅天、毘紐天、こ

にてん

いつさいしゆじよう

じふ

ひも

てんそん

しゆくん

ごう

の二天をば、一切衆生の慈父・悲母、また天尊・主君と号

かびら

うるそうぎや

ろくしやば

さんにな

さんせん

名

す。迦毘羅・漚楼僧佉・勒娑婆、この三人をば、三仙となづ

ぶつぜんはつびやくねんいぜんいご

せんにな

く。これらは仏前八百年已前已後の仙人なり。

さんせん

しよせつ

しいだ

ごう

ろくまんぞう

ないし

ほとけ

この三仙の所説を四韋陀と号す。六万蔵あり。乃至、仏

しゆつせ

あ

ろくしげどう

げきよう

しゆうでん

ごてんじく

出世に当たつて、六師外道この外経を習伝して、五天竺の

おう

し

しりゆうきゆうじゆうご

ろくとう

成

いちいち

りゆうりゆう

王の師となる。支流九十五・六等にもなれり。一々に流々

おお

がまん

はたほこたか

ひそうてん

過

しゆうしん

こころ

多くして、我慢の幢 高きこと非想天にもすぎ、執心の心

かた

さんせき

こ

けん

ふか

たく

の堅きこと金石にも超えたり。その見の深きこと、巧みな

じゆか

似

か こにしようさんしろう

るさま、儒家にはにるべくもなし。あるいは過去二生三生

ないししちしよう はちまんごう しょうけん

か みらいはちまんごう

乃至七生、八万劫を照見し、また兼ねて未来八万劫をし

と ほうもん ごくり

いん なか か

る。その説くところの法門の極理は、あるいは「因の中に果

あ いん なか かな

いん なか

有り」、あるいは「因の中に果無し」、あるいは「因の中に、

かあ かな とうらんぬん

げどう ごくり

また果有りまた果無し」等云々。これ外道の極理なり。

よ げどう ごかいじゅうぜんかいとう たも

うろ

いわゆる、善き外道は、五戒十善戒等を持つて有漏の

ぜんじよう しゆ かみ しき むしき 極

じようかい ねはん た

禅定を修し、上、色・無色をきわめ、上界を涅槃と立て

くつぶちゆう 攻 上

ひそうてん かえ

て屈歩虫のごとくせめのぼれども、非想天より返つて

さんあくごう お いちにん てん とど 者

三悪道に墮つ。一人として天に留まるものなし。しかれど

てん きわ もの なが 帰 思

も、天を極むる者は永くかえらずとおもえり。

おのおのじしぎ

かたしゆう

ふゆ

各々自師の義をうけて堅く執するゆえに、あるいは冬の

さむいちにち

さんどごうがよく

かみ抜

寒きに一日に三度恒河に浴し、あるいは髪をぬき、あるいは

いわおみ投

みひ炙

ごしよ

は巖に身をなげ、あるいは身を火にあぶり、あるいは五処

焼

らぎよう

うまおおころ

ふく得

をやく。あるいは裸形。あるいは馬を多く殺せば福をう。

そうもく

いっさいきらい

あるいは草木をやき、あるいは一切の木を礼す。これらの

じやぎ

かざ

しくぎよう

しよてんたいしやく

邪義、その数をしらず。師を恭敬すること、諸天の帝釈を

敬

しよしんこうていはい

げどう

うやまい、諸臣の皇帝を拝するがごとし。しかれども、外道

ほうきゆうじゆうごしゆ

ぜんあく

いちにんしようじ

離

ぜんし

の法九十五種、善悪につけて一人も生死をはなれず。善師

仕

にしようさんしようとう

あくどう

お

あくし

につかえては二生三生等に悪道に堕ち、悪師につかえては

じゆんじしやう　あくどう　お  
順次生に悪道に墮つ。

げどう　しよせん　ないどう　い　すなわ　さいよう　げどうい  
外道の所詮は内道に入る即ち最要なり。ある外道云わく

せんねんいご　ほとけよ　い　とううんぬん　げどうい　ひやくねん  
「千年已後、仏世に出ず」等云々。ある外道云わく「百年

いご　ほとけよ　い　とううんぬん　だいなはんぎよう　い　いっさいせけん  
已後、仏世に出ず」等云々。大涅槃経に云わく「一切世間

げどう　きようしよ　みな　ぶっせつ　げどう　せつ　とう  
の外道の経書は、皆これ仏説にして外道の説にあらず」等

うんぬん　ほけきよう　い　しゆ　さんどくあ　しめ　じゃけん　そう  
云々。法華経に云わく「衆に三毒有りと示し、また邪見の相

げん　わ　でし　ほうべん　しゆじよう　ど  
を現ず。我が弟子はかくのごとく、方便もて衆生を度す」

とううんぬん  
等云々。

さん　だいかくせそん　いっさいしゆじよう　だいどうし　だいがんもく  
三には、大覚世尊はこれ一切衆生の大導師・大眼目・

だいきょうりよう だいせんし だいふくでんとう

げてん げどう しせい さんせん

大橋梁・大船師・大福田等なり。外典・外道の四聖・三仙、

な せい

じつ

さんわくみだん

ほんぷ

な

その名は聖なりといえども実には三惑未断の凡夫、その名

けん

じつ

いんが

わきま

えいじ

は賢なりといえども実には因果を弁えざること嬰兒のご

かれ はし

しょうじ

たいかい

渡

かれ はし

とし。彼を船として生死の大海をわたるべしや。彼を橋と

ろくどう

ちまた超

わ だいし

へんにやく

渡

して六道の巷こえがたし。我が大師は、変易すらなおわた

たま

ぶんだん

しょうじ

がんぼん

むみよう

こんぼん

り給えり、いわんや分段の生死をや。元品の無明の根本な

傾

たま

けんじ

しょう

そわく

おかたぶけ給えり、いわんや見思の枝葉の麤惑をや。

ぶつだ

さんじゅうじょうどう

はちじゅうごにゆうめつ

この仏陀は、三十成道より八十御入滅にいたるまで

ごじゅうねん

あいだ

いちだい

しょうぎよう

と

たま

いちじいっく

みなしんごん

五十年が間、一代の聖教を説き給えり。一字一句、皆真言

なり。一文一偈、妄語にあらず。外典・外道の中の聖賢の言いちもんいちげ もうごなり。げてん げどう なか せいけん ことば

すら、いうことあやまりなし。事と心と相符えり。いわん言 誤す。じ こころ あいあ

や、仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人。されば、一代ぶつだ むりようこうこう ふもうご ひと いちだい

五十余年の説教は、外典・外道に対すれば大乘なり、大人ごじゆうよねん せつきよう げてん げどう たい だいじよう だいにん

の実語なるべし。初成道の始めより泥洹の夕べにいたるまじつご しょじようどう はじ ないおん ゆう

で、説くところの所説、皆眞実なり。と しょせつ みなしんじつ

ただし、仏教に入つて五十余年の経々、八万法蔵を勘ぶつきよう い こじゆうよねん きようぎよう はちまんほうぞう かんが

えたるに、小乗あり大乘あり、権経あり実経あり。しょうじよう だいじよう こんきよう じつきよう

顕教・密教、軟語・麤語、実語・妄語、正見・邪見等のけんきよう みつきよう なんご そご じつご もうご しょうけん じゃけんとう

しゅじゅ さべつ

ほけきやう

きやうしゅしやくそん

しやうごん

種々の差別あり。ただ法華経ばかり教主釈尊の正言なり、

さんぜじつぼう

しよぶつ

しんごん

だいかくせそん

しじゆうよねん

ねんげん

三世十方の諸仏の真言なり。大覚世尊は、四十余年の年限を

さ

うち

ごうが

しよきやう

しんじつ

あらわ

指して、その内の恒河の諸経を「いまだ真実を顕さず」、

はちねん

ほっけ

かなら

まさ

しんじつ

と

さだ

たま

八年の法華は「要ず当に真実を説きたもうべし」と定め給

たほうぶつだいち

しゅつげん

みな

しんじつ

いしかば、多宝仏大地より出現して「皆これ真実なり」と

しやうみやう

ふんじん

しよぶつらいじゆう

ちやうぜつ

ほんてん

つ

証明す。分身の諸仏来集して長舌を梵天に付く。この

ことば

かつかく

めいめい

せいてん

ひ

明

やちゆう

言、赫々たり、明々たり。晴天の日よりもあきららかに、夜中

まんげつ

あお

しん

ふ

思

の満月のごとし。仰いで信ぜよ。伏しておもうべし。

きやう

にか

だいじ

くしやしゆう

じやうじつしゆう

ただし、この経に二箇の大事あり。俱舎宗・成実宗・

りつしゆう

ほつそうしゆう

さんろんしゆうとう

な

知

げこんしゆう

律宗・法相宗・三論宗等は名をもしらず。華嚴宗と

しんこんしゆう

にしゆう

ぬす

じしゆう

こつもく

いちねん

真言宗との二宗はひそかに盗んで自宗の骨目とせり。一念

さんぜん

ほうもん

ほけきよう

ほんもんじゆりようほん

もん

そこ

沈

三千の法門は、ただ法華経の本門寿量品の文の底にしずめ

りゆうじゆ

てんじん

し

拾

出

たり。竜樹・天親、知ってしかもいまだひろいいださず。

わ

てんだいちしや

懐

ただ我が天台智者のみ、これをいだけり。

いちねんさんぜん

じつかいごぐ

事始

ほつそう

さんろん

一念三千は十界互具よりこととはじまれり。法相と三論と

はっかい

た

じつかい

ごぐ

は、八界を立てて十界をしらず。いわんや互具をしるべし

ぐしや

じようじつ

りつしゆうとう

あごんきよう

依

ろっかい

あき

や。俱舎・成実・律宗等は、阿含経によれり。六界を明ら

しかい

じつぼう

いちぶつ

あ

いっぼう

めて四界をしらず。「十方にただ一仏のみ有り」とて「一方

ほとけあ

明

いっさい

うじよう

に仏有り」とだにもあかさず。「一切の有情、ことごとく

ぶつしようあ

説

いちにん

ぶつしよう

許

仏性有り」とこそとかざらめ。一人の仏性なおゆるさず。

りつしゆう

じようじつしゆうとう

じつぽう

ほとけあ

ぶつしようあ

しかるを、律宗・成実宗等の「十方に仏有り」「仏性有

もう

ほとけ

めつご

にんしとう

だいじよう

ぎ

じしゆう

り」なんと申すは、仏の滅後の人師等の、大乘の義を自宗

ぬす

い

に盗み入れたるなるべし。

れい

げてん

げどうとう

ぶつぜん

げどう

しゆうけん

浅

ぶつご

例せば、外典・外道等は、仏前の外道は執見あさし。仏後

げどう

ぶつきよう

聞

見

じしゆう

ひ

たく

こころ

の外道は、仏教をききみて自宗の非をしり、巧みの心

しめつげん

ぶつきよう

ぬす

と

じしゆう

い

じゃけん

深

出現して仏教を盗み取り自宗に入れて邪見もつともふか

ぶぶつきよう

がくぶつぽうじようとう

げてん

し。附仏教・学仏法成等これなり。外典もまたまたかく

かんど ぶつぼう

渡

とき

じゆか

どうか

のごとし。漢土に仏法いまだわたらざりし時の儒家・道家は、

悠々

えいじ

果

無

ごかんいご

ゆうゆうとして嬰兒のごとくはかなかりしが、後漢已後に

しやつきよう

たいろん

のち

しやつきようようや

るふ

釈教わたりて対論の後、釈教漸く流布するほどに、

しやつきよう

そうりよ

はかい

げんぞく

いえ

釈教の僧侶、破戒のゆえに、あるいは還俗して家にかえ

ぞく こころ

じゆどう

うち

しやつきよう

ぬす い

り、あるいは俗に心をあわせ、儒道の内に釈教を盗み入

しかん

だいご

い

いま

よ

おお

あくま

びくあ

れたり。止観の第五に云わく「今の世に多く悪魔の比丘有つ

かい

しりぞ

いえ

かえ

くさく

くい

どうし

おっさい

て、戒を退き家に還り、駆策を懼畏して、さらに道士に越濟

みようり

もと

そう

ろう

かだん

ぶつぼう

ぎ

ぬす

し、また名利を邀めて莊・老を誇談し、仏法の義をもつて儉

じやてん

お

たか

お

ひく

つ

たつと

くだ

んで邪典に安き、高きを押して下きに就け、尊きを摧いて

卑いやしきいに入れ、概がいして平等びようどうならしむ」云々。弘うんぬんに云ぐわく

「比丘びくの身みと作なつて仏法ぶつぽうを破滅はめつす。もしは『戒かいを退しりぞき家いえに

還かえる』は衛元嵩等えいげんすうとうがごとし。即すなわち在家ざいけの身みをもつて仏法ぶつぽうを

破壊はえす。この人ひと、正教しょうぎようを偷窃ちゆうせつして邪典じやてんに助添じよてんす。『高たかき

を押おす』等とうとは、道士どうしの心こころをもつて二教にきようの概とかきとなし、邪正じやしやう

をして等ひとしからしむ。義ぎとしてこの理り無なし。かつて仏法ぶつぽうに入い

つて正しょうを偷ぬすんで邪じやを助たすけ、八万はちまん・十二じゆうにの高たかきを押おして

五千ごせん・二篇にへんの下ひくきに就つけ、もつて彼の典かの邪鄙てんの教じやひえを釈しやく

するを『尊とうときを摧くだいて卑いやしきに入いる』と名なづく』等とううんぬん云々。

この釈しやくを見るみべし。次上つぎかみの心こころなり。

仏教ぶつぎょうまたかくのごとし。後漢ごかんの永平えいへいに漢土かんどに仏法ぶつぽうわたり

て、邪典じゃてんやぶれて内典ないてん立つ。内典ないてんに南三北七なんさんほくしちの異執いしゅうおこり

て蘭菊らんぎくなりしかども、陳ちん・隋ずいの智者大師ちしやだいしに打ちやぶられて、

仏法ぶつぽう二たび群類ぐんるいをすくう。救きう

その後のち、法相宗ほつそうしゅう・真言宗しんごんしゅう、天竺てんじくよりわたり、華嚴宗けごんしゅうま

た出来しゅつたいせり。これらの宗々しゅうじゅうの中に、法相宗ほつそうしゅうは一向いっこう

天台宗てんだいしゅうに敵かたきを成す宗な、法門しゅう水火ほうもんすいかなり。しかれども、玄奘げんじよう

三蔵さんぞう・慈恩大師じおんだいし、委細いさいに天台てんだいの御釈おんしやくを見けるほどに、自宗じしゅう

じゃけん 翻

故

じしゅう

捨

の邪見ひるがえるかのゆえに、自宗をばすてねども、その

こころてんだい きぶく み

心天台に帰伏すと見えたり。

けごんしゅう しんごんしゅう もと ごんきよう ごんしゅう ぜんむい

華嚴宗と真言宗とは、本は権経・権宗なり。善無畏

さんぞう こんごうちさんぞう てんだい いちねんさんぜん ぎ ぬす 取 じしゅう

三蔵・金剛智三蔵、天台の一念三千の義を盗みとつて自宗の

かんじん うえ いん しんごん くわ ちようか こころ 起

肝心とし、その上に印と真言とを加えて超過の心をおこす。

しさい がくしやとう てんじく だいにちきよう いちねんさんぜん

その子細をしらぬ学者等は、「天竺より大日経に一念三千

ほうもん 打 思 けごんしゅう ちようかん とき

の法門ありけり」とうちおもう。華嚴宗は、澄観が時、

けごんきよう こころ たく えし もん てんだい いちねん

華嚴経の「心は工みなる画師のごとし」の文に天台の一念

さんぜん ほうもん ぬす い ひと 知

三千の法門を偷み入れたり。人これをしらず。

にほん わ ちよう けごんとう ろくしゆう てんだい しんごんいぜん

日本、我が朝には、華嚴等の六宗、天台・真言已前に

けごん さんろん ほつそう じようろんすいか

わたりけり。華嚴・三論・法相、諍論水火なりけり。伝教

だいし くに 出 ろくしゆう じゃけん 破

大師この国にいでて六宗の邪見をやぶるのみならず、

しんごんしゆう てんだい ほけきよう り ぬす と じしゆう ごく

真言宗が天台の法華経の理を盗み取って自宗の極とする

顯

ことあらわれおわんぬ。

でんぎようだいし しゆうじゆう にんし いしゆう 捨 もつば きようもん

伝教大師、宗々の人師の異執をすてて、専ら経文を

さき せ たま ろくしゆう こうとくはちにん じゆうににん

前として責めさせ給いしかば、六宗の高徳八人・十二人・

じゆうしにん さんびやくよにん こうぼうだいしとう責 落

十四人・三百余人ならびに弘法大師等せめおとされて、

にほんこくいちにん てんだいしゆう きぶく なんと とうじ にほんいつしゆう

日本国一人もなく天台宗に帰伏し、南都・東寺・日本一州

の山寺、皆、叡山の末寺となりぬ。また漢土の諸宗の元祖  
の、天台に帰伏して謗法の失をまぬかれたることもあらわ  
れぬ。

また、その後ようやく世おとろえ、人の智あさくなるほ

どに、天台の深義は習いうしないぬ。他宗の執心は強盛に

なるほどに、ようやく六宗・七宗に天台宗おとされて

よわりゆくかのゆえに、結句は六宗・七宗等にもおよば

ずいうにかいなき禅宗・浄土宗におとされて、始めは檀那

ようやくかの邪宗にうつる。結句は、天台宗の碩徳と仰が

ひとびと

皆落

か じゃしゆう

助

るる人々、みなおちゆきて彼の邪宗をたすく。さるほどに、

ろくしゆう

はっしゆう

でんぱた

しよりよう

皆

倒

しゆうほうう

果

六宗・八宗の田畠・所領みなたおされ、正法失せはて

てんしやうだいじん

しやうはちまん

さんのうとう

もろもろ

しゆご

しよだいぜんじん

ぬ。天照太神・正八幡・山王等、諸の守護の諸大善神も、

ほうみ

嘗

こくちゆう

さ

たも

ゆえ

あつきたよ

法味をなめざるか、国中を去り給うかの故に、悪鬼便りを

え くに

やぶ

得て国すでに破れなんとす。

よ ぐけん

さきしじゆうよねん

のちはちねん

そうい

ここに、予、愚見をもつて前四十余年と後八年との相違を

勘

そういおお

せけん

がくしや

かんがえみるに、その相違多しといえども、まず世間の学者

許

わ み

打

覚

もゆるし我が身にもさもやとうちおぼうることは、

にじようさぶつ

くおんじつじよう

二乗作仏・久遠実成なるべし。

ほけきよう げんもん はいけん

しやりほつ けこうによらい かしよう

法華經の現文を拜見するに、舍利弗は華光如来、迦葉は

こうみようによらい しゅぼだい みようそうによらい かせんねん えんぶなだいこんこうによらい

光明如来、須菩提は名相如来、迦旃延は閻浮那提金光如来、

もくれん たまらばつ せんだんこうぶつ ふるな ほうみようによらい あなん

目連は多摩羅跋梅檀香仏、富楼那は法明如来、阿難は

せんがいえじざいつうおうぶつ らごら とうしつほうけによらい ごひやく しちひやく

山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七宝華如来、五百・七百は

ふみようによらい がく むがくにせんじん ほうそうによらい まかはじゃはだい

普明如来、学・無学一千人は宝相如来、摩訶波闍波提

びくに やしゆだら びくに とう いつさいしゆじようきけんによらい ぐそく

比丘尼・耶輸多羅比丘尼等は一切衆生喜見如来・具足

せんまんこうそうによらいとう ひとびと ほけきよう はいけん

千万光相如来等なり。これらの人々は、法華經を拜見した

たつと にぜん きようぎよう ひけん とぎ

てまつるには尊きようなれども、爾前の経々を披見の時

興 醒 多

は、きようさむることもおとし。

その故は、ゆえ 仏世尊は実語の人なり。ぶつせそん 故に聖人・大人と号じつご

す。げてん 外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは、実語な

につけたる名なるべし。な これらの人々に勝れて第一なる故ひとびと

に、世尊をば大人とは申すぞかし。せそん この大人、だいにん 「ただ一大事いちだいじ

の因縁をもつての故に、世に出現したもう」いんねん となのらせ給ゆえ

いて、「いまだ真実を顕さず」しんじつ 「世尊は法久しくして後、要あらわ

ず当に真実を説きたもうべし」まさ 「正直に方便を捨つ」等云々。しんじつ と しょうじき ほうべん す とううんぬん

多宝仏証明を加え、分身舌を出だす等は、舍利弗が未来のたほうぶつしょうみやう くわ ふんじんした い とう しやりほつ みらい

華光如来、迦葉が光明如来等の説をば、誰の人か疑網をなけこうによらい かしよう こうみやうによらいとう せつ たれ ひと ぎもう

すべき。

しかれども、爾前の諸経もまた仏陀の実語なり。

大方広仏華嚴経に云わく「如来の智慧・大薬王樹はただ二処

においてのみ生長の利益をなすこと能わず。いわゆる

二乗の無為広大の深坑に墮つると、および善根を壊る非器

の衆生の大邪見・貪愛の水に溺るとなり」等云々。この

経文の心は、雪山に大樹あり、無尽根となづく。これを

大薬王樹と号す。閻浮提の諸木の中の大王なり。この木の高

さは十六万八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木は、この

き ね 差 えだは はなみ しだい したが はなみ生

木の根ざし・枝葉・花菓の次第に随つて花菓なるなるべし。

き ほとけ ぶつしよう たと いっさいしゅじょう いっさい

この木をば仏の仏性に譬えたり。一切衆生をば一切の

そうもく 譬 だいじゆ かきよう すいりん なか しょうちよう

草木にたとう。ただし、この大樹は火坑と水輪の中に生長

にじよう しんちゆう かきよう いっせんだいにん しんちゆう

せず。二乗の心中をば火坑にたとえ、一闍提人の心中を

すいりん いるい なが ほとけ

ば水輪にたとえたり。この二類は永く仏になるべからずと

もう きようもん

申す経文なり。

だいじつきよう い にしゆ ひとあ かなら し い

大集経に云わく「二種の人有り、必ず死して活きず。

ひつきよう おん し おん ほう あた いち しょうもん に

畢竟して恩を知り恩を報ずること能わず。一には声聞、二

えんがく たと ひとあ じんきよう だつ

には縁覚なり。譬えば、人有つて深坑に墮墜するに、この

ひとみずか

り た り

あた

しょうもん

えんがく

人自ら利し他を利すること能わざるがごとし。

声聞・縁覚

げだつ あな お

みずか

り

もまたかくのごとし。

解脱の坑に墮ちて、

自ら利しおよび

た り

あた

とううんぬん

他を利すること能わず」等云々。

げてんさんぜんよかん

しよせん

ふた

こう ちゆう

外典三千余卷の所詮に二つあり。いわゆる、孝と忠とな

ちゆう

こう いえ

出

こう もう

こう

てん

り。忠もまた孝の家よりいでたり。孝と申すは高なり。天

たか

こう

たか

こう

こう

ち 厚

高けれども、孝よりも高からず。また孝とは厚なり。地あつ

こう

あつ

せいけん

にるい

こう

いえ

出

けれども、孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家よりいで

ぶつぼう

がく

ひと

ちおん

ほうおん

たり。いかにいわんや、仏法を学せん人、知恩・報恩なか

ぶつでし

かなら

しおん

ちおん

ほうおん

るべしや。仏弟子は必ず四恩をしつて知恩・報恩をいたす

べし。

うえ しゃりほつ かしようとう にじよう にひやくごじゆっかい さんぜん いぎ

その上、舍利弗・迦葉等の二乗は、二百五十戒・三千の威儀

じせい み じよう むろ さんじようりよ あごんきよう 極 さんがい

を持整して、味・浄・無漏の三静慮、阿含経をきわめ、三界

けんじ つ ちおん ほうおん ひと てほん

の見思を尽くせり。知恩・報恩の人の手本なるべし。しか

ふちおん ひと せそんさだ たま ゆえ ふぼ

るを、不知恩の人なりと世尊定め給いぬ。その故は、父母の

いえ い しゆつけ み かなら ふぼ 救

家を出でて出家の身となるは、必ず父母をすくわんがため

にじよう じしん げだつ 思 りた ぎよう欠

なり。二乗は、自身は解脱とおもえども、利他の行かけぬ。

ぶんぶん りた ふ ぼとう ようふじようぶつ どう

たとい分々の利他ありといえども、父母等を永不成仏の道

い ふちおん もの

に入るれば、かえりて不知恩の者となる。

ゆいまきよう

い

ゆいまきつ

もんじゆしり

と

なん

維摩経に云わく「維摩詰、また文殊師利に問う。何らを

によらい

しゆ

こた

い

いっさい

じんろう

ともがら

か如来の種となす。答えて曰わく○一切の塵勞の疇は

によらい

しゆ

ごむけん

ぐ

よ

如来の種となる。五無間をもつて具すといえども、なお能く

だいどうい

おこ

とううんぬん

い

たと

ぞくしよう

この大道意を発す」等云々。また云わく「譬えば、族姓の

こ

こうげんりくど

しyouれん

ふよう

こうげ

しyou

ひしyouおでん

子よ、高原陸土には青蓮・芙蓉・衡華を生ぜず、卑湿汚田

すなわ

はな

しyou

とううんぬん

い

には乃ちこの華を生ずるがごとし」等云々。また云わく

あらかん

え

おうしん

もの

つい

どうい

お

「すでに阿羅漢を得て応真となる者は、終にまた道意を起

ぶつぽう

ぐ

あた

こんぱい

ひと

こして仏法を具すること能わざるなり。根敗の士は、それ

ごらく

り

あた

とううんぬん

もん

五楽においてまた利すること能わざるがごとし」等云々。文

の心は、貪・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし、父を殺

こころ とん じん ちとう さんどく ほとけ しゆ ちち こころ  
とう こぎやくざい ぶつしゆ こうげんりくど しょうれんげしょう

す等の五逆罪は仏種となるべし、高原陸土には青蓮華生ず

にじよう ほとけ 成

べし、二乗は仏になるべからず。

こころ にじよう しょぜん ぼんぷ あく あいたい ぼんぷ

いう心は、二乗の諸善と凡夫の悪と相對するに、凡夫の

あく ほとけ 成 にじよう ぜん ほとけ もろもろ

悪は仏になるとも二乗の善は仏にならじとなり。諸の

しょうじようきよう あく 戒 ぜん 褒 きよう にじよう

小乗経には、悪をいましめ、善をほむ。この経には、二乗

ぜん 謗 ぼんぷ あく ぜん 褒 ぶつきよう

の善をそしり、凡夫の悪をほめたり。かえつて仏経とも

覚 げどう ほうもん せん にじよう

おぼえず、外道の法門のようなれども、詮ずるところは二乗

ようぶじようぶつ 強 さだ たも

の永不成仏をつよく定めさせ給うにや。

ほうどうだらにきよう

い

もんじゆ

しやりほつ

かた

こじゆ

方等陀羅尼經に云わく「文殊、舍利弗に語らく『なお枯樹

はな しょう

いな

さんすい

のごときは、さらに花を生ずるや不や。また山水のごとき

もと ところ

かえ

いな

せつしやくかえ

あ

いな

しょうしゆ

は、本の処に還るや不や。折石還つて合うや不や。焦種

め しょう

いな

しやりほつ

いな

もんじゆい

芽を生ずるや不や』。舍利弗言わく『不なり』。文殊言わく

う

われ

ぼだい

き

う

『もし得べからずんば、いかなぞ我に菩提の記を得ること

と

かんき

しょう

とううんぬん

もん

こころ

か

を問うて歡喜を生ずるや』と』等云々。文の心は、枯れ

きはな 咲

さんすいやま

還

わ

いし合

焦

たる木花さかず、山水山にかえらず、破れたる石あわず、い

しゆ 生

にじよう

ぶつしゆ

焦

とう

れる種おいず。二乗またかくのごとし。仏種をいれり等と

なん。

だいぼんはんになきよう

い

もろもろ

てんし

いま

さんぼだいしん

大品般若経に云わく「諸の天子よ。今いまだ三菩提心

おこ

もの

まさ

おこ

しょうもん

しょうい

い

を発さざる者は应当に発すべし。もし声聞の正位に入らば、

ひと

さんぼだいしん

おこ

あた

なに

この人は三菩提心を発すこと能わざるなり。何をもつての

ゆえ

しょうじ

しょうきやく

な

ゆえ

とううんぬん

もん

こころ

故に。生死のために障隔を作すが故なり」等云々。文の心

にじよう

ぼだいしん

発

われずいき

しよてん

は、二乗は菩提心をおこさざれば、我随喜せじ。諸天は

ぼだいしん

われずいき

菩提心をおこせば、我随喜せん。

しゆりようごんきよう

い

ごぎやくざい

ひと

しゆりようごんざんまい

き

首楞嚴経に云わく「五逆罪の人、この首楞嚴三昧を聞

あのかぼだいしん

おこ

かえ

ほとけ

な

う

せそん

いて阿耨菩提心を発せば、還つて仏と作ることを得。世尊

ろじん

あらかん

はき

なが

ざんまい

う

よ。漏尽の阿羅漢はなお破器のごとく、永くこの三昧を受く

るに堪忍せず」等云々。

かんにん

とううんぬん

じょうみやうきやう

い

なんじ

ほどこ

ふくでん

な

浄名経に云わく「それ汝に施さば、福田と名づけず。

なんじ くやう

さんあくどう

お

とううんぬん

もん

こころ

かしやう

汝を供養せば、三悪道に墮つ」等云々。文の心は、迦葉・

しやりほつとう

しやうそう

くやう

にんてんとう

かなら

さんあくどう

お

舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は必ず三悪道に墮つべ

しとなり。

しやうそう

ぶつだ

のぞ

にんてん

これらの聖僧は、仏陀を除きたてまつりては人天の

がんもく

いつさいしゆじやう

どうし

思

幾

にんてん

眼目・一切衆生の導師とこそおもいしに、いくばくの人天

だいえ

なか

たびたびおお

ほい無

大会の中にして、こう度々仰せられしは本意なかりしこと

せん

わ

みでし

せ

殺

なり。ただ詮ずるところは我が御弟子を責めころさんとに

ほか ござろ ににゆう がき こんき ほたるび にっこうとう むりよう  
や。この外、牛驢の二乳、瓦器・金器、螢火・日光等の無量

たと

にじよう

かしやく

たま

いちごんにごん

の譬えをとつて二乗を呵責せさせ給いき。一言二言ならず、

いちにちににち

ひとつきふたつき

いちねんにねん

いつきよう

一日二日ならず、一月二月ならず、一年二年ならず、一経

にきよう

しじゆうよねん

あいだ

むりようむへん

きようぎよう

むりよう

二経ならず、四十余年が間、無量無辺の経々に、無量の

だいえ

しよにん

たい

いちごん

許

たも

謗

たま

大会の諸人に対して一言もゆるし給うこともなくそしり給

せそん

ふもうご

われ

知

ひと

てん

いしかば、世尊の不妄語なり。我もしる、人もしる、天も

ち

いちにんににん

ひやくせんまんにん

さんがい

しよてん

しる、地もしる。一人二人ならず百千万人、三界の諸天・

りゆうじん

あしゆら

ごてん

ししゆう

ろくよく

しき

むしき

じっぼうせかい

竜神・阿修羅、五天・四洲、六欲・色・無色、十方世界よ

うんじゆう

にんてん

にじよう

だいぼさつとう

みな

知

みな

り雲集せる人天・二乗・大菩薩等、皆これをしる、また皆

聞

おのおのくにぐに

かえ

しやばせかい

しやくそん

せつぼう

これをきく。各々国々へ還つて、娑婆世界の釈尊の説法を

かれがれ

くにぐに

いちいち

語

じつぼうむへん

せかい

彼々の国々にして一々にかたるに、十方無辺の世界の

いつさいしゅじょういちにん

かしよう

しやりほつとう

ようぶじょうぶつ

ものくよう

一切衆生一人もなく、迦葉・舍利弗等は永不成仏の者、供養

悪

知

してはあしかりぬべしとしりぬ。

のちはちねん

ほけきよう

く

かえ

にじよう

しかるを、後八年の法華経にたちまちに悔い還して、二乗

さぶつ

ぶつだ説

たま

にんてんだいえ

しんこう

作仏すべしと仏陀とかせ給わんに、人天大会、信仰をなす

もち

うえ

せんご

きようぎよう

ぎもう

べしや。用いるべからざる上、先後の経々に疑網をなし、

ごじゆうよねん

せつきよう

みなこもう

せつ

五十余年の説教、皆虚妄の説となりなん。されば、

しじゆうよねん

しんじつ

あらわ

とう

きようもん

「四十余年にはいまだ真実を顕さず」等の経文はあらま

てんま ぶつだ げん のちはちねん きよう 説 たも

させか、「天魔の仏陀と現じて、後八年の経をばとかせ給う

ぎもう 実 こうく みようこう

か」と疑網するところに、げにげにしげに劫・国・名号と

もう にじようじようぶつ くに 定 こう 記 しよけ でし

申して二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子な

さだ たま きようしゆしやくそん みこと にごん

んどを定めさせ給えば、教主釈尊の御語すでに二言にな

じごそうい もう げどう ぶつだ だいもうご もの

りぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者

わら

と咲いしことこれなり。

にんてんだいえ 興 醒 とき とうほうほうじよう

人天大会きようさめてありしほどに、その時に東方宝浄

せかい たほう によらい たか ごひやくゆじゆん ひろ にひやくごじゆうゆじゆん

世界の多宝如来、高さ五百由旬、広さ二百五十由旬の

だいしつぼうとう じよう きようしゆしやくそん にんてんだいえ じごそうい

大七宝塔に乗じて、教主釈尊の、人天大会に自語相違を

責 宣 宣 宣 の たま

せめられて、とのべ、こうのべ、さまざまに宣べさせ給い

ふしん 晴 み 持 扱

しかども、不審なおはるべしとも見えぬ、もてあつかいて

とき ぶつぜん だいち ゆげん こくう 上 たも

おわせし時、仏前に大地より涌現して虚空にのぼり給う。例

あんや まんげつ とうざん い っ ぼう とう

せば、暗夜に満月の東山より出するがごとし。七宝の塔、

おおぞら 懸 たま だいち 付 おおぞら っ たま

大虚にかからせ給いて、大地にもつかず、大虚にも付かせ給

てんちゆう か ほうとう うち ほんのんじよう い

わず、天中に懸かつて、宝塔の中より梵音声を出だして

しょうみよう のたま とき ほうとう なか だいおんじよう い

証明して云わく「その時、宝塔の中より大音声を出だ

ほ のたま よ しゃかむにせそん

して、歎めて言わく『善きかな、善きかな。釈迦牟尼世尊

よ びようどうだいえ ぼさつ おし ほう ほとけ ごねん

は、能く平等大慧、菩薩を教うる法にして、仏の護念した

もうところの妙法華経をもつて、大衆のために説きたもう。

しやかむにせそん と

かくのごとし、かくのごとし。釈迦牟尼世尊の説きたもう

みな しんじつ とううんぬん

ところのごときは、皆これ真実なり』と」等云々。また云わ

とき せそん もんじゆしりとう むりようひやくせんまんおく もと

く「その時、世尊は、文殊師利等、無量百千万億の旧より

しやばせかい じゆう ぼさつないしにん ひにんとう いっさい しゆ まえ

娑婆世界に住せる菩薩乃至人・非人等、一切の衆の前にお

だいじんりき げん こうちようぜつ い

いて、大神力を現じたもう。広長舌を出だして、上梵世に

いた いっさい もうく ないしじっぽう せかい もろもろ ほうじゆ

至らしめ、一切の毛孔より乃至十方の世界の衆の宝樹の

もと ししぎ うえ しょぶつ こうちようぜつ い

下、師子座の上の諸仏もまたかくのごとく、広長舌を出だ

むりよう ひかり はな とううんぬん い じっぽう

し、無量の光を放ちたもう」等云々。また云わく「十方よ

きた

もろもろ

ふんじん

ほとけ

おのおのほんど

かえ

り来りたまえる 諸の分身の仏をして、各本土に還らし

ないしたほうぶつ

とう

かえ

もと

めんとして乃至多宝仏の塔は、還つて故のごとくしたもう

とううんぬん

べし」等云々。

だいかくせそんしよじょうどう

とき

しよぶつじつぼう

げん

しやくそん

いゆ

大覚世尊初成道の時、諸仏十方に現じて釈尊を慰諭し

たも

うえ

もろもろ

だいぼさつ

つか

はんにやきよう

おんとき

しやくそん

給う上、諸の大菩薩を遣わしき。般若経の御時は、釈尊

ちようぜつ

さんぜん

覆

せんぶつじつぼう

げん

たま

こんこうみようきよう

長舌を三千におおい、千仏十方に現じ給う。金光明経に

しほう

しぶつげん

あみだきよう

ろくまん

しよぶつ

した

さんぜん

は四方の四仏現ぜり。阿弥陀経には六方の諸仏、舌を三千に

だいじつきよう

じつぼう

もろもろ

ぶつぼさつ

だいほうぼう

集

おお。大集経には十方の諸の仏菩薩、大宝坊にあつま

れり。

ほけきよう ひ あ

勘

こうせき

これらを法華經に引き合わせてかんがうるに、黄石と

おうごん

はくうん

はくざん

はくひよう

ごんきよう

こくしよく

せいしよく

黄金と、白雲と白山と、白氷と銀鏡と、黒色と青色と

えいげん

もの

びようもく

もの

いちげん

もの

じゃげん

もの

み

違

をば、翳眼の者、眇目の者、一眼の者、邪眼の者は見たが

えつべし。

けごんきよう

せんご

きよう

ぶつごそうい

華嚴經には、先後の經なければ仏語相違なし。なににつ

たいぎ出

く

たいじつきよう

だいぼんきよう

こんこうみようきよう

けてか大疑いで来べき。大集經・大品經・金光明經・

あみだきようとう

しよしようじようきよう

にじよう

だんか

じっぼう

阿弥陀經等は、諸小乗經の二乗を弾呵せんがために十方

じようど

説

ぼんぷ

ぼさつ

ごんも

にじよう

煩

に浄土をとき、凡夫・菩薩を欣慕せしめ、二乗をわずらわ

しようじようきよう

しよだいじようきよう

いちぶん

そうい

す。小乗經と諸大乘經と一分の相違あるゆえに、ある

じつぼう ほとけげん たま じつぼう だいぼさつ 遣

いは十方に仏現じ給い、あるいは十方より大菩薩をつかわ

じつぼうせかい じつぼう 説 由 示

し、あるいは十方世界にもこの経をとくよしをしめし、あ

じつぼう しょうぶつ たも しゃくそんした さんぜん

るいは十方より諸仏あつまり給う。あるいは釈尊舌を三千

覆 しょうぶつ した 出 由 説 たま

におおい、あるいは諸仏の舌をいだすよしをとかせ給う。

しょうしようじようきよう じつぼうせかい いちぶつ あ

これひとえに、諸小乗経の「十方世界にただ一仏のみ有

説 たま 思 破 ほけきよう

り」ととかせ給いしおもいをやぶるなるべし。法華経のご

せんご しょうだいじようきよう そういしゆつたい しゃりほつとう もろもろ

とくに先後の諸大乘経と相違出来して、舍利弗等の諸

しょうもん だいぼさつ にんてんとう ま ほとけ な

の声聞・大菩薩・人天等に「はた、魔の仏と作るにあら

思 たも だいじ

ずや」とおもわれさせ給う大事にはあらず。

しかるを、華嚴・法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩、

かれがれ けごん ほつそう さんろん しんごん ねんぶつとう えいげん やから きょうぎよう ほけきよう おな 打 思 拙

彼々の経々と法華経とは同じとうちおもえるは、つたな

まなこ

き眼なるべし。

ざいせ しじゆうよねん 捨 ほけきよう 付 そうろう

ただし、在世は四十余年をすてて法華経につき候もの

ほとけ めつご きようもん かいけん しんじゆ

もやありけん。仏の滅後にこの経文を開見して信受せん

難

ことかたかるべし。

いち にぜん きょうぎよう たごん ほけきよう いちごん

まず一には、爾前の経々は多言なり、法華経は一言な

にぜん きょうぎよう たきよう きよう いっきよう かがれ

り。爾前の経々は多経なり、この経は一経なり。彼々の

経々 きょうぎよう たねん きよう はちねん ほとけ だいもうご ひと

は多年なり、この経は八年なり。仏は大妄語の人、

なが しん ふしん うえ しん た にぜん きょうぎょう

永く信ずべからず。不信の上に信を立てば、爾前の経々は

しん ほけきょう なが しん とうせい

信ずることもありなん。法華経は永く信ずべからず。当世も、

ほけきょう みなしん ほけきょう

法華経をば皆信じたるようなれども、法華経にてはなきな

ゆえ ほけきょう だいにちきょう ほけきょう けごんきょう

り。その故は、法華経と大日経と、法華経と華嚴経と、

ほけきょう あみだきょう ひとつ 様 説 ひとつ よろこ きえ

法華経と阿弥陀経と一なるようをとく人をば悦んで帰依

べつべつ もう ひとつ もち もち

し、別々なるなんど申す人をば用いず。たとい用いれども、

ほい 無 思

本意なきこととおもえり。

にちれん い にほん ぶつぽう ななひやくよねん

日蓮云わく「日本に仏法わたりてすでに七百余年、ただ

でんぎようだいしいちいにん ほけきょう 説 もう しよにん

伝教大師一人ばかり法華経をよめり」と申すをば、諸人こ

もち

ほけきよう

い

しゆみ

と

れを用いず。ただし、法華經に云わく「もし須弥を接つて、

たほう

むしゆ

ぶつど

な

お

かた

他方の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさ

ないし

ほとけめつ

のち

あくせ

なか

よ

きよう

ず乃至もし仏滅して後、悪世の中において、能くこの經を

と

すなわ

かた

とううんぬん

にちれん

ごうぎ

きようもん

説かば、これは則ち難しとなす」等云々。日蓮が強義、經文

ふごう

ほけきよう

るつう

ねはんぎよう

まつだいじよくせ

ほうぼう

には符合せり。法華經の流通たる涅槃經に「末代濁世に謗法

もの

じつぼう

ち

しようほう

もの

そうじよう

ど

の者は十方の地のごとし、正法の者は爪上の土のごとし」

説

そうろう

そうろう

にほん

しよにん

ととかれて候は、いかんがし候べき。日本の諸人は

そうじよう

ど

にちれん

じつぼう

ど

しゆい

爪上の土か、日蓮は十方の土か、よくよく思惟あるべし。

けんおう

よ

どうり勝

ぐしゆ

よ

ひどうさき

賢王の世には道理かつべし、愚主の世に非道先をすべし、

しようにん よ ほけきよう じつぎあらわ とう こころ得

聖人の世に法華經の実義顕るべし等と心うべし。

ほうもん しやくもん にぜん そうたい にぜん つよ 覚

この法門は、迹門と爾前と相對して爾前の強きようおぼ

にぜん 強 しやりほつとう もろもろ にじよう

ゆ。もし爾前つよるならば、舍利弗等の諸の二乗は

ようぶじようぶつ もの 歎 たも

永不成仏の者なるべし。いかんがなげかせ給うらん。

に きようしゆしやくそん じゆうこうだいく げん にんじゆひやくさい とき

二には、教主釈尊は、住劫第九の滅・人寿百歳の時、

し しきようおう まご じようぼんおう ちやくし どうじしつたたいし いっさい

師子頰王には孫、浄飯王には嫡子、童子悉達太子、一切

ぎじようじゆぼさつ おんとしじゆうく ごしゆつけ さんじゆうじようどう せそん

義成就菩薩これなり。御年十九の御出家、三十成道の世尊、

はじ じゃくめつどうじよう じつぼうけおう ぎしき じげん じゆうげん

始め寂滅道場にして実報華王の儀式を示現して、十玄・

ろくそう ほっかいえんゆう とんごくみみよう だいほう と たま じつぼう しようぶつ

六相・法界円融・頓極微妙の大法を説き給い、十方の諸仏も

けんげん いっさい ぼさつ うんじゅう ど き しよぶつ  
顕現し、一切の菩薩も雲集せり。土と<sup>はじ</sup>いい、機<sup>なにごと</sup>と<sup>だいほう</sup>いい、諸<sup>ひ</sup>仏<sup>たも</sup>

と<sup>きようもん</sup>いい、始めと<sup>じざいりき</sup>いい、何事につけてか大法を秘し給うべき。

されば、経文には「自在力を顕現し、円満なる経を演説す」  
とうらんぬん いちぶろくじっかん いちじいつてん えんまん きよう えんぜつ

等云々。一部六十卷は一字一点もなく円満なる経なり。譬<sup>た</sup>  
によいほうしゆ いっしゆ むりようしゆ とも おな いっしゆ まんぼう つ

えば、如意宝珠は一珠も無量珠も共に同じ、一珠も万宝を尽<sup>けごんきよう</sup>  
ふ まんしゆ まんぼう つ いちじ

くして雨らし、万珠も万宝を尽くすがごとし。華嚴経は一字  
まんじ おな こと ところ ほとけ しゆじよう

も万字もただ同じき事なるべし。「心、仏および衆生」  
もん けごんしゆう かんじん ほつそう さんろん しんごん

の文は、華嚴宗の肝心なるのみならず、法相・三論・真言・  
てんだい かんよう もう そつち

天台の肝要とこそ申し候え。

ほど

おんきよう

なにごと

かく

これら程いみじき御経に何事をか隠すべきなれども、

にじよう せんだい

じようぶつ

説

たま

瑕

見

「二乗と闡提とは成仏せず」ととかれしは珠のきずとみゆ

うえ さんしよ

はじ

しようがく

じよう

名乗

たま

る上、三処まで「始めて正覚を成ず」となのらせ給いて、

くおんじつじよう

じゆりようほん

と

隠

たま

たま

わ

久遠実成の寿量品を説きかくさせ給いき。珠の破れたると、

つき くも

懸

ひ

しよく

ふしぎ

月に雲のかかれると、日の蝕したるがごとし。不思議なり

しことなり。

あごん

ほうどう

ほんにや

だいにちきようとう

ぶつせつ

阿含・方等・般若・大日経等は、仏説なればいみじきこ

けごんきよう

対

言

甲斐

か

きよう

となれども、華嚴経にたいすればいうにかいなし。彼の経

ひ

きようぎよう

説

に秘せんこと、これらの経々にとかるべからず。されば、

もろもろ あごんきよう い はじ じようどう とううんぬん だいじつきよう

諸の阿含経に云わく「初めて成道す」等云々。大集経に

い によらいじようどう はじ じゅうろくねん とううんぬん

云わく「如来成道してより始めて十六年なり」等云々。

じようみようきよう い はじ ぶつじゆ ざ つと ま くだ

浄名経に云わく「始め仏樹に坐して、力めて魔を降す」

とううんぬん だいにちきよう い われ むかしどうじよう ざ とううんぬん

等云々。大日経に云わく「我は昔道場に坐す」等云々。

はんにや にんのうきよう い にじゅうくねん とううんぬん

般若・仁王経に云わく「二十九年」等云々。

い 足 じもく 驚

これらは言うにたらず。ただ耳目をおどろかすことは、

むりようぎきよう げごんきよう ゆいしんほっかい ほうどう はんにやきよう かいいんざんまい

無量義経に華嚴経の唯心法界、方等・般若経の海印三昧・

こんどうむにとう だいほう しんじつ

混同無二等の大法をかきあげて、あるいは「いまだ真実を

あらわ りやつこうしゆぎよう とう くだ ほど おんきよう

顕さず」、あるいは「歴劫修行」等と下す程の御経に、

われ さき どうじょうぼだいじゆ もと たんご ろくねん

「我は先に道場菩提樹の下に端坐すること六年にして、

あのかたたらさんみやくさんぼだい じょう しょじょうどう

阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と、初成道の

けこんきよう しじよう もん どう ふしぎ う おも

華嚴經の始成の文に同ぜられし、不思議と打ち思うところ

ほけきよう じよぶん しょうしゆう 言

に、これは法華經の序分なれば、正宗のことをいわずも

ほけきよう しょうしゆう りやくかいさん こうかいさん おんとき

あるべし。法華經の正宗、略開三・広開三の御時、「た

ほとけ ほとけ よ しょうぶつ じつそう くじん

だ仏と仏とのみ、いまし能く諸法の実相を究尽したまえ

とう せそん ほうひさ のち とう しょうじき ほうべん す

り」等、「世尊は法久しくして後」等、「正直に方便を捨つ」

とう たほうぶつ しゃくもんはつぽん さ みな しんじつ しょうみよう

等、多宝仏、迹門八品を指して「皆これ真実なり」と証明

なにごと かく しょうじゆりよう ひ

せられしに、何事をか隠すべきなれども、久遠寿量をば秘せ

させ給たまいて、われ「我は始め道場どうじように坐し、樹じゆを觀かんじまた經行きやうぎやうす」  
とううんぬん さいだいいち だいふしぎ  
等云々。最第一の大不思議なり。

されば、弥勒菩薩、涌出品みろくぼさつに四十余年ゆじゆつぽんの未見しじゆうよねん今見みけんこんけんの大菩薩だいぼさつ

をほとけ仏すなわ「しかして乃ちこれを教化きやうけして、初はじめて道心どうしんを發おこさ

しむ」等とうととかせ給たまいしを、疑うたがつて云いわく「如来にょらいは太子たいした

りし時とき、釈しゃくの宮みやを出いでて、伽耶城がやじやうを去さること遠とおからず、

道場どうじように坐ざして、阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいを成じやうずることを得えた

まえり。これより已来このかた、始はじめて四十余年しじゆうよねんを過すぎたり。世尊せそんよ。

いかなぞこの少時しょうじにおいて、大おおいに仏事ぶつじを作なしたまえる」等とう

うんぬん  
云々。

きようしゆしやくそん

教主釈尊、これらの疑いを晴らさんがために寿量品

うたが は

じゆりようほん

説

にぜん

しやくもん

聞

あ

のたま

をとかんとして、爾前・迹門のききを挙げて云わく

いっさいせけん

てん

にん

あしゆら

みな

いま

しやかむにぶつ

「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は

しやくし

みや

い

がやじよう

さ

とお

どうじよう

ざ

釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐

あのくたらさんみやくさんぼだい

え

おも

とううんぬん

して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり」等云々。

まさ

うたが

こた

い

ぜんなんし

われ

正しくこの疑いを答えて云わく「しかるに、善男子よ、我

じつ

じようぶつ

このかた

むりようむへんひやくせんまんおくなゆたこう

は実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫な

とううんぬん

り」等云々。

けごんないしはんにや だいにちきようとう にじようさぶつ かく

華嚴乃至般若、大日経等は、二乗作仏を隠すのみならず、

くおんじつじよう と 隠 たま

久遠実成を説きかくさせ給えり。

きようぎよう ふた とが いち ぎようふ そんな

これらの経々に二つの失あり。一には、「行布を存する

ゆえ ごん かい しゃくもん いちねんさんぜん

が故に、なおいまだ権を開せず」とて、迹門の一念三千を

隠 に しじよう い ゆえ しゃく

かくせり。二には、「始成を言うが故に、かつていまだ迹を

ひら ほんもん くおん 隠 ふた だいほう

発かず」とて、本門の久遠をかくせり。これらの二つの大法

いちだい こうこつ いっさいきよう しんずい

は、一代の綱骨、一切経の心髓なり。

しゃくもんほうべんぼん いちねんさんぜん にじようさぶつ と にぜんにしゆ

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて、爾前二種の

とがひと のが ほっしゃくけんぼん

失一つを脱れたり。しかりといえども、いまだ発迹顕本せ

実

いちねんさんぜん

顕

にじようさぶつ

さだ

ざれば、まことの一念三千もあらわれず、二乗作仏も定ま

すいちゆう

つき

み

ね

ぐさ

なみ

うえ

う

らず、水中の月を見るがごとし。根なし草の波の上に浮か

似

べるににたり。

ほんもん

しじようしようかく

破

しきよう

か

本門にいたりて始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。

しきよう

か

しきよう

いん

にぜん

しやくもん

じっかい

四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前・迹門の十界

いんが

う

ほんもん

じっかい

いんが

説

あらわ

の因果を打ちやぶって、本門の十界の因果をととき顕す。こ

すなわ

ほんいんほんが

ほうもん

くかい

むし

ぶっかい

ぐ

れ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、

ぶっかい

むし

くかい

そな

まこと

じっかいごぐ

ひやつかいせんによ

仏界も無始の九界に備わって、真の十界互具・百界千如・

いちねんさんぜん

一念三千なるべし。

顧

けごんきよう

だいじようじつぽう

あごんきよう

こうてかえりみれば、華嚴經の台上十方、阿含經の

しようしやか

ほうどう

はんにや

こんこうみようきよう

あみだきよう

だいにちきよう

小釈迦、方等・般若の、金光明經の、阿弥陀經の、大日經

とう ごんぶつとう

じゆりよう

ほとけ

てんげつ

かげ

だいしよう

等の権仏等は、この寿量の仏の天月しばらく影を大小の

うつわ

う

たも

しよしゆう

がくしやとう

ちか

じしゆう

まよ

器にして浮かべ給うを、諸宗の学者等、近くは自宗に迷い、

とお

ほけきよう

じゆりようぼん

すいちゆう

つき

じつげつ

おも

遠くは法華經の寿量品をしらず、水中の月に実月の想い

い

と

思

なわ

付

をなし、あるいは入って取らんとおもい、あるいは繩をつけ

繫

止

てんだい

てんげつ

し

ち

てつなぎとどめんとす。天台云わく「天月を識らず、ただ池

げつ

かん

とううんぬん

月のみを観ず」等云々。

にちれんあん

い

にじようさぶつ

にぜん

強

覺

日蓮案じて云わく、一乗作仏すらなお爾前づよにおぼゆ。

くおんじつじよう

似

にぜん

ゆえ

久遠実成はまたにるべくもなき爾前づりなり。その故は、

にぜん ほっけあいたい

にぜん 強

うえ にぜん

爾前・法華相對するに、なお爾前こわき上、爾前のみなら

しやくもんじゆうしほん いつこう

にぜん どう

ほんもんじゆうしほん ゆじゆつ

ず迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出・

じゆりよう

にほん

のぞ

みなしじよう

そん

そうりんさいご

寿量の二品を除いては皆始成を存せり。双林最後の

だいはつねはんきようしじつかん

ほか ほっけぜんご

しよだいじようきよう

いちじ

大般涅槃經四十卷、その外の法華前後の諸大乘經に一字

いっく

ほっしん

むしむしゆう

説

おうじん

ほうしん

けんぽん

一句もなく法身の無始無終はとけども応身・報身の顕本は

こうはく

にぜん

ほんじやく

ねほんとう

とかれず。いかんが、広博の爾前・本迹・涅槃等の

しよだいじようきよう

捨

ゆじゆつ

じゆりよう

にほん

つ

諸大乘經をばすてて、ただ涌出・寿量の二品には付くべ

き。

ほつそうしゆう もう しゆう さいてん ほとけ めつごきゆうひやくねん

されば、法相宗と申す宗は、西天に仏の滅後九百年

むじやくぼさつ もう だいろんじましま よる とそつ ないてん

に無著菩薩と申す大論師有しき。夜は都率の内院にのぼり、

みろくぼさつ たいめん いちだいししようぎよう ふしん ひる

弥勒菩薩に対面して一代聖教の不審をひらき、昼は

あゆじやくこく ほつそう ほうもん ひろ たも か みでし

阿輸舎国にして法相の法門を弘め給う。彼の御弟子は

せしん ごほう なんだ かいげんとう だいろんじ かいにちだいおうこうべ 傾

世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王頭をかた

ごてんはたほこ たお きえ しなこく げんじようさんぞう

ぶけ、五天幢を倒してこれに帰依す。尸那国の玄奘三蔵、

がっし じゆうしちねん いんどひやくさんじゆうよ くにぐに み聞

月氏にいたりて十七年、印度百三十余の国々を見ききて

しよしゆう 振 捨 しゆう かんど たいそうこうてい

諸宗をばふりすて、この宗を漢土にわたして太宗皇帝と

もう けんおう 授 たま ほう しよう こう き でし

申す賢王にさざけ給い、昉・尚・光・基を弟子として

だいじおんじ

さんびやくろくじゅうよかこく

ひろ

たも

にほんこく

大慈恩寺ならびに三百六十余箇国に弘め給う。日本国には

にんのうさんじゅうしちだいこうとくてんのう

ぎよう

どうじ

どうしようとう

習

渡

人王三十七代孝徳天皇の御宇に道慈・道昭等ならいわた

やましなでら

崇 たま

さんごくだいいち

しゅう

して山階寺にあがめ給えり。三國第一の宗なるべし。

しゅうい

はじ けごんきよう

お

ほつけ

ねはんぎよう

この宗云わく「始め華嚴経より終わり法華・涅槃経にい

むしようじよう

けつじようじよう

にじよう

なが

ほとけ

成

たるまで、無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべか

ぶつご

にごん

ひとたびようふじようぶつ

さだ

たま

うえ

らず。仏語に二言なし。一度永不成仏と定め給いぬる上は、

にちがつ

ち

お

たも

だいち

はんぶく

なが

へんがいあ

日月は地に落ち給うとも、大地は反覆すとも、永く変改有る

ほけきよう

ねはんぎよう

なか

にぜん

きようぎよう

べからず。されば、法華経・涅槃経の中にも爾前の経々に

きら

むしようじよう

けつじようじよう

まさ

突

指

じようぶつ

嫌いし無性有情・決定性を正しくついでいさして成仏すとは

説

まなこ

と

あん

ほけきよう

ねはんぎよう

とかれず。まず眼を閉じて案ぜよ。法華経・涅槃経に、

けつじようしよう

むしよううじよう

ただ

ほとけ

むじやく

せしん

決定性・無性有情、正しく仏になるならば、無著・世親

だいろんじ

げんじよう

じおん

さんぞう

にんし

見

ほどの大論師、玄奘・慈恩ほどの三蔵・人師、これをみざ

載

るべしや、これをのせざるべしや、これを信じて伝えざる

みろくぼさつ

と

なんじ

べしや、弥勒菩薩に問いたてまつらざるべしや。汝は

ほけきよう

もん

よ

てんだい

みようらく

でんぎよう

びやつけん

法華経の文に依るようなれども、天台・妙楽・伝教の僻見

しんじゆ

けん

きようもん

にぜん

を信受して、その見をもつて経文をみるゆえに、爾前に

ほけきよう

すいか

み

法華経は水火なりと見るなり」。

けごんしゆう

しんごんしゆう

ほつそう

さんろん

似

ちようか

華嚴宗と真言宗は、法相・三論にはなるべくもなき超過

しゅう

にじようさぶつ

くおんじつじよう

ほけきよう

かぎ

の宗なり。「二乗作仏・久遠実成は法華経に限らず、

けごんきよう

だいにちきよう

ふんみよう

けごんしゅう

とじゆん

ちごん

ほうぞう

華嚴経・大日経に分明なり。華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・

ちようかん

しんごんしゅう

ぜんむい

こんごうち

ふくうとう

てんだい

でんぎよう

澄観、真言宗の善無畏・金剛智・不空等は、天台・伝教に

似

こうい

ひと

うえ

ぜんむいとう

はにるべくもなき高位の人なり。その上、善無畏等は

だいにちによらい

いと乱

そうじよう

ごんげ

ひと

大日如来より糸みだれざる相承あり。これらの権化の人、

あやま

けごんきよう

いかでか誤りあるべき。したがって、華嚴経には『あるい

しやか

ぶつどう

じよう

ふかしぎこう

ふ

み

とう

は釈迦、仏道を成じてすでに不可思議劫を経と見る』等

うんぬん

だいにちきよう

われ

いつさい

ほんじよ

とううんぬん

なん

云々。大日経には『我は一切の本初なり』等云々。何ぞ、

くおんじつじよう

じゆりようほん

かぎ

たと

せいてい

かえる

たいかい

ただ久遠実成、寿量品に限らん。譬えば、井底の蝦が大海

を見ず、山左が洛中をしらざるがごとし。汝、ただ寿量

み やまがつ らくちゆう 知 なんじ じゆりよう

の一品を見て、華嚴・大日経等の諸経をしらざるか。そ

いっほん み けごん だいにちきようとう しよきよう

の上、月氏・戸那・新羅・百濟等にも一同に二乗作仏・

うえ がつし しな しんら ひやくさいとう いちどう にじようさぶつ

久遠実成は法華経に限るといふか」。

くおんじつじよう ほけきよう かぎ はちかねん きよう しじゆうよねん きようぎよう そうい

されば、八箇年の経は四十余年の経々には相違せりと

せんぱん ごはん なか ごはん

いうとも、先判・後判の中には後判につくべしといふとも、

にぜん 覚 ざいせ

なお爾前づりにこそおぼうれ。また、ただ在世ばかりなら

めつご こ ろんじ にんし おお にぜん

ばさもあるべきに、滅後に居せる論師・人師、多くは爾前づ

そつり

りにこそ候え。

ほけきよう しん

うえ よ

漸

すえ

こう法華経は信じがたき上、世もようやく末になれば、

しようけん

漸

隠

めいしや

漸

おお

せけん

あさ

聖賢はようやくかくれ、迷者はようやく多し。世間の浅き

誤

易

しゆつせ

ことすら、なおあやまりやすし。いかにいわんや、出世の

じんぼうあやま

とくし

ほうこう

そうびん

深法誤りなかるべしや。犢子・方広が聡敏なりし、なお

だいしようじようきよう

むく

まとう

りこん

ごんじつ

大小乗経にあやまてり。無垢・摩沓が利根なりし、権実

にきよう

わきま

しようほういつせんねん

うち

ざいせ

ちか

がっし

うち

二教を弁えず。正法一千年の内、在世も近く月氏の内な

しな

にほんとう

くに

りし、すでにかくのごとし。いわんや、戸那・日本等は、国

隔

おと

変

ひと こん どん

じゆみよう

ひ

もへだて、音もかわれり。人の根も鈍なり。寿命も日あさ

とん

じん

ち

ばいぞう

ほとけよ

さ

年

ひさ

ぶつきよう

し。貪・瞋・癡も倍増せり。仏世を去つてとし久し。仏経

誤

みなあやまれり。誰の智解か直かるべき。

たれ ちげ なお

ほとけねはんぎょう する のたま まっぼう しょうほう もの そうじょう

仏涅槃経に記して云わく「末法には正法の者は爪上

の土、謗法の者は十方の土」と見えぬ。法滅尽経に云わく

「謗法の者は恒河沙、正法の者は一・二の小石」と記しお

ほうぼう もの ごうがしや しょうほう もの いち に こいし する 置

き給う。千年・五百年に一人なんども正法の者ありがたか

たも せんねん ごひやくねん いちにん しょうほう もの有 難

らん。世間の罪によつて悪道に墮つる者は爪上の土、仏法

せけん つみ あくどう お もの そうじょう ど ぶつぼう

によつて悪道に墮つる者は十方の土。俗より僧、女より尼、

あくどう お もの じつぼう ど ぞく そう め あま

多く悪道に墮つべし。

おお おお あくどう お

ここに日蓮案じて云わく、世すでに末代に入つて

にちれん あん い よ まっだい い

にひやくよねん へんど しょう 受

うえげせん

うえひんどう

み

二百余年、辺土に生をうく。その上下賤、その上貧道の身

りんねろくしゆ

あいだ

にんてん

だいおう

う

ばんみん

靡

なり。輪廻六趣の間、人天の大王と生まれて万民をなびか

だいふう

しょうもく

えだ

ふ

とき

ほとけ

すこと、大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も仏にな

だいしょうじょうきよう

げぼん

ないぼん

だいぼさつ

しゆ

上

いっこう

らず。大小乗経の外凡・内凡の大菩薩と修しあがり、一劫

にこうむりようこう

へ

ぼさつ

ぎよう

た

ふたい

い

二劫無量劫を経て菩薩の行を立て、すでに不退に入りぬべ

とき

ごうじよう

あくえん

隨

ほとけ

成

知

かりし時も、強盛の悪縁におとされて仏にもならず。しら

だいつうけちえん

だいさんるい

ざいせ

漏

くおんごひやく

たいてん

ず、大通結縁の第三類の在世をもれたるか、久遠五百の退転

いま きた

ほけきよう

ぎよう

せけん

あくえん

して今に来れるか。法華経を行ぜしほどに、世間の悪縁・

おうなん

げどう

なん

しょうじょうきよう

なん

しの

王難・外道の難・小乗経の難などは忍びしほどに、

ごんたいじよう じつたいじようきよう きわ

どうしやく

ぜんどう

ほうねん

権大乘・実大乘経を極めたるようなる道綽・善導・法然

とう

あくま

み

い

もの

ほけきよう

強

褒

等がごとくなる悪魔の身に入りたる者、法華経をつよくほ

き

強

くだ

り

ふか

げ

わず

た

めあげ機をあなたがちに下し、「理は深く解は微かなり」と立

いちにん

う

ものあ

せん

なか

ひと

な

とう

て、「いまだ一人も得る者有らず」「千の中に一りも無し」等

賺

者

むりようしよう

あいだ

ごうがしや

たび

とすかししものに、無量生が間、恒河沙の度すかさされて

ごんきよう

お

ごんきよう

しようじようきよう

お

げどう

げてん

権経に堕ちぬ。権経より小乗経に堕ちぬ。外道・外典

お

けつく

あくどう

お

ふか

知

に堕ちぬ。結句は悪道に堕ちけりと、深くこれをしれり。

にほんこく

知

もの

にちれんいちにん

日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。

いちごん

もう

い

ふ

ぼ

きようだい

ししよう

こくしゆ

これを一言も申し出だすならば、父母・兄弟・師匠に国主

おうなんかなら きた

じひ

似

しゆい

の王難 必ず来るべし、いわずば慈悲なきにいたりと思惟す

ほけきよう

ねはんぎようとう

にへん

あ

み

るに、法華経・涅槃経等にこの二辺を合わせ見るに、いわ

こんじよう

こと

ごしよう

かなら

むけんじごく

お

ずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮つべし、

さんしようしまかなら

きそ

お

知

にへん

いうならば三障四魔必ず競い起こるべしとしんぬ。二辺の

うち

言

おうなんとうしゆつたい

とき

たいてん

いちど

おも

中にはいうべし。王難等出来の時は退転すべくば一度に思

とど

休

ほうとうほん

い止まるべしと、しばらくやすらいしほどに、宝塔品の

ろくなんくい

われ

ほど

しょうりき

もの

しゆみせん

投

六難九易これなり。我ら程の小力の者、須弥山はなぐとも、

われ

ほど

むつう

もの

かわ

くさ

お

ごうか

焼

我ら程の無通の者、乾ける草を負つて劫火にはやけずとも、

われ

ほど

むち

もの

ごうじや

きようぎよう

読

覚

我ら程の無智の者、恒沙の経々をばよみおぼうとも、

ほけきょう いくくいちげ まっだい たも

説

法華経は一句一偈も末代に持ちがたしととかるるは、これ

このたびごうじょう

ぼだいしん

発

たいてん

がん

なるべし。今度強盛の菩提心をおこして退転せじと願じぬ。

すで にじゅうよねん

あいだ

ほうもん

もう

ひび

つきづき

ねんねん

既に二十余年が間この法門を申すに、日々・月々・年々

なん 重

しょうしょう

なん

数 知

だいじ

なんしど

に難かさなる。少々の難はかずしらず、大事の難四度な

にど

置

おうなん

にど

及

このたび

り。二度はしばらくおく。王難すでに二度におよぶ。今度は

わ しんみょう およ

うえ でし

だんな

すでに我が身命に及ぶ。その上、弟子といい、檀那といい、

ちようもん

ぞくじん

きた

じゆうか

おこな

むほん

わずかの聴聞の俗人など来つて重科に行わる。謀反な

もの

んどの者のごとし。

ほけきょう だいし い

きょう

によらい

げん

いま

法華経の第四に云わく「しかもこの経は、如来の現に在

おんしつおお

めつど

のち

とううんぬん

すすらなおんしつおおお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」等云々。

だいに い

きよう どくじゆ しよじ

もの み

第二に云わく「経を讀誦し書持することあらん者を見て、

きようせんぞうしつ

けつこん いた

とううんぬん だいご

い いっさい

軽賤憎嫉して、結恨を懐かん」等云々。第五に云わく「一切

せけん あだおお

しん がた

とううんぬん

い

もろもろ

世間に怨多くして信じ難し」等云々。また云わく「諸の

むち ひと

あつく めりとう

あ

い

無智の人の、悪口・罵詈等するもの有らん」。また云わく

こくおう だいじん

ばらもん こじ

む

ひぼう

わ あく

「国王・大臣・婆羅門・居士に向かつて、誹謗して我が悪を

と じゃけん ひと

い

い

説いて『これ邪見の人』と謂わん」。また云わく「しばしば

ひんずい

とううんぬん

い

じようもく

がしやく

擯出せられん」等云々。また云わく「杖木・瓦石もて、こ

ちようちやく

とううんぬん

ねはんきよう

い

とき

おお

むりよう

れを打擲せん」等云々。涅槃経に云わく「その時、多く無量

げどうあ わごう とも まかだこく おう あじやせ もと ゆ

の外道有つて、和合して共に摩訶陀国の王・阿闍世の所に往

いま ひと だいたくになあ くだんしやもん いっさい

きぬ○『今、ただ一りの大悪人有り、瞿曇沙門なり○一切の

せけん あくにん りよう ゆえ ところ ゆ あつ

世間の悪人は、利養のための故に、その所に往き集まつて

けんぞく ぜん しゆ あた じゆじゆつ ちから ゆえ

眷属となり、善を修すること能わず。呪術の力の故に、

かしよう しゃりほつ もつけんれんとう じようぶく うんぬん てんだい

迦葉および舍利弗・目犍連等を調伏す』と』云々。天台云

みらい り け がた あ

わく「いかにいわんや未来をや。理、化し難きに在るなり」

とううんぬん みようらくい さわ のぞ もの おん

等云々。妙楽云わく「障りいまだ除かざる者を怨となし、

き よろこ もの しつ な とううんぬん

聞くことを喜ばざる者を嫉と名づく」等云々。

なんさんほくしち じっし かんど むりよう がくしや てんだい おんてき

南三北七の十師、漢土の無量の学者、天台を怨敵とす。

とくいつい つたな ちこう なんじ た でし さんずん  
得一云わく「咄いかな智公よ。汝はこれ誰が弟子ぞ。三寸

に足らざる舌根をもつて、覆面舌の所説を謗ず」等云々。  
た ぜつこん ふめんぜつ しょせつ ぼう とううんぬん

東春に云わく「問う。在世の時そこばくの怨嫉あり。仏  
とうしゆん い と ざいせ とき おんしつ ほとけ

滅度の後この経を説く時、何が故ぞまた留難多きや。答え  
めつど のち きやう と とき なに ゆえ るなんおお こた

て曰わく、俗に良薬口に苦しと云うがごとく、この経は  
い ぞく りようやくくち なが い きやう

五乗の異執を廃して一極の玄宗を立つ。故に、凡を斥け  
ごじよう いしゆう はい いちごく げんしゆう た ゆえ ぼん しりぞ

聖を呵し、大を排し小を破し、天魔を銘じて毒虫となし、  
しょう か だい はい しょう は てんま めい どくちゆう

外道を説いて悪鬼となし、執小を貶つて貧賤となし、菩薩  
げどう と あつき しゆうしょう そし ひんせん ぼさつ

を拙めて新学となす。故に、天魔は聞くことを悪み、外道  
はじし しんがく ゆえ てんま き にく げどう

は耳に逆らい、二乗は驚怪し、菩薩は怯行す。かくのごと

みみ さか にじよう きようけ ぼさつ こぎよう

きの徒、ことごとく留難をなす。『怨嫉多し』の言、あに唐

と るなん おんしつおお ことば むな

しからんや」等云々。顕戒論に云わく「僧統奏して曰わく

とううんぬん けんかいろん い そうとうそう

『西夏に鬼弁婆羅門有り、東土に巧言を吐く禿頭沙門あり。

せい か きべんばらもんあ とうど ぎようごん は とくずしゃもん

これ乃ち物類冥召して世間を誑惑す』等云々。論じて曰

すなわ もつるいみようしよう せけん おうわく とううんぬん ろん い

わく○昔は齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。

むかし せいちよう こうず き いま ほんちよう ろくとう み

実なるかな、法華の『いかにいわんや』は」等云々。秀句に

まこと ほつげ とううんぬん しゅうく

云わく「代を語れば則ち像の終わり末の初め、地を尋ぬれ

い よ かと すなわ ぞう お まつ はじ ち たず

ば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生・鬪諍の

とう ひがし かつ にし ひと たず すなわ ごじよく しょう とうじよう

とき きよう い おんしつ おお めつど のち

時なり。 経に云わく『なお怨嫉多し。 いわんや滅度して後

をや』。 この言、 良に以有るなり」等云々。 ことば まこと ゆえあ どううんぬん

そ しょうに きゆうじ くわ かなら ふぼ 怨 じゆうびよう  
夫れ、小児に灸治を加うれば、必ず父母をあだむ。 重病

もの りようやく 与 さだ くち なが 憂 ざいせ  
の者に良薬をあたらうれば、定めて口に苦しとうれう。 在世

然 ないし ぞうまつへんど やま やま 重 なみ なみ  
なおしかり、乃至像末辺土をや。 山に山をかさね、波に波を

量 なん なん くわ ひ ひ 増  
たたみ、難に難を加え、非に非をますべし。

ぞうほう なか てんどういちにん ほけきよう いっさいきよう 読 なんぼく  
像法の中には天台一人、法華経・一切経をよめり。 南北

怨 ちん ずいにだい せいしゆ がんぜん ぜ ひ あき  
これをあだみしかども、陳・隋二代の聖主、眼前に是非を明

らめしかば、 敵ついに尽きぬ。 像の末に伝教一人、  
かたき っ ぞう まつ でんぎよういちにん

ほけきょう いっさいきょう ぶつせつ

よ たま

なんとしちだいじ

法華経・一切経を仏説のごとく読み給えり。南都七大寺

ほうき

かんむないしさがとう

けんしゅ

われ

あき

たま

蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主、我と明らめ給い

こと

いま

まつぼう

はじ

にひやくよねん

しかば、また事なし。今、末法の始め二百余年なり。「いわ

めつど

のち

徴

とうじよう

じよ

んや滅度して後をや」のしるしに、鬪諍の序となるべきゆ

ひり

さき

じよくせ

証

め

あ

えに、非理を前として、濁世のしるしに、召し合わせられ

るざいなしいのち

及

ずして、流罪乃至寿にもおよばんとするなり。

にちれん

ほけきょう

ちげ

てんだい

でんぎよう

せんまん

されば、日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が

いちぶん

およ

なん

しの

じひ

勝

一分も及ぶことなけれども、難を忍び慈悲のすぐれたるこ

畏

抱

さだ

てん

おんはか

とはおそれをもいだきぬべし。定めて天の御計らいにも

与

ぞん

いちぶん

験

あずかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ

じゆうか

しず

かえ

ほか

わみ

よ重科に沈む。還つてこのことを計りみれば、我が身の

ほけきよう

ぎようじや

しよてんぜんじんとう

くに

捨

法華経の行者にあらざるか、また諸天善神等のこの国をす

さ

たま

うたが

てて去り給えるか、かたがた疑わし。

ほけきよう

だいご

まき

かんじほん

にじゆうぎよう

げ

しかるに、法華経の第五の巻の勸持品の二十行の偈は、

にちれん

くに

う

殆

せそん

だいもうご

日蓮だにもこの国に生まれずば、ほとうど世尊は大妄語の

ひと

はちじゆうまんおくな

ゆた

ぼさつ

だいば

こおうざい

お

人、八十万億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし。

きよう

い

もろもろ

むち

ひと

あつく

めりとう

とうじよう

経に云わく「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、刀杖・

がしやく

くわ

あ

とううんぬん

いま

よ

み

にちれん

瓦石を加うるもの有らん」等云々。今の世を見るに、日蓮よ

ほか しょそう

誰

ひと

ほけきよう

しょにん

あつく

めり

り外の諸僧、たれの人か、法華経につけて諸人に悪口・罵詈

とうじようとう

くわ

もの

にちれん

いちげ

せられ、刀杖等を加えらるる者ある。日蓮なくば、この一偈

みらいき

もうご

あくせ

なか

びく

じゃち

の未来記は妄語となりぬ。「悪世の中の比丘は、邪智にして

こころてんごく

い

びやくえ

ほう

と

よ

心諂曲なり」。また云わく「白衣のために法を説いて、世の

くぎよう

ろくつう

らかん

恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん」。

きようもん

いま

よ

ねんぶつしや

ぜんしゅう

りつしゅうとう

ほつし

これらの経文は、今の世の念仏者・禅宗・律宗等の法師

せそん

だいもうご

ひと

つね

だいしゆ

なか

あ

なくば、世尊はまた大妄語の人。「常に大衆の中に在って

ないしこくおう

だいじん

ばらもん

こじ

む

とう

いま

よ

そう

乃至国王・大臣・婆羅門・居士に向かつて」等。今の世の僧

とう

にちれん

ざんそう

るざい

きようもん

虚

い

等、日蓮を讒奏して流罪せずば、この経文むなし。また云

さくさくけんひんずい

ひんずい

とううんぬん

にちれん

わく「数々見擯出（しばしば擯出せられん）」等云々。日蓮、

ほけきよう

たびたび 流

さくさく

にじ

法華経のゆえに度々ながされずば、「数々」の二字いかんが

にじ

てんだい

でんぎよう

読

たま

せん。この二字は天台・伝教もいまだよみ給わず。いわん

よにん

まつぼう

はじ

証

くふあくせ

なか

きんげん

や余人をや。末法の始めのしるし「恐怖悪世の中」の金言の

合

にちれんいちにん

読

あうゆえに、ただ日蓮一人これをよめり。

れい

せそん

ふほうぞうきよう

しる

のたま

わ

めつご

例せば、世尊、付法蔵経に記して云わく「我が滅後

いっぴやくねん

あいくだいおう

おう

まやきよう

い

一百年に阿育大王という王あるべし」。摩耶経に云わく「我

めつごろつぴやくねん

りゆうじゆぼさつ

ひと

なんてんじく

い

が滅後六百年に竜樹菩薩という人、南天竺に出ずべし」。

だいひきよう

い

わ

めつごろくじゆうねん

までんち

もの

ち

大悲経に云わく「我が滅後六十年に末田地という者、地を

竜宮につくべし」。これら、皆、仏記のごとくなりき。し

たれ ぶつきよう しんじゆ

ほとけ くふ

からずば、誰か仏教を信受すべき。しかるに、仏、「恐怖

あくせ

のち みらいせ まつせ ほうめつ とき

のち ごひやくさい

悪世」「しかる後の未来世」「末世の法滅せん時」「後の五百歳」

しやう みよう にほん まさ とき さだ

とうせい ほつけ

なんと、正・妙の二本に正しく時を定めたもう。当世、法華

さんるい

ごうてき

たれ ぶつせつ しんじゆ

にちれん

たれ

の三類の強敵なくば、誰か仏説を信受せん。日蓮なくば、誰

ほけきよう

ぎようじや

ぶつご

助

なんさんんほくしち

をか法華経の行者として仏語をたすけん。南三北七・

しちだいじとう

ぞうほう

ほけきよう

かたき

うち

七大寺等、なお像法の法華経の敵の内、いかにいわんや、

とうせい

ぜん

りつ

ねんぶつしやとう

のが

当世の禅・律・念仏者等は脱るべしや。

きようもん

わ

みふごう

ごかんき

被

よろこ

経文に我が身符合せり。御勘気をかぼれば、いよいよ悦

増

びをますべし。

れい

例せば、

しょうじょう

小乗の菩薩の未断惑なるが、

ぼさつ

みだんわく

がんけんおごう

もう

造

願兼於業と申して、

つみ

つくりたくなき罪なれども、父母等の

ふぼとう

じごく

お

だいく

受

み

形

地獄に堕ちて大苦をうくるを見て、かたのごとくその業を

ごう

つく

ねが

じごく

お

くる

おな

く

か

造つて、願つて地獄に堕ちて苦しむに、同じ苦に代われる

よろい

とうじ

を悦びとするがごとし。これもまたかくのごとし。当時の

せ

堪

みらい

あくどう

だつ

責めはたうべくもなければ、未来の悪道を脱すらんと

思

よろい

おもえば悦びなり。

せけん

うたが

じしん

うたが

もう

ただし、世間の疑いといい、自心の疑いと申し、いか

てんたす

たま

しよてんとう

しゅごしん

ぶつぜん

ごせんごん

でか天扶け給わざるらん。諸天等の守護神は仏前の御誓言

あり。法華經の行者には、さるになりとも法華經の行者と

号 そうそう ぶつぜん ごせいごん 遂 思

ごうして、早々に仏前の御誓言をとげんとこそおぼすべき

ぎ無 わ みほけきよう ぎようじや

に、その義なきは我が身法華經の行者にあらざるか。この

うたが うたが しょ かんじん いちご だいじ 書

疑いはこの書の肝心、一期の大事なれば、処々にこれをか

うえ うたが つよ こた 構

く上、疑いを強くして答えをかまうべし。

きさつ もの こころ 約 東 違

季札といいし者は、心のやくそくをたがえじと、王の

ちようほう つるぎ じよくん はか 掛 おうじゆ ひと かわ みず

重宝たる剣を徐君が墓にかく。王寿といいし人は河の水

の きん がもく みず い こうえん ひと はら 割

を飲んで金の鵝目を水に入れ、弘演といいし人は腹をさい

しゆくん きも い けんじん おん 報

て主君の肝を入れる。これらは賢人なり。恩をほうずるなる

べし。

しやりほつ

かしようとう

だいしよう

にひやくごじゆつかい

さんぜん

いわんや、舍利弗・迦葉等の大聖は、二百五十戒・三千

いぎひと

欠

けんじ

だん

さんがい

はな

しようにん

の威儀一つもかけず、見思を断じ三界を離れたる聖人なり。

ぼんたいしよてん

どうし

いっさいしゆじよう

がんもく

しじゆうよねん

梵帝諸天の導師、一切衆生の眼目なり。しかるに、四十余年

あいだ

ようふじようぶつ

きら

捨

果

ほけきよう

が間「永不成仏」と嫌いすてはてられてありしが、法華経

ふし

ろうやく

嘗め

い

たね

お

わ

いし

あ

の不死の良薬をなめて、焦れる種の生い、破れる石の合い、

か

き

はなみ

ほとけ

成

ゆる

枯れたる木の花菓などせるがごとく、仏になるべしと許

はっそう

唱

きよう

じゆうおん

されて、いまだ八相をとなえず。いかでか、この経の重恩

報

かれがれ

けんじん

劣

をばほうぜざらん。もしほうぜずば、彼々の賢人にもおとり

ふちおん ちくしやう

もうほう かめ 襖 おん

て、不知恩の畜生なるべし。毛宝が亀はあおの恩をわすれ

こんめいち たいぎよ いのち おん

みようじゆ やちゆう

ず、昆明池の大魚は命の恩をほうぜんと明珠を夜中に

捧 ちくしやう

おん 報

ささげたり。畜生すらなお恩をほうず。いかにいわんや

だいしやう

あなんそんじや こくぼんおう じなん らごらそんじや じようぼんおう

大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅睺羅尊者は浄飯王

まご

にんちゆう いえたか うえ しようか み

じようぶつ 抑

の孫なり。人中に家高き上、証果の身となつて成仏をおさ

はちねん りようぜん せき さんがいえ とうしつぽうけ

えられたりしに、八年の霊山の席にて山海慧・蹈七宝華な

によらい ぎやう 授

たも ほけきやう

んど如来の号をささげられ給う。もし法華経ましまさずば、

家 高 だいしやう たれ くぎやう

いかにいえたかく大聖なりとも、誰か恭敬したてまつるべ

き。

か けつ いん ちゆう もう ばんじよう しゆ どもん きえ  
夏の桀・殷の紂と申すは、万乗の主・土民の帰依なり。

まつりごと 悪

よ 滅

いま

しかれども、政 あしくして世をほろぼせしかば、今に

悪 者

てほん

けつちゆう

けつちゆう

もう

げせん

わるきものの手本には「桀紂、桀紂」とこそ申せ。下賤の

もの らいびよう もの

けつちゆう

言

罵

者、癩病の者も「桀紂のごとし」といわれぬれば、のら

はら立

せんにひやく

むりよう

しようもん

ほけきよう

れたりと腹たつなり。千二百・無量の声聞は、法華経まし

たれ な

聞

こえ

なら

いっせん

まさずば、誰か名をもきくべき、その音をも習うべき。一千

しようもん

いっさいきよう

けつじゆう

み

ひと

有

の声聞、一切経を結集せりとも、見る人もよもあらじ。

ひとびと

えぞう

もくぞう

頭

ほんぞん

あお

ましてこれらの人々を絵像・木像にあらわして本尊と仰ぐ

ほけきよう

おんちから

いっさい

らん

べしや。これひとえに、法華経の御力によって一切の羅漢

きえ たも  
帰依せられさせ給うなるべし。

もろもろ

しょうもん

ほつけ

離

たま

うお

みず

諸の声聞、法華をはなれさせ給いなば、魚の水をはな

さる

き

しょうに

ちち

たみ

おう

れ、猿の木をはなれ、小児の乳をはなれ、民の王をはなれ

ほけきよう

ぎようじや

捨

たも

たるがごとし。いかでか法華経の行者をすて給うべき。

もろもろ

しょうもん

にぜん

きようぎよう

にくげん

うえ

てんげん

えげん

諸の声聞は爾前の経々にては肉眼の上に天眼・慧眼を

得

ほけきよう

ほうげん

ぶつげんそな

じつぼうせかい

う。法華経にして法眼・仏眼備われり。十方世界すらなお

しょうけん

たま

しゃばせかい

うち

照見し給うらん。いかにいわんや、この娑婆世界の中、

ほけきよう

ぎようじや

ちけん

にちれん

あくにん

法華経の行者を知見せられざるべしや。たとい、日蓮、悪人

いちごんにごん

いちねんにねん

いっこうにこうないしひやくせんまんおくこう

にて、一言二言、一年二年、一劫二劫乃至百千万億劫、こ

しょうもん

あつく

めり

たてまつ

とうじょう

くわ

これらの声聞を悪口・罵詈し奉り、刀杖を加えまいらす

いろ

ほけきょう

しんごう

ぎょうじや

捨

る色なりとも、法華経をだにも信仰したる行者ならば、す

たま

たと

ようち

ふぼ

罵

ふぼ

捨

て給うべからず。譬えば、幼稚の父母をのる、父母これをす

きょうちようはは

く

はは

はけいちち

害

つるや。梟鳥母を食らう、母これをすてず。破鏡父をがい

ちち

従

ちくしやう

だいしやう

す、父これにしたがう。畜生すら、なおかくのごとし。大聖、

ほけきょう

ぎょうじや

す

法華経の行者を捨つべしや。

しだいしょうもん

りやうげ

もん

い

われ

いま

しん

されば、四大声聞の領解の文に云わく「我らは今、真に

しょうもん

ぶつごう

こえ

いつさい

き

これ声聞なり。仏道の声をもつて、一切をして聞かしめん。

われ

いま

しん

あらかん

もろもろ

せけん

てん

にん

ま

ぼん

我らは今、真に阿羅漢なり。諸の世間、天・人・魔・梵に

おいて、あまねくその中なかにおいて、応まさに供養くようを受くべし。

世尊せそんは大恩だいおんまします。希有けうの事ことをもつて、憐愍れんみん・教化きやうけして、

我われらを利益りやくしたもう。無量億劫むりようおつこうにも、誰たれか能く報ずる者ものあ

らん。手足しゆそくもて供給くきゆうし、頭頂ずちようもて礼敬らいきようし、一切いっさいもて供養くようす

とも、皆報みなほうずること能あたわじ。もしもつて頂戴ちやうだいし、両肩りやうけんに

荷負がぶして、恒沙劫ごうじやくにおいて、心こころを尽くして恭敬くぎようし、また

美膳みぜん・無量むりようの宝衣ほうえおよび諸もろもろの臥具がぐ、種々しゆじゆの湯藥とうやくをもつて

し、牛頭梅檀ごずせんだんおよび諸もろもろの珍宝ちんぼう、もつて塔廟とうみようを起て、宝衣ほうえ

を地じに布しき、かくのごとき等とうの事じ、もつて供養くようすること

を地じに布しき、かくのごとき等とうの事じ、もつて供養くようすること

恒沙劫ごうじやくごう

ほう

あた

とううんぬん

恒沙劫においてすとも、また報ずること能わじ」等云々。

もろもろ

しょうもんとう

ぜんしみ

きようぎよう

幾

かしゃく

諸の声聞等は、前四味の経々にいくそばくぞの呵責

こうむ

にんてんだいえ

なか

ちじよく

かず

を蒙り、人天大会の中にして耻辱がましきこと、その数を

かしようそんじや

ていきゆう

こえ

さんぜん

響

しらず。しかれば、迦葉尊者の涕泣の音は三千をひびかし、

しゅぼだいそんじや

ぼうぜん

て

いっぱつ

捨

しゃりほつ

はんじき

須菩提尊者は茫然として手の一鉢をすつ。舍利弗は飯食を

吐

ふるな

がびよう

ふん

い

きり

せそん

ろくやおん

はき、富楼那は画瓶に糞を入ると嫌わる。世尊、鹿野苑に

あごんきよう

さんたん

にひやくごじゆつかい

し

おんごん

しては阿含経を讚歎し、二百五十戒を師とせよなんと慇懃

褒

たま

いま

わ

しよせつ

にほめさせ給いて、今またいつのまに我が所説をばこうは

謗

たま

にごんそうい

とが

もう

そしらせ給うと、二言相違の失とも申しぬべし。

れい せいそん だいはだつた なんじぐにん ひと つばき く  
例せば、世尊、提婆達多を「汝愚人、人の唾を食らう」

めり たま にくや むね い 思  
と罵詈せさせ給いしかば、毒箭の胸に入るがごとくおもい

恨 い くどん ぶつだ われ こくぼんおう  
て、うらみて云わく「瞿曇は仏陀にはあらず。我は斛飯王の

ちやくし あなんそんじゃ あに くどん いちるい 悪  
嫡子、阿難尊者が兄、瞿曇が一類なり。いかにあしきこと

ないないきようくん ほど にんてんだいえ  
ありとも、内々教訓すべし。これら程の人天大会に、これ

ほど たいか げん む もう 者 だいにん ぶつだ うち  
程の大禍を現に向かつて申すもの、大人・仏陀の中にある

さきざき め 敵 いま いちざ  
べしや。されば、先々は妻のかたき、今は一座のかたき、今日

しょうじようせ ぜ だいおんてき ちか  
よりは生々世々に大怨敵となるべし」と誓いしぞかし。

おも いまもろもろ だいしようもん もと げどう  
これをもつて思うに、今諸の大声聞は、本、外道・

ばらもん いえ

もろもろ

げどう

ちようじゃ

婆羅門の家より出でたり。また諸の外道の長者なりしか

しよおう きえ

もろもろ

だんな

尊

ば、諸王に帰依せられ、諸の檀那にたつとまる。あるい

すじようこうき ひと

ふふくじゆうまん

輩

は種姓高貴の人もあり、あるいは富福充満のやからもあり。

かれがれ えいかんとう

打 捨

まんしん

はたほこ

たお

しかるに、彼々の栄官等をうちすて、慢心の幢を倒して、

ぞくふく

ぬ

えじき

ふんえ

み

纏

びやくほつ

きゆうせんとう

俗服を脱ぎ壊色の糞衣を身にまとい、白扨・弓箭等をう

いっぱつ

て

握

びんにん

こつがい

ちすてて一鉢を手ににぎり、貧人・乞丐なんどのごとくし

せそん

たてまつ

ふうう

ふせ

いえ

しんみよう

続

て世尊につき奉り、風雨を防ぐ宅もなく、身命をつぐ

えじきぼうしよう

有 様

ごてんしかい

みなげどう

でし

衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海、皆外道の弟子

だんな

ほとけ

くおう

だいなん

たも

だいは

檀那なれば、仏すら九横の大難にあい給う。いわゆる、提婆

たいせき 飛

あじやせおう すいぞう はな

あぎたおう

が大石をとばせし、阿闍世王の醉象を放ちし、阿耆多王の

めみやく ばらもんじよう

漿

旃

遮

ばらもんじよ

はち

はら

伏

馬麦、婆羅門城のこんず、せんしや婆羅門女が鉢を腹にふせ

しよけ

でし

すなんもう

し。いかにいわんや、所化の弟子の数難申すばかりなし。

むりよう

しゃくし

はるりおう

ころ

せんまん

けんぞく

すいぞう

踏

無量の釈子は波瑠璃王に殺され、千万の眷属は醉象にふま

けしきびくに

だいば

害

かるだいそんじや

ばふん

埋

れ、華色比丘尼は提婆にがいせられ、迦盧提尊者は馬糞にう

もつけんそんじや ちくじよう

ずまれ、目捷尊者は竹杖にがいせらる。

うえ

ろくしどうしん

あじやせ

はしのくおうとう

ざんそう

い

その上、六師同心して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して云わ

くどん

えんぶだいいち

だいくにん

かれ

至

ところ

さんさい

く「瞿曇は閻浮第一の大悪人なり。彼がいたる処は三災

しちなん

さき

たいかい

しゆる

集

だいせん

しゆもく

七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木をあつめ

くどん

しゅあく

たるがごとし。瞿曇がところには衆悪をあつめたり。いわ

かしよう

しやりほつ

もくれん

しゅぼだいとう

じんしん

う

もの

ゆる迦葉・舍利弗・目連・須菩提等なり。人身を受けたる者

ちゅこう

さき

かれ

くどん

賺

ふぼ

は忠孝を先とすべし。彼らは瞿曇にすかされて、父母の

きようくん

もち

いえ

出

おうぼう

せん

背

さんりん

教訓をも用いず家をいで、王法の宣をもそむいて山林に

至

いっごく

あと

留

もの

てん

いたる。一国に跡をとどむべき者にはあらず。されば、天に

にちがつ

しゅしやう

へん

ち

しゅやう

は日月・衆星、変をなす。地には衆天さかなり」など

訴

た

覚

打

添

うつつたう。堪うべしともおぼえざりしに、またうちそう

禍

ぶつだ

打

傍

にんてん

わざわいと、仏陀にもうちそいがたくてありしなり。人天

だいえ

しゅえ

みざり

よりよいかしやく

みこえ

聞

大会の衆会の砌にて時々呵責の音をききしかば、いかに

あるべしともおぼえず。ただあわつる心のみなり。

うえ だい だいなん だいいち

じようみようきよう

なんじ

その上、大の大難の第一なりしは、浄名経の「それ汝

ほどこ

ふくでん な

なんじ

くよう

さんあくどう

お

に施さば、福田と名づけず。汝を供養せば、三悪道に墮つ

とううんぬん もん

こころ

ほとけあんらおん

もう

等云々。文の心は、仏菴羅苑と申すところにおわせしに、

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

してん

さんがい

しよてん

ちじん

りゆうじんとう

むしゆ

梵天・帝釈・日月・四天・三界の諸天・地神・竜神等、無数

ごうじや

だいえ

なか

のたま

しゆぼだいとう

びくとう

くよう

恒沙の大会の中にして云わく「須菩提等の比丘等を供養せ

てんにん

さんあくどう

お

打

聞

てんにん

ん天人は三悪道に墮つべし」。これらをうちきく天人、これ

しやうもん

くよう

せん

ほとけ

みこと

らの声聞を供養すべしや。詮ずるところは、仏の御言を

もろもろ

にじよう

せつがい

たも

み

こころ

もつて諸の二乗を殺害せさせ給うかと思ゆ。心あらん

ひとびと ほとけ

疎

ひとびと

ほとけ

人々は仏をもうとみぬべし。されば、これらの人々は、仏

くよう

序

しんみよう

たす

を供養したてまつりしついでにこそ、わずかの身命をも扶

たま

けさせ給いしか。

こと ところ

あん

しじゆうよねん

きようぎよう

説

されば、事の心を案ずるに、四十余年の経々のみとか

ほつけはちかねん

しよせつ

ごにゆうめつ

たま

れて、法華八箇年の所説なくて御入滅ならせ給いたらまし

たれ ひと

そんじゃ

くよう

たてまつ

げんしん

かば、誰の人かこれらの尊者をば供養し奉るべき。現身に

がきどう

餓鬼道にこそおわすべけれ。

しじゆうよねん

きようぎよう

とうしゆん

だいにちりん

かんぴよう

しかるに、四十余年の経々をば、東春の大日輪、寒氷

しょうめつ

むりよう

そうろ

だいふう

れいらく

を消滅するがごとく、無量の草露を大風の零落するがごと

いちごんいちじ

しんじつ

あらわ

う

消

だいふう

く、一言一時に「いまだ真実を顕さず」と打ちけし、大風

こくうん

卷

おおぞら

まんげつ

しよ

せいてん

にちりん

の黒雲をまき、大虚に満月の処するがごとく、青天に日輪の

か

たも

せそん

ほうひさ

のち

かなら

まさ

懸かり給うがごとく、「世尊は法久しくして後、要ず当に

しんじつ

と

て

たま

けこうによらい

こうみよう

真実を説きたもうべし」と照らさせ給いて、華光如来・光明

によらいとう

しやりほつ

かしようとう

かっかく

にちりん

めいめい

げつりん

如来等と、舍利弗・迦葉等を赫々たる日輪、明々たる月輪の

ほうぶん

記

ききよう

う

そうら

ごとく鳳文にしるし、亀鏡に浮かべられて候えばこそ、

によらい

めつご

にんてん

しよだんなとう

ぶっだ

あお

たま

如来の滅後の人天の諸檀那等には仏陀のごとくは仰がれ給

いしか。

みず澄

つきかげ

惜

かぜ吹

そうもく

靡

水すまば、月影をおしむべからず。風ふかば、草木なびか

ほけきよう ぎようじや

しようじや

ざるべしや。法華經の行者あるならば、これらの聖者は、

だいか なか 過 たいせき なか 通 訪 たも

大火の中をすぎても、大石の中をとおりても、とぶらわせ給

かしよう にゆうじよう

うべし。迦葉の入定もことにこそよれ、いかにとなりぬ

訝 もう ouchi gohiyakusai 当

るぞ。いぶかしくも申すばかりなし。「後の五百歳」のあた

こうせんるふ もうご にちれん ほけきよう

らざるか、「広宣流布」の妄語となるべきか、日蓮が法華經

ぎようじや ほけきよう きようない くだ べつでん しよう

の行者ならざるか。法華經を教内と下して別伝と称する

だいもうご もの 守 たま しゃへいかくほう さだ ほけきよう

大妄語の者をまぼり給うべきか。捨閉閣抛と定めて「法華經

もん 閉 かん 抛 彫 付 ほつけどう うしな

の門をとじよ、巻をなげすてよ」とえりつけて法華堂を失

もの しゆご たま ぶつぜん ちか

える者を守護し給うべきか。仏前の誓いはありしかども、

じよくせ だいなん 激 見 しょうてんくだ たま にちがつ

濁世の大難のはげしさをみて、諸天下り給わざるか。日月、

てん しゅみせん 今 崩 うみ しお ぞうげん

天にまします。須弥山いまもくずれず。海の潮も増減す。

しき 形 違

四季もかたのごとくたがわず。いかになりぬるやらんと、

たいぎ 積 そろろう

大疑いよいよつもり候。

しょうだいぼさつ てんにんとう にぜん きょうぎよう

また諸大菩薩・天人等のごときは、爾前の経々にして

きべつ 得 すいちゆう つき と

記別をうるようなれども、水中の月を取らんとするがごと

かげ たい 思 色 形

く、影を体とおもうがごとく、いろかたちのみあつて実義も

ほとけ ごおん ふか ふか

なし。また仏の御恩も深くて深からず。

せそん しょうじょうどう とき せつきよう ほうえ

世尊初成道の時は、いまだ説教もなかりしに、法慧

ぼさつ くどくりんぼさつ こんごうどうぼさつ こんごうどうぼさつ こう

菩薩・功德林菩薩・金剛幢菩薩・金剛藏菩薩等なんと申せ

ろくじゅうよ だいぼさつ じつぼう しよぶつ こくど きようしゆしやくそん

し六十余の大菩薩、十方の諸仏の国土より教主釈尊の

みまえ きた たま げんじゆぼさつ げだつがつとう ぼさつ こ

御前に来り給いて、賢首菩薩・解脱月等の菩薩の請いに

赴 じゆうじゆう じゆうぎよう じゆうえこう じゆうじとう ほうもん と

おもむいて、十住・十行・十回向・十地等の法門を説

たま だいぼさつ と ほうもん しやくそん

き給いき。これらの大菩薩の説くところの法門は、釈尊に

なら じつぼうせかい もろもろ ぼんてんとう きた

習いたてまつるにあらず。十方世界の諸の梵天等も来つ

ほう 説 しやくそん 習 そう けごん

て法をとく、また釈尊にならいたてまつらず。総じて華嚴

えぎ だいぼさつ てんりゆうとう しやくそんいぜん ふ しぎげだつ じゆう

会座の大菩薩・天竜等は、釈尊已前に不思議解脱に住せ

だいぼさつ しやくそん かこ いんい みでし

る大菩薩なり。釈尊の過去、因位の御弟子にやあるらん、

じつぼうせかい せんぶつ みでし

いちだいきょうしゆ

十方世界の先仏の御弟子にやあるらん、一代教主、

しじょうしようがく ほとけ でし

始成正覚の仏の弟子にはあらず。

あごん ほうどう はんにか とき しきょう ほとけ と たま とき

阿含・方等・般若の時、四教を仏の説き給いし時こそ、

みでし しゆつたい そうら ほとけ じせつ

ようやく御弟子は出来して候え。これもまた、仏の自説

しろうせつ ほうどう はんにか

なれども正説にはあらず。ゆえいかんとなれば、方等・般若

べつ えんにきょう けごんきょう べつ えんにきょう ぎしゆ 出 か

の別・円二教は華嚴経の別・円二教の義趣をいはず。彼の

べつ えんにきょう きょうしゆしやくそん べつ えんにきょう ほうえとう

別・円二教は教主釈尊の別・円二教にはあらず、法慧等の

だいぼさつ べつ えんにきょう だいぼさつ ひとめ ほとけ

大菩薩の別・円二教なり。これらの大菩薩は、人目には仏

みでし み ほとけ おんし 言

の御弟子かとは見ゆれども、仏の御師ともいいぬべし。

せそん か ぼさつ しよせつ ちようもん ちほつ のち かさ

世尊、彼の菩薩の所説を聴聞して智発して後、重ねて

ほうどう はんになや べつ えん 説 いろ 変 げごんきよう べつ えん

方等・般若の別・円をとけり。色もかわらぬ華嚴経の別・円

にきよう だいぼさつ しやくそん し

二教なり。されば、これらの大菩薩は釈尊の師なり。

げごんきよう ぼさつ 数 ぜんちしき 説

華嚴経にこれらの菩薩をかずえて善知識ととかれしはこ

ぜんちしき もう いくこうし いくこうでし

れなり。善知識と申すは、一向師にもあらず一向弟子にも

ぞう つうにきよう べつ えん しりゆう

あらずあることなり。蔵・通二教はまた別・円の枝流なり。

べつ えんにきよう ひと かなら ぞう つうにきよう ひと し

別・円二教をしる人、必ず蔵・通二教をしるべし。人の師

もう でし こと おし し そうろう

と申すは、弟子のしらぬ事を教えたるが師にては候なり。

れい ほとけ まえ いったい になてん げどう にてんさんせん でし

例せば、仏より前の一切の人天・外道は二天三仙の弟子な

きむうじむう(しゆ)

りゆうは

さんせん

けん

い

り。九十五種まで流派したりしかども、三仙の見を出でず。

きようしゆしやくそん

なら

つた

げどう

でし

教主釈尊も、かれに習い伝えて外道の弟子にてまませ

くぎよう

らくぎようじゆうにねん

とき

く

くう

むじよう

むが

り

しが、苦行・楽行十二年の時、苦・空・無常・無我の理を

覚い

げどう

でし

な

はな

たま

さとり出だしてこそ外道の弟子の名をば離れさせ給いて、

むしち

名乗

たま

にんてん

だいし

あお

無師智とはなひらせ給いか。また人天も大師とは仰ぎま

ぜんしみ

あいだ

きようしゆしやくそん

ほうえぼさつ

いらせしか。されば、前四味の間は、教主釈尊、法慧菩薩

とう みでし

れい

もんじゆ

しやくそんきゆうだい

おんし

もう

等の御弟子なり。例せば、文殊は釈尊九代の御師と申す

しよきよう

いちじ

と

説

たも

がごとし。つねは諸経に「一字も説かず」ととかせ給うも

これなり。

ほとけおんとししちじゅうに

とし

まかだいこくりようじゆせん

もう

やま

仏御年七十二の年、摩竭提国靈鷲山と申す山にして

むりようぎきよう

たま

しじゅうよねん

きようぎよう

無量義経をとかせ給いしに、四十余年の経々をあげて、

しよう

なか

収

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

枝葉をばその中におさめて「四十余年にはいまだ真実を顕

う

け

たも

とき

しよだいぼさつ

しよ

さず」と打ち消し給うはこれなり。この時こそ諸大菩薩・諸

てんにんとう

じつぎ

しよう

もう

むりようぎきよう

天人等はあわてて実義を請ぜんとは申せしか。無量義経に

じつぎ

思

いちごん

実

て実義とおぼしきこと一言ありしかども、いまだまことな

たと

つき

い

たいとうざん

隠

ひかり

し。譬えば、月の出でんとして、その体東山にかくれて光

せいざん

およ

しよにんつき

たい

み

西山に及べども、諸人月の体を見ざるがごとし。

ほけきようほうべんぼん

りやくかいさんけんいち

とき

ほとけりやく

いちねんさんぜん

法華経方便品の略開三顯一の時、仏略して一念三千、

しんちゆう ほんかい の たも はじ

心中の本懐を宣べ給う。始めのことなれば、ほととぎすの

こえ 寝 もの ひとこえ 聞 つき やま なか

音をねおびれたる者の一音ききたるがように、月の山の半

い うすぐも 覆 幽

ばをば出でたれども薄雲のおおえるがごとくかそかなりし

しやりほつとうおどろ もろもろ てん りゆうじん だいぼさつとう 催

を、舍利弗等驚いて諸の天・竜神・大菩薩等をもよお

もろもろ てん りゆうじんとう かずごうじや ほとけ

して、「諸の天・竜神等は、その数恒沙のごとし。仏を

もと もろもろ ぼさつ だいしゆはちまん あ もろもろ まんおくこく

求むる諸の菩薩は、大数八万有り。また諸の万億国の

てんりんじようおう いた がつしよう きようしん ぐそく どう き

転輪聖王は至れり。合掌し敬心をもつて、具足の道を聞

ほつ とう しょう もん 二二二

きたてまつらんと欲す」等とは請ぜしなり。文の心は、

しみさんきよう しじゆうよねん あいだ 聞 ほうもん 承

四味三教、四十余年の間、いまだきかざる法門うけたま

しよう

わらんと請ぜしなり。

もん

ぐそく

どう

き

ほつ

もう

この文に「具足の道を聞きたてまつらんと欲す」と申す

だいきよう

い

さ

ぐそく

ぎ

な

とううんぬん

むえ

は、大経に云わく「薩とは具足の義に名づく」等云々。無依

むとくだいじようしろんげんぎき

い

さ

やく

ろく

い

無得大乘四論玄義記に云わく「沙とは訳して六と云う。

こほう

ろく

ぐそく

ぎ

とううんぬん

きちぞう

しよ

胡法には六をもつて具足の義となすなり」等云々。吉蔵の疏

い

さ

ほん

ぐそく

とううんぬん

てんだい

げんぎ

に云わく「沙とは翻じて具足となす」等云々。天台、玄義の

はち

い

さ

ほんご

みよう

ほん

とううんぬん

八に云わく「薩とは梵語、ここには妙と翻ずるなり」等云々。

ふほうぞう

だいいじゆうさん

しんごん

けごん

しよしゆう

がんそ

ほんじ

ほううん

付法蔵の第十三、真言・華嚴・諸宗の元祖、本地は法雲

じざいおうによらい

しやく

りゆうみようぼさつ

しよじ

だいいしよう

だいちどろんせんかん

自在王如来、迹に竜猛菩薩、初地の大聖、大智度論千卷

の肝心かんじんに云いわく「薩さとは六ろくなり」等とううんぬん云々。妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと申もう

かんご

がっし

さだるまふんだりきやそたらんもう

すは漢語かんごなり。月支がっしには薩達磨分陀利迦蘇多攬さだるまふんだりきやそたらんと申す。

ぜんむいさんぞう

ほけきやう

かんじんしんごん

い

のうまくさんまんだ

善無畏三蔵ぜんむいさんぞうの法華經ほけきやうの肝心真言かんじんしんごんに云いわく「曩謨三曼陀

ぼだなん きみようふぶつだ

おん

さんじんによらい

あああんなく

かいじごにゆう

没駄南ぼだなん帰命普仏陀きみようふぶつだ、唵おん三身如来さんじんによらい、阿阿暗悪あああんなく開示悟入かいじごにゆう、

さるばぼだ

いつさいぶつ

きのう

ち

さきしやびや

けん

ぎやぎやのう

薩縛勃陀さつばくはくた一切仏いつさいぶつ、枳擻きのう知ち、娑乞葛毘耶さきしやびや見けん、誑々曩

さんそば

によくうしやう

あらししやに

りじんそう

さつりだるま

しやうほう

三娑縛さんそば如虚空性によくうしやう、羅乞叉儼あらししやに離塵相りじんそうなり、薩哩達磨さつりだるま正法

ふんだりきや

びやくれんげ

そたらん

きやう

じや

にゆう

うん

へん

なり、浮陀哩迦ふんだりきや白蓮華びやくれんげ、蘇駄覽そたらん經きやう、惹じや入にゆう、吽うん遍へん、

ばん

さ

こく

かんき

ぼざら

けんご

あらししやまん

おうご

うん

鑿ばん作さ、発こく歡喜かんき、縛日羅ぼざら堅固けんご、羅乞叉給あらししやまん擁護おうご、吽うん

くうむそうむがん

そわか

けつじようじようじゆ

しんごん

なんてんじく

空無相無願くうむそうむがん、娑婆訶そわか決定成就けつじようじようじゆ。この真言しんごんは南天竺なんてんじく

てつとう なか ほけきよう かんじん しんごん しんごん なか  
の鉄塔の中の法華經の肝心の真言なり。この真言の中に

さつりだるま もう しようほう さ もう しよう  
「薩哩達磨」と申すは正法なり。薩と申すは正なり。正

みよう みよう しよう しようほつけ みようほつけ  
は妙なり、妙は正なり。正法華、妙法華これなり。また

みようほうれんげきよう かみ なむ にじ 置 なんみようほうれんげきよう  
妙法蓮華經の上に南無の二字をおけり。南無妙法蓮華經こ

れなり。

みよう ぐそく ろく ろくどまんぎよう もろもろ ぼさつ ろくどまんぎよう  
妙とは具足、六とは六度万行、諸の菩薩の六度万行を

ぐそく 様 聞 思 ぐ じっかいごぐ そく もう  
具足するようをきかんとおもふ。具とは十界互具、足と申す

いつかい じっかい とうい よかい まんぞく ぎ  
は一界に十界あれば当位に余界あり、満足の義なり。この

きよういちぶはつかんにじゆうはつぼんろくまんきゆうせんさんびやくはちじゆうしじ いちいち みなみよう  
經一部八卷二十八品六万九千三百八十四字、一々に皆妙

いちじ そな さんじゆうにそうはちじつしゆこう ぶつだ じっかい みな  
の一字を備えて三十二相八十種好の仏陀なり。十界に皆  
こかい ぶっかい あらわ みようらくい ぶっか ぐ よか  
己界の仏界を顕す。妙楽云わく「なお仏果を具す。余果も  
またしかり」等云々。 とううんぬん

ほとけ

こた のたま

しゆじよう

ぶっちけん

ひら

仏これを答えて云わく「衆生をして仏知見を開かしめ

ほつ

とううんぬん

しゆじよう

もう

しやりほつ

しゆじよう

もう

んと欲す」等云々。衆生と申すは舍利弗、衆生と申すは

いっせんだい

しゆじよう

もう

くほうかい

しゆじようむへんせいがんど

一闍提、衆生と申すは九法界。衆生無辺誓願度、ここに

まんぞく

われ

もとせいがん

た

いっさい

しゆ

わ

満足す。「我は本誓願を立てて、一切の衆をして、我がごと

ひと

ひと

ほつ

わ

むかし

く等しくして異なることなからしめんと欲しき。我が昔の

ねが

いま

まんぞく

とううんぬん

願いしところのごときは、今、すでに満足しぬ」等云々。

しよだいぼさつ

ほうもん

りょうげ

い

われ

諸大菩薩・諸天等、この法門をきいて領解して云わく「我

むかし

このかた

せそん

せつ

き

らは昔より来、しばしば世尊の説を聞きたてまつるに、

じんみよう

じようほう

き

とううんぬん

いまだかつてかくのごとき深妙の上法を聞かず」等云々。

でんぎようだいしい

われ

むかし

このかた

せそん

せつ

伝教大師云わく「我らは昔より来、しばしば世尊の説

き

むかしほけきよう

まえ

けごんとう

だいほう

を聞きたてまつるに』とは、昔法華経の前に華嚴等の大法

と き

い

を説くを聞けども、と謂うなり。『いまだかつてかくのごと

じんみよう

じようほう

き

ほけきよう

ゆいいちぶつじよう

き深妙の上法を聞かず』とは、いまだ法華経の唯一仏乗

おし

き

い

とううんぬん

けごん

ほうどう

はんにや

の教えを聞かざるを謂うなり」等云々。華嚴・方等・般若・

じんみつ

だいにちとう

ごうがしや

しよだいじようきよう

いちだい

かんじん

深密・大日等の恒河沙の諸大乘経は、いまだ一代の肝心た

いちねんさんぜん たいこう こつずい にじようさぶつ くおんじつじようとう  
る一念三千の大綱・骨髓たる二乗作仏・久遠実成等をいま  
聞きょうげ  
だきかずと領解せり。

かいもくしやうげ  
開目抄下

いま もろもろ だいぼさつ ほんたい にちがつ してんとう  
また今よりこそ、 諸の大菩薩も梵帝・日月・四天等も

きやうしゆしやくそん みでし そうち  
教主釈尊の御弟子にては候え。されば、宝塔品には、こ

だいぼさつ ほとけわ みでしとう 思  
れらの大菩薩を仏我が御弟子等とおぼすゆえに、諫曉し

のたま もろもろ だいしゆ つ われめつど のち たれ よ  
て云わく「諸の大衆に告ぐ。我滅度して後、誰か能くこ

きよう じ ぞくじゆ いま ぶつぜん みずか せいごん と

の経を護持し読誦せん。今、仏前において、自ら誓言を説

強 おお くだ もろもろ だいぼさつ たと

け」とはしたたかに仰せ下せしか。また諸の大菩薩も「譬

だいふう しようじゆ えだ ふ とう きちじようそう だいふう

えば大風の小樹の枝を吹くがごとし」等と、吉祥草の大風

したが かすい だいかい ひ ほとけ したが

に随い、河水の大海へ引くがごとく、仏には随いまいら

せしか。

りようぜん ひあさ ゆめ 現

しかれども、靈山日浅くして夢のごとく、うつつならず

しようぜん ほうとう うえ きご ほうとう じっぼう

ありしに、証前の宝塔の上に起後の宝塔あつて、十方の

しよぶつらいじゆう みなわ ふんじん 名乗 たま ほうとう

諸仏来集せる、皆我が分身なりとなのらせ給い、宝塔は

こくう しゃか たほうぎ なら にちがつ せいてん びようしゆつ

虚空に、釈迦・多宝坐を並べ、日月の青天に並出せるが

ごとし。人天大会は星をつらね、分身の諸仏は大地の上、

ほうじゆ もと しし 床

宝樹の下の師子のゆかにまします。

けこんきよう れんげぞうせかい じつぽう しど ほうぶつ おのおの くにぐに

華嚴経の蓮華蔵世界は、十方・此土の報仏、各々に国々に

か かい ほとけ ど きた ふんじん 名乗

して、彼の界の仏この土に来て分身となならず、この界

ほとけ か かい 行 ほうえとう だいぼさつ たが らいえ

の仏彼の界へゆかず、ただ法慧等の大菩薩のみ互いに来会

だいにちきよう こんごうちようきようとう はちようくそん さんじゆうしちそんとう

せり。大日経・金剛頂経等の八葉九尊・三十七尊等、

だいにちによらい けしん 見 けしん さんじんえんまん こぶつ

大日如来の化身とはみゆれども、その化身、三身円満の古仏

だいぼんきよう せんぶつ あみだきよう ろくまん しょうぶつ

にあらず。大品経の千仏、阿弥陀経の六方の諸仏、いまだ

らいじゆう ほとけ だいじつきよう らいじゆう ほとけ ふんじん

来集の仏にあらず。大集経の来集の仏また分身ならず。

こんこうみようきよう しほう しぶつ けしん そう いつさいきよう なか

金光明経の四方の四仏は化身なり。総じて一切経の中に

かくしゆかくぎよう さんじんえんまん しよぶつ あつ わ ふんじん 説

各修各行の三身円満の諸仏を集めて我が分身とはとかれ

ず。

じゆりようぼん おんじよ しじようしじゆうよねん しやくそん いつこう

これ寿量品の遠序なり。始成四十余年の釈尊、一劫・

じつこうとういぜん しよぶつ あつ ふんじん 説 びようどういしゆ

十劫等已前の諸仏を集めて分身ととかる。さすが平等意趣

似 驚 しじよう ほとけ

にもにず、おびただしくおどろかし。また始成の仏ならば

しよけじつぼう じゆうまん ふんじん とく そな

所化十方に充満すべからざれば、分身の徳は備わりたりと

じげん 益 てんだい ふんじんすで おお まさ

も示現してえきなし。天台云わく「分身既に多ければ、当に

し じようぶつ ひき とううんぬん だいえ 驚

知るべし、成仏の久しきことを」等云々。大会のおどろき

し意をかかれたり。

うえ じゆせんがい だいぼさつ だいち しゆつたい しゃくそん

その上に、地涌千界の大菩薩、大地より出来せり。釈尊

だいいち みどし 思 ふげん もんじゆとう 似

に第一の御弟子とおぼしき普賢・文殊等にもにるべくもな

けごん ほうどう ほんにや ほけきよう ほうとうほん らいじゆう だいぼさつ

し。華嚴・方等・般若・法華經の宝塔品に來集せる大菩薩、

だいにちきようとう こんごうさつたとう じゆうろくだいぼさつ ぼさつ

大日經等の金剛薩埵等の十六大菩薩なんども、この菩薩

たいとう みこう むら なか たいしゃく きた たも

に對当すれば、獼猴の群がる中に帝釈の來り給うがごとし。

やまがつ げっけいとう 交 異 ふしよ みろく

山人に月卿等のまじわれるにことならず。補処の弥勒すら、

めいわく いげ

なお迷惑せり。いかにいわんや、その已下をや。

せんせかい だいぼさつ なか しにん だいしよう

この千世界の菩薩の中に四人の大聖まします。いわゆ

じようぎよう むへんぎよう じようぎよう あんりゆうぎよう

しにん こくう

る上行・無辺行・浄行・安立行なり。この四人は虚空・

りようぜん しよだいぼさつとう まなこ

合

こころ

及

けごんきよう

靈山の諸大菩薩等、眼もあわせ、心もおよばず。華嚴經

しほさつ だいにちきよう

しほさつ

こんごうちようきよう

じゅうろくだいぼさつとう

の四菩薩、大日經の四菩薩、金剛頂經の十六大菩薩等も、

ぼさつ たい

えいげん

者

にちりん

み

この菩薩に対すれば、翳眼のものの日輪を見るがごとく、

あま こうてい

む

たてまつ

たいこうとう

しせい

しゅちゆう

海人が皇帝に向かい奉るがごとし。太公等の四聖の衆中

似

しやうざん

しこう

けいてい

つか

異

にありしにいたり。商山の四皓が恵帝に仕えしにことなら

ぎぎ どうどう

そんこう

しやか

たほう

じつぼう

ふんじん

のぞ

ず。巍々堂々として尊高なり。釈迦・多宝・十方の分身を除

いつさいしめじよう

ぜんちしき

恃

たてまつ

いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし。

みろくぼさつ

こころ

ねんごん

われ

ほとけ

たいし

おんとき

弥勒菩薩、心に念言すらく「我は、仏の太子の御時よ

さんじゆうじようどう

いま りようぜん

しじゆうにねん

あいだ

かい

り、三十成道、今の靈山まで四十二年が間、この界の

ぼさつ じつぼうせかい

らいじゆう

もろもろ

だいぼさつ

みな知

菩薩、十方世界より来集せし諸の大菩薩、皆しりたり。

じつぼう

じようえど

おんつか

われ ゆげ

また十方の淨穢土に、あるいは御使い、あるいは我と遊戯

くにぐに

だいぼさつ

けんもん

だいぼさつ

おんし

して、その国々に大菩薩を見聞せり。この大菩薩の御師な

ほとけ

しやか

んどは、いかなる仏にてやあるらん。よも、この釈迦・

たほう

じつぼう

ふんじん

ぶつだ

似

ほとけ

多宝・十方の分身の仏陀にはにるべくもなき仏にてこそお

あめ

たけ

み

りゆう

だい

知

はな

だい

わすらめ。雨の猛きを見て竜の大なることをしり、華の大

み

いけ

深

知

だいぼさつ

なるを見て池のふかきことはしんぬべし。これらの大菩薩

きた

くに

たれ

もう

ほとけ

会

の来れる国、また誰と申す仏にあいたてまつり、いかなる

だいほう なら しゅ たも うたが  
大法をか習い修し給うらん」と疑わし。

あまりの不審しさに音をもいだすべくもなければども、

ぶつりき

みろくぼさつうたが

い

むりようせんまんんおく

仏力にやありけん、弥勒菩薩疑つて云わく「無量千万億

だいしゅ

もろもろ

ぼさつ

むかし

み

大衆の諸の菩薩は、昔よりいまだかつて見ざるところな

もろもろ

だいいとく

しやうじん

ぼさつしゅ

たれ

り。この諸の大威徳・精進の菩薩衆は、誰かそれがため

ほう

と

きやうけ

じやうじゅ

たれ

したが

はじ

ほっしん

に法を説き、教化して成就せる。誰に従つてか初めて発心

ぶつぽう

しやうよう

せそん

われ

むかし

このかた

し、いずれの仏法を称揚せる○世尊よ。我は昔より来、

こと

み

ねが

よ

いまだかつてこの事を見ず。願わくは、その従るところの

こくど

みやうごう

と

われ

つね

しよこく

あそ

国土の名号を説きたまえ。我は常に諸国に遊べども、いま

だかつてこの事を見ず。我はこの衆の中において、いまし  
いちにん し こと み われ しゅ なか  
一人をも識らず。忽然に地より出でたり。願わくは、その  
いんねん と こうんぬん ねが  
因縁を説きたまえ」等云々。

てんだい い じゃくじょう このかた こんざ いおう じつぼう だいし  
天台云わく「寂場より已降、今座より已往、十方の大士  
らいえ た かぎ われ ふしよ ちりき  
来会して絶えず。限るべからずといえども、我は補処の智力  
をもつて、ことごとく見、ことごとく知る。しかるに、こ  
しゅ いちにん し ことごとく みる し ことごとく 知る し

の衆においては一人をも識らず。しかるに、我は十方に遊戯  
しよぶつ ごんぶ だいしゅ よ しきち われ じつぼう ゆげ  
して諸仏に覲奉し、大衆は快く識知するところなり」等云々。  
みょうらくい ちじん き し じゃ みずか じゃ し とうんぬん  
妙楽云わく「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云々。

きょうしやく ところふんみよう

せん

しよじょうどう

経釈の心分明なり。詮ずるところは、初成道よりこ

しど じつぼう

ぼさつ み

のかた、此土・十方にて、これらの菩薩を見たてまつらず、

聞

もう

きかずと申すなり。

ほとけ

うたが

こた

のたま

あいつた

なんだち

むかし

仏この疑いを答えて云わく「阿逸多よ○汝等が昔よ

み

もの

われ

しやばせかい

りいまだ見ざるところの者は、我はこの娑婆世界において

あのくたらさんみやくさんぼだい

えお

もろもろ

ぼさつ

阿耨多羅三藐三菩提を得已わつて、この諸の菩薩を

きょうけ

じどう

ところ

じょうぶく

どう

ところ

おい

教化・示導し、その心を調伏して、道の意を発さしめた

とう

い

われ

がやじょうぼだいじゆ

もと

り」等。また云わく「我は伽耶城菩提樹の下において坐し

さいしやうがく

じよう

え

むじよう

ほうりん

てん

て、最正覚を成ずることを得て、無上の法輪を転じ、し

すなわ

きょうけ

はじ

どうしん

おこ

いま

かして乃ちこれを教化して、初めて道心を発さしむ。今、

みなふたい

じゆう

ないしわれ

くおん

このかた

しゆ

きょうけ

皆不退に住せり乃至我は久遠より来、これらの衆を教化

とううんぬん

せり」等云々。

みろくとう

だいぼさつ

おお

うたが

思

けごんきよう

とき

ここに弥勒等の大菩薩、大いに疑いおもう。華嚴経の時、

ほうえとう

むりよう

だいぼさつ

集

ひとつごと

法慧等の無量の大菩薩あつまる。いかなる人々なるらんと

思

わ

ぜんちしき

仰

おもえば、「我が善知識なり」とおおせられしかば、さもや

打 思

のち

だいほうぼう

びやくろちとう

らいえ

だいぼさつ

とうちおもいき。その後の大宝坊・白鷺池等の来会の大菩薩

然

だいぼさつ

かれ

似

もしかのごとし。この大菩薩は彼らにはにるべくもなき、

古い

さだ

しやくそん

おんししよう

思

ふりたりげにまします。定めて釈尊の御師匠かなんどおぼ

しきを、はじ「初めて道心を発さしむ」とて、どうしん「幼稚のおこものども

なりしを教化して弟子となせり」きょうけなんとおおせあれば、大いおほ

なる疑うたがいなるべし。日本にほんの聖徳太子は、人王第三十二代しやうとくとたいし

用明天皇の御子なり。ようめいてんのう御年六歳の時、百濟・高麗・唐土よみこ

り老人ろうじんどものわたりたりしを、六歳の太子「我が弟子なり」渡

とおおせありしかば、彼の老人どもまた合掌して「我が師か

なり」等云々。とううんぬん不思議ふしぎなりしことなり。外典げてんに申す「ある者もの

道みちをゆけば、路みちのほとりに年三十としさんじゆうばかりなるわかものが若者

八十はちじゆうばかりなる老人ろうじんをとらえて打ちうけり。『いかなること

問

ろうおう

わ こ

もう

語

ぞ』たとえば、『この老翁は我が子なり』など申す』とかた

似

るにもにたり。

みろくぼさつとううたが

い

せそん

によらい

たいし

されば、弥勒菩薩等疑つて云わく「世尊よ。如来は太子

とき

しやく

みや

い

がやじよう

さ

とお

たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、

どうじよう

ぎ

あのかた

じよう

え

道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得た

このかた

はじ

しじゅうよねん

す

せそん

まえり。これより已来、始めて四十余年を過ぎたり。世尊よ。

しろうじ

おお

ぶつじ

な

とう

いかんぞこの少時において、大いに仏事を作したまえる」等

うんぬん

いっさい

ぼさつ

はじ

けこんきよう

しじゅうよねん

ええ

うたが

云々。一切の菩薩、始め華嚴経より四十余年、会々に疑い

設

いっさいしゆじよう

ぎもう

晴

なか

うたが

だいいち

をもうけて一切衆生の疑網をはらす中に、この疑い第一

うたが

むりようぎきよう

だいしようごんとう

はちまん

だいじ

の疑いなるべし。無量義経の大莊嚴等の八万の大士、

しじゅうよねん

いま

りやつこう

しつじよう

うたが

りようか

四十余年と今との歴劫・疾成の疑いにも超過せり。

かんむりようじゆきよう

いだいけぶにん

こ

あじやせおう

だいば

賺

観無量寿経に、韋提希夫人の子・阿闍世王の、提婆にすか

ちち

おう

禁

はは

ころ

ぎば

がつこう

されて父の王をいましめ母を殺さんとせしが耆婆・月光に

威

はは

放

とき

ほとけ

しよう

おどされて母をはなちたりし時、仏を請じたてまつつて、

だいいち

と

い

われ

むかし

なん

つみ

まず第一の問いに云わく「我、宿、何の罪あつてか、この

あくし

う

せそん

なん

いんねんあ

だいばだった

悪子を生める。世尊はまた何らの因縁有つてか提婆達多と

けんぞく

せそん

とううんぬん

うたが

なか

せそん

ともに眷属となりたまえる」等云々。この疑いの中に「世尊

なん

いんねんあ

とう

うたが

おお

だいじ

はまた何らの因縁有つてか」等の疑いは大いなる大事なり。

りんおう かたき

共 う

たいしやく き

共

ほとけ

輪王は敵とともに生まれず、帝釈は鬼ともならず。仏

むりようこう じひしや

だいおん

在

かえ

は無量劫の慈悲者なり。いかに大怨ともにはまします。還

ほとけ

うたが

つて仏にはましますと疑うなるべし。しかれども、

ほとけこた たま

かんぎよう ぞくじゆ

ひと

ほけきよう

仏答え給わず。されば、觀經を讀誦せん人、法華經の

だいはほん い

徒

事

だいにほんきよう

かしよう

提婆品へ入らずば、いたずらごとなるべし。大涅槃經に迦葉

ぼさつ さんじゅうろく と

およ

ほとけ

菩薩の三十六の問もこれには及ばず。されば、仏この

うたが は

たま

いちだい

しょうぎよう

ほうまつ

同

疑いを晴らせ給わずば、一代の聖教は泡沫にどうじ、

いつさいしめじよう

ぎもう

じゆりよう

いつぽん

たいせつ

一切衆生は疑網にかかるべし。寿量の一品の大切なる、

これなり。

その後、のち ほとけ 仏、じゆりようほん 寿量品を説いて云わく、「一切世間の天・

人および阿修羅は、あしゆら 皆、みな いま 今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で

て、伽耶城を去ること遠からず、とほ 道場に坐して、どうじよう 阿耨多羅

三藐三菩提を得たまえりと謂えり」等云々。この経文は、おも

始め寂滅道場より終わり法華経の安樂行品にいたるま

での一切の大菩薩等の所知をあげたるなり。いっさい だいぼさつとう しよち

「しかるに、善男子よ、ぜんなんし 我は実に成仏してより已来、われ じつ じようぶつ

無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。この文は、むりようむへんひやくせんまんおくなゆたこう どううんぬん もん けごんきよう 華嚴経

の三処の「始めて正覚を成ず」、阿含経に云わく「初めて

じよう じようみようきよう はじ ぶつじゆ ざ だいじつきよう い

成ず、浄名経の「始め仏樹に坐す」、大集経に云わく

はじ じゆうろくねん だいにちきよう われ むかしどうじよう ざ

「始めて十六年」、大日経の「我は昔道場に坐す」、

にんのうきよう にじゆうくねん むりようぎきよう われ さき どうじよう ほけきよう

仁王経の「二十九年」、無量義経の「我は先に道場」、法華経

ほうべんぼん い われ はじ どうじよう ざ とう いちごん

の方便品に云わく「我は始め道場に坐す」等を、一言に

だいこもう 破 文

大虚妄なりとやぶるもんなり。

か こじようあらわ とき しょぶつ みな しゃくそん ふんじん

この過去常顕るる時、諸仏、皆、釈尊の分身なり。

にぜん しゃくもん とき しょぶつ しゃくそん かた なら かくしゆかくぎよう

爾前・迹門の時は、諸仏、釈尊に肩を並べて各修各行

ほとけ 故 しょぶつ ほんぞん もの しゃくそんとう

の仏なり。かるがゆえに、諸仏を本尊とする者、釈尊等を

くだ いま けごん だいじよう ほうどう はんや だいにちきようとう しょぶつ みな

下す。今、華嚴の台上、方等・般若・大日経等の諸仏は皆、

しゃくそん けんぞく

ほとけ

さんじゅうじょうどう

おんとき

だいぼんてんのう

釈尊の眷属なり。仏、三十成道の御時は、大梵天王・

だいろくてんとう

ちぎよう

しゃばせかい

うば

と

たま

いま

にぜん

第六天等の知行の娑婆世界を奪い取り給いき。今、爾前・

しゃくもん

じつぼう

じょうど

号

ど

えど

説

迹門にして十方を浄土とごうしてこの土を穢土ととかれ

う 返

ど ほんど

じつぼう

じょうど

しを打ちかえして、この土は本土となり、十方の浄土は

すいじやく

えど

垂迹の穢土となる。

ほとけ

くおん

ほとけ

しゃつけ

たほう

だいぼさつ

きようしゆしゃくそん

仏は久遠の仏なれば、迹化・他方の大菩薩も教主釈尊

みでし

いつさいきよう

なか

じゆりようほん

てん

の御弟子なり。一切経の中にこの寿量品ましまさずば、天

にちがつ

な

くに

だいおう

な

さんが

たま

な

ひと

たましい

に日月の無く、国に大王の無く、山河に珠の無く、人に神

無

けごん

しんごんとう

ごんしゆう

のなからんがごとくしてあるべきを、華嚴・真言等の権宗

ちしや 思 ちようかん かじよう じおん こうぼうとう いちおうごんしゆう  
の智者とおぼしき澄観・嘉祥・慈恩・弘法等の一往権宗の  
ひとびと みずか えきよう さんたん

人々、かつは自らの依経を讚歎せんために、あるいは云わ  
い

けごんきよう きようしゆ ほうしん ほけきよう おうじん

く「華嚴経の教主は報身、法華経は応身」、あるいは云わ  
い

ほつけじゆりようほん ほとけ むみよう へんいき だいにちきよう ほとけ みよう

く「法華寿量品の仏は無明の辺域、大日経の仏は明の  
ひとざん

ぶんい とううんぬん くも つき 隠 ざんしん けんじん

分位」等云々。雲は月をかくし、讒臣は賢人をかくす。人讒  
ひとざん

こうせき たま 見 ゆしん けんじん 覚え いま じよくせ

すれば、黄石も玉とみえ、諛臣も賢人かとおぼゆ。今、濁世  
じよくせ

がくしやとう かれ ざんぎ かく じゆりようほん たま もてあそ

の学者等、彼らの讒義に隠されて、寿量品の玉を翫ばず。  
ひとざん

てんだいしゆう ひとびと 誑 きんしやくいちどう 思

また天台宗の人々もたばらかされて、金石一同のおもい  
ひとびと

ひとびと

をなせる人々もあり。

ほとけくじゅう

しよけ すく

わきま

仏久成にましまさずば所化の少なかるべきことを弁う

つき かげ お

みず

映

べきなり。月は影を慳しまざれども、水なくばうつるべか

ほとけ しゅじょう け

思

けちえん 薄

らず。仏、衆生を化せんとおぼせども、結縁うすければ

はっそう げん

れい

もろもろ

しようもん

しよじ

しよじゅう

登

八相を現ぜず。例せば、諸の声聞が初地・初住にはのぼ

にぜん

じちようじど

みらい

はっそう

期

れども、爾前にして自調自度なりしかば、未来の八相をこそ

きようしゅしやくそんしじよう

いま

せかい

るなるべし。しかれば、教主釈尊始成ならば、今この世界

ぼんたい

にちがつ

してんとう

こつしよ

ど

りよう

の梵帝・日月・四天等は、劫初よりこの土を領すれども、

しじゅうよねん

ぶつでし

りようぜんはちねん

ほつけけちえん

しゅ

いま 参

四十余年の仏弟子なり。靈山八年の法華結縁の衆、今まい

しゅくん

思

付

くじゅう

もの

隔

りの主君におもいつかず、久住の者にへだてらるるがごと

し。

いま くおんじつじょう

顯

とうほう

やくしによらい

にっこう

今、久遠実成あらわれぬれば、東方の薬師如来の日光・

がっこう

さいほう

あみだによらい

かんのん

せいし

ないしじつぼうせかい

しよぶつ

月光、西方の阿弥陀如来の観音・勢至、乃至十方世界の諸仏

みでし

だいにち

こんごうちようとう

りようぶ

だいにちによらい

みでし

しよ

の御弟子、大日・金剛頂等の両部の大日如来の御弟子の諸

だいぼさつ

きようしゆしやくそん

みでし

しよぶつ

しやかによらい

大菩薩、なお教主釈尊の御弟子なり。諸仏、釈迦如来の

ふんじん

うえ

しよぶつ

しよけもう

分身たる上は、諸仏の所化申すにおよばず。いかにいわん

ど こっしよ

にちがつ

しゆしやうとう

きようしゆしやくそん

や、この土の劫初よりこのかたの日月・衆星等、教主釈尊

みでし

の御弟子にあらずや。

てんだいしゆう

ほか

しよしゆう

ほんぞん

惑

しかるを、天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり。

くしや じようじつ りつしゆう さんじゆうししんだんけつじようどう しゃくそん ほんぞん

俱舎・成実・律宗は三十四心断結成道の釈尊を本尊と

てんそん たいし めいわく わ み たみ こ 思

せり。天尊の太子、迷惑して我が身は民の子とおもうがご

けこんしゆう しんごんしゆう さんろんしゆう ほつそうしゆうどう ししゆう だいじよう

とし。華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乘

しゆう ほつそう さんろん しやうおうじん 似 ほとけ ほんぞん

の宗なり。法相・三論は勝応身ににたる仏を本尊とす。

だいおう たいし わ ちち さむらい けこんしゆう

大王の太子、我が父は侍とおもうがごとし。華嚴宗・

しんごんしゆう しゃくそん さ るしやな だいにちとう ほんぞん さだ

真言宗は、釈尊を下げたて盧舎那・大日等を本尊と定む。

てんし ちち さ すじよう もの ほうおう

天子たる父を下げたて、種姓もなき者の法王のごとくなるに

付 じようどしゆう しゃか ふんじん あみだぶつ うえん ほとけ

つけり。浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とお

きやうしゆ 捨 ぜんしゆう げせん ものいちぶん とく

もつて教主をすてたり。禅宗は下賤の者一分の徳あつて

父母をさぐるがごとし。仏をさげ、経を下す。これ皆、本尊  
に迷えり。例せば、三皇已前に父をしらず、人皆禽獸に同  
ぜしがごとし。

寿量品をしらざる諸宗の者は畜に同じ。不知恩の者な

り。故に、妙楽云わく「二代の教えの中に、いまだかつて

遠を躰さず。父母の寿は○もし父の寿の遠きを知らずんば、

また父統の邦に迷う。いたずらに才能と謂うとも、全く人

の子にあらず」等云々。妙楽大師は唐の末、天宝年中の者

なり。三論・華嚴・法相・真言等の諸宗ならびに依経を、

ふか 見 ひろ かんが じゆりようほん ほとけ もの ふとう

深くみ、広く勘えて、寿量品の仏をしらざる者は父統の

くに まよ さいのう ちくしやう 書 さいのう

邦に迷える才能ある畜生とかけるなり。「いたずらに才能

い けごんしゆう ほうぞう ちようかんないししんごんしゆう

と謂うとも」とは、華嚴宗の法蔵・澄観乃至真言宗の

ぜんむいさんぞうとう さいのう にんし こ ちち し

善無畏三蔵等は才能の人師なれども、子の父を知らざるが

ごとし。

でんぎようだいし にほんけんみつ がんそ しゆうく い たしゆう よ

伝教大師は日本顕密の元祖。秀句に云わく「他宗の依る

きやう いちぶんぶつも ぎあ

ところの経は一分仏母の義有りといえども、しかもただ愛

あ こん ぎ か てんだいほつけしゆう ごん あい ぎ ぐ

のみ有つて嚴の義を闕く。天台法華宗は嚴・愛の義を具す。

いっさい けんしやう がく むがく ぼだいしん おこ もの ちち

一切の賢聖、学・無学および菩提心を発せる者の父なり」

とううんぬん

等云々。

しんごん

けごんとう

きようぎよう

しゆ

じゆく

だつ

さんぎ

みようじ

真言・華嚴等の経々には種・熟・脱の三義、名字すら

無

なおなし。いかにいわんや、その義をや。華嚴・真言経等

いっしょうしよじ

そくしんじようぶつとう

きよう

ごんきよう

かこ

の一生初地の即身成仏等は、経は権経にして過去を

隠

しゆ

知

だつ

ちようこう

くらい

かくせり。種をしらざる脱なれば、趙高が位にのぼり、

どうきよう

おうい

こ

道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

しゆうじゆうたが

けん

あらか

よ

諍

きよう

宗々互いに権を諍う。予これをあらず、ただ経に

まか

ほけきよう

しゆ

よ

てんじんぼさつ

しゆしむじよう

た

任すべし。法華経の種に依つて天親菩薩は種子無上を立て

てんだい

いちねんさんぜん

けごんきようないししよだいじようきよう

たり。天台の一念三千これなり。華嚴経乃至諸大乘経、

だいにちきようとう

しよそん

しゆし

みないちねんさんぜん

てんだいちしやだいし

大日経等の諸尊の種子、皆一念三千なり。

天台智者大師

いちにん

ほうもん

えたま

一人、この法門を得給えり。

けごんしゆう

ちようかん

ぎ

ぬす

けごんきよう

こころ

たく

華嚴宗の澄観、この義を盗んで華嚴経の「心は工みな

えし

もん

たましい

しんごん

だいにちきようとう

にじよう

る画師のごとし」の文の神とす。真言・大日経等には二乗

さぶつ

くおんじつじよう

いちねんさんぜん

ほうもん

ぜんむいさんぞう

しんたん

作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし。善無畏三蔵、震旦

きた

のち

てんだい

しかん

み

ちほつ

だいにちきよう

こころ

に來つて後、天台の止観を見て智発し、大日経の「心の

じつそう

われ

いっさい

ほんじよ

もん

たましい

てんだい

いちねんさんぜん

実相「我は一切の本初なり」の文の神に、天台の一念三千

ぬす

い

しんごんしゆう

かんじん

うえ

いん

しんごん

を盗み入れて真言宗の肝心として、その上に印と真言とを

飾

ほけきよう

だいにちきよう

しyouれつ

はん

とき

りどうじしyou

かざり、法華経と大日経との勝劣を判ずる時、理同事勝の

しやく

釈をつくれり。

りようかい まんだら にじようさぶつ じっかいごく いちじよう だいにちきよう

両界の曼陀羅の二乗作仏・十界互具は、一定、大日経

だいいち おうわく ゆえ でんぎようだいしい しんらい

にありや。第一の誑惑なり。故に、伝教大師云わく「新来

しんごんけ すなわ ひつじゆ そうじよう ほろ くとう けごんけ すなわ

の真言家は則ち筆受の相承を泯ぼし、旧到の華嚴家は則

ようごう きぼ かく どううんぬん ふしゆ しま 渡

ち影響の軌模を隠す」等云々。俘囚の島なんどにわたつて

歌 我 詠 もう

「ほのぼのといううたは、われよみたり」なんど申さば、

夷 体 もの 思 かんど にほん がくしや

えぞていの者はさこそとおもうべし。漢土・日本の学者ま

りようしよかしようい しんごん ぜんもん けごん さんろん

たかくのごとし。良諍和尚云わく「真言・禅門・華嚴・三論

ないし ほっけとう のぞ しょういんもん どううんぬん

乃至もし法華等に望まば、これ接引門なり」等云々。

ぜんむいさんぞう

えんま

せ

与

たま

善無畏三蔵の閻魔の責めにあずからせ給いしは、この

じゃけん

のち

こころ

翻

ほけきよう

きぶく

邪見による。後に心をひるがえし、法華経に帰伏してこそ、

責

のが

たま

のち

ぜんむい

ふくうとう

このせめをば脱れさせ給いしか。その後、善無畏・不空等、

ほけきよう

りようかい

ちゆうおう

置

だいおう

たいぞう

法華経を両界の中央におきて大王のごとくし、胎蔵の

だいにちきよう

こんごうちようきよう

そう

しんか

大日経、金剛頂経をば左右の臣下のごとくせし、これな

にほん

こうぼう

きようそう

とき

げごんしゆう

こころ

寄

ほけきよう

り。日本の弘法も、教相の時は華嚴宗に心をよせて法華経

だいはち

置

じそう

とき

じちえ

しんが

えんちよう

をば第八におきしかども、事相の時には実慧・真雅・円澄・

こうじようとう

ひとびと

つた

たま

とき

りようかい

ちゆうおう

かみ

光定等の人々に伝え給いし時、両界の中央に上のごとく

置

おかれたり。

れい さんろん かじょう ほつけげんじつかん ほけきよう だいしじ  
例せば、三論の嘉祥は、法華玄十卷に法華経を第四時、

えにはに さいだ てんだい きぶく しちねん 仕 こう はい  
会二破二と定むれども、天台に帰伏して七年つかえ、講を廢

しゆ さん み につきよう ほつそう じおん ほうおんりんしちかん  
し衆を散じて身を肉橋となせり。法相の慈恩は法苑林七卷

じゆうにかん いちじよう ほうべん さんじよう しんじつ とう もうごんおほ  
十二卷に「一乗は方便なり、三乗は真実なり」等の妄言多

し。しかれども、玄賛の第四には「故に、また両つながら存  
し。しかれども、玄賛の第四には「故に、また両つながら存

す」等と我が宗を不定になせり。言は両方なれども、心  
す」等と我が宗を不定になせり。言は両方なれども、心

てんだい きぶく けごん ちようかん けごん しょ つく  
は天台に帰伏せり。華嚴の澄觀は、華嚴の疏を造つて

けごん ほつけあいたい ほつけ ほうべん 書 に にか  
華嚴・法華相對して、法華を方便とかけるに似たれども、「彼

の宗にはこれをもつて実となす。この宗の立義、理とし  
の宗にはこれをもつて実となす。この宗の立義、理とし

て通ぜざるつうことなし」等とうとかけるは、悔くい還かえすにあらざや。

弘法こうぼうもまたかくのごとし。亀鏡ききようなければ我が面わをみず、敵かたき

なければ我が非わひをしらず。真言等しんごんとうの諸宗しよしゆうの学者等がくしやとう、我が非わひ

をしらざりしほどに、伝教大師でんきようだいしにあいたてまつつて自宗じしゆうの

失とがをしるなるべし。

されば、諸經しよきようの諸もろもろの仏菩薩ぶつぼさつ・人天等にんてんとうは、彼々かれがれの經々きようぎよう

にして仏ほとけにならせ給たまうようなれども、実じつには法華經ほけきようにして

正覚しやうがくなり給たまえり。釈迦しやか・諸仏しよぶつの衆生しゆじやうむへん無辺そうがんの総願みなは、皆みなこ

の經きようにおいて満足まんぞくす。「今いま、すでに満足まんぞくしぬ」の文もんこれな

り。

よ こと よし 推 はか けごん かんぎよう だいにちきようとう

予、事の由をおし計るに、華嚴・觀經・大日經等をよ

しゆぎよう ひと きようぎよう ほとけ ぼさつ てんとうしゆご たも

み修行する人をば、その經々の仏・菩薩・天等守護し給

うたが だいにちきよう かんぎようとう

うらん。疑いあるべからず。ただし、大日經・觀經等を

ぎようじやとう ほけきよう きようじや てきたい か ぎようじや

よむ行者等、法華經の行者に敵対をなさば、彼の行者を

ほけきよう ぎようじや しゆご れい こうし じふ

すてて法華經の行者を守護すべし。例せば、孝子、慈父の

おうてき ちち おう 参 こう いた ぶつぼう

王敵となれば、父をすてて王にまいる、孝の至りなり。仏法

ほけきよう もろもろ ぶつぼさつ じゅうらせつ にちれん

もまたかくのごとし。法華經の諸の仏菩薩・十羅刹、日蓮

しゆご たま うえ じようどしゆう ろくまん しょぶつ にじゅうご ぼさつ

を守護し給う上、浄土宗の六方の諸仏・二十五の菩薩、

しんごんしゆう せんにひやくとう しちしゆう しよそん しゆご ぜんじん にちれん しゆご

真言宗の千二百等、七宗の諸尊、守護の善神、日蓮を守護

たま れい しちしゆう しゆごしん でんぎようだいし 守 たま

し給うべし。例せば、七宗の守護神、伝教大師をまぼり給

思

いしがごとしとおもう。

にちれんあん い ほけきよう にしよさんえ ざ

日蓮案じて云わく、法華経の二処三会の座にましましし

にちがつとう しよてん ほけきよう ぎようじゃしゆつたい じしやく くろがね す

日月等の諸天は、法華経の行者出来せば、磁石の鉄を吸

つき みず うつ しゆゆ きた ぎようじゃ

うがごとく、月の水に遷るがごとく、須臾に来てつて行者に

か ぶつぜん おんちか 果 たも 覚 そうろう

代わり仏前の御誓いはたさせ給うべしとこそおぼえ候

にちれん 訪 たま にちれん ほけきよう ぎようじゃ

に、いままで日蓮をとぶらい給わぬは、日蓮、法華経の行者

かさ きようもん かんが わ み 当

にあらざるか。されば、重ねて経文を勘えて、我が身にあ

てて身みの失とがをしるべし。

うたが

い

とうせい

ねんぶつしや

ぜんしゅうとう

疑いつて云いわく、当世とうせいの念仏宗ねんぶつしや・禅宗ぜんしゅうとう等をば、いかなる

ちげん

ほけきよう

てきじん

いつさいしゆじよう

あくちしき

知

智眼ちげんをもつて法華經ほけきようの敵人てきじん、一切衆生いつさいしゆじようの悪知識あくちしきとはしるべ

きや。

こた

い

わたくし

ことば

い

きようしやく

答こたえて云いわく、私わたくしの言ことばを出いだすべからず。經きよう釈しやくの

みようきよう

い

ほうぼう

しゅうめん

浮

とが

見

明鏡みようきようを出いだして謗法ほうぼうの醜面しゅうめんをうかべ、その失とがをみせしめ

しょうもう

ちから

ほけきよう

だいし

ほうとうほん

い

ん。生盲しょうもうは力ちからおよばず。法華經ほけきようの第四だいしの宝塔品ほうとうほんに云いわく

とき

たほうぶつ

ほうとう

うち

はんざ

わ

「その時とき、多宝仏たほうぶつは宝塔ほうとうの中うちにおいて、半座はんざを分わかちて、

しやかむにぶつ

あた

とき

だいしゆ

にによらい

しっぽうとう

釈迦牟尼仏しやかむにぶつに与あたえたもう○その時とき、大衆だいしゆは、二如来にによらいの七宝塔しっぽうとう

なか ししぎ うえ ましま けつかふぎ  
の中の師子座の上に在して結跏趺坐したもうを見たてま  
だいおんじょう

つる○大音声をもつて、あまねく四衆に告げたまわく『誰  
ししゆ っ

よ しゃばこくど ひろ みようほけきよう と いままさ

か能くこの娑婆国土において、広く妙法華経を説かん。今正

とき によらい ひさ まさ ねはん い

しくこれ時なり。如来は久しからずして、当に涅槃に入る

ほとけ みようほけきよう ふぞく あ あ

べし。仏はこの妙法華経をもつて、付嘱して在ること有ら

ほつ どううんぬん だいいち ちよくせん

しめんと欲す』と』等云々。第一の勅宣なり。

い とき せそん かさ ぎ の ほつ

また云わく「その時、世尊は重ねてこの義を宣べんと欲し

げ と のたま しょうじゆせそん ひさ めつど

て、偈を説いて言わく『聖主世尊は、久しく滅度したも

ほうとう うち ましま ほう きた

うといえども、宝塔の中に在して、なお法のために来りた

まえり。諸人しよにんはいかんぞ勤つとめて法ほうのためにせざらん○また

わ ふんじん むりよう しよぶつ ぎた ほう き

我が分身、無量の諸仏は、恒沙等のごとく、来り法を聴か

ほつ おのおのみようど でししゆ てん にん りゆうじん もろもろ

んと欲して○各 妙土および弟子衆、天・人・竜神、諸

くよう じ す ほう ひさ じゆう

の供養の事を捨てて、法をして久しく住せしめんが故に、

らいし たと だいふう しようじゆ えだ ふ

ここに来至したまえり○譬えば大風の小樹の枝を吹くが

ほうべん ほう ひさ じゆう もろもろ

ごとし。この方便をもつて、法をして久しく住せしむ。諸

だいしゆ つ われめつど のち たれ よ きよう ごじ

の大衆に告ぐ。我滅度して後、誰か能くこの経を護持し

どくじゆ いま ぶつぜん みずか せいこん と だいに

読誦せん。今、仏前において、自ら誓言を説け』と」。第二

ほうしよう

の鳳詔なり。

たほうによらい

わ み あつ

けぶつ

まさ

「多宝如来、および我が身の集むるところの化仏は、当に

こころ し

もろもろ

ぜんなんし

おのおのくあき

しゆい

この意を知るべし○諸の善男子よ。各諦らかに思惟

なんじ

だいがん

おこ

しよよ

せよ。これはこれ難事なり。よろしく大願を発すべし。諸余

きようてん

かざごうじや

と

の經典は、数恒沙のごとし。これらを説くといえども、い

かた

た

しゆみ

と

たほう

むしゆ

まだ難しとなすに足らず。もし須弥を接つて、他方の無数の

ぶつど

な お

かた

ほとけめつ

仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさず○もし仏滅

のち

あくせ

なか

よ

きよう

と

して後、悪世の中において、能くこの経を説かば、これは

すなわ

かた

こつしよう

かわ

くさ

にな

お

則ち難しとなす○たとい劫焼に、乾ける草を担い負つて、

なか

い

や

かた

わがめつど

中に入って焼けざらんも、またいまだ難しとなさず。我滅度

のち

きょう たも

いちにん

と

して後に、もしこの経を持つて、一人のためにも説かば、

すなわ なた

もろもろ

ぜんなんし

われめつ

のち

これは則ち難しとなす○諸の善男子よ。我滅して後にお

たれ よ

きょう ごじ

どくじゆ

いま ぶつぜん

いて、誰か能くこの経を護持し読誦せん。今、仏前におい

みずか せいごん と

とううんぬん だいさん

かんちよく

だいし だいがこ

て、自ら誓言を説け」等云々。第三の諫勅なり。第四・第五

にか かんぎよう だいばほん

しも 書

の二箇の諫曉、提婆品にあり。下にかくべし。

きょうもん こころ がんぜん

せいてん だいにちりん

か

この経文の心は眼前なり。青天に大日輪の懸かれるが

はくめん ほくろ

似

しょうもう もの

ごとし、白面に麁のあるにいたり。しかれども、生盲の者

じゃげん もの いちげん

者

おのおのみずか

し おも

もの

と邪眼の者と一眼のものと、「各自らを師と謂う」の者、

へんしゆうけ もの 見

ばんなん

捨

どうしん

もの

辺執家の者はみがたし。万難をすてて道心あらん者に

しるしとどめてみせん。西王母がそののもも、輪王出世の

うどんげ

遭

はいこう

こうう

はちねんかんど

優曇華よりもあいがたく、沛公が項羽と八年漢土をあらそ

よりと

むねもり

しちねんあきつしま

しゆら

たいしやく

いし、頼朝と宗盛が七年秋津島にたたかいし、修羅と帝釈

こんじちよう

りゆうおう

あのかち

あらそ

過

と、金翅鳥と竜王と阿耨池に諍えるも、これにはすぐべ

知

からずとしるべし。

にほんこく

ほうあらわ

にど

でんぎようだいし

にちれん

日本国にこの法顕るること二度なり。伝教大師と日蓮

知

むげん

者

うたが

ちからおよ

となりとしれ。無眼のものは疑うべし。力及ぶべからず。

きようもん

にほん

かんど

がつし

りゆうぐう

てんじよう

じつぼうせかい

この経文は、日本・漢土・月氏・竜宮・天上・十方世界の

いっさいきよう

しようれつ

しやか

たほう

じつぼう

ほとけらいじゅう

さだ

たも

一切経の勝劣を、釈迦・多宝・十方の仏来集して定め給

うなるべし。

と い けごんきよう ほうどうきよう はんにゃきよう じんみつきよう

問うて云わく、華嚴経・方等経・般若経・深密経・

りようがきよう だいにちきよう ねはんぎようとう く うち ろくなん うち

楞伽経・大日経・涅槃経等は、九易の内か六難の内か。

こた い けごんしゆう とじゆん ちごん ほうぞう ちようかんと さんぞう

答えて云わく、華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄観等の三蔵

だいし よ い けごんきよう ほけきよう ろくなん うち な

大師、読んで云わく「華嚴経と法華経とは六難の内。名は

にきよう しよせつないしり おな しもん かん べつ

二経なれども、所説乃至理、これ同じ。『四門の観は別なる

しんたい み おな ほつそ げんじようさんぞう

も、真諦を見ることは同じ』のごとし。法相の玄奘三蔵・

じおんだいしとう よ い じんみつきよう ほけきよう おな

慈恩大師等、読んで云わく「深密経と法華経とは同じく

ゆいしき ほうもん だいさんじ きよう ろくなん うち さんろん きちぞう

唯識の法門にして第三時の教、六難の内なり」。三論の吉蔵

とう よ はんにやきよう ほけきよう おのおのこと たい

等、読んで云わく「般若経と法華経とは名異なるも体は

おな にきよう いっぼう ぜんむいさんぞう こんごうちさんぞう ふくうさんぞう

同じ。二経は一法なり」。善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵

とう よ い だいにちきよう ほけきよう りおな

等、読んで云わく「大日経と法華経とは理同じ。おなじく

ろくなん うち きよう にほん こうぼう よ だいにちきよう

六難の内の経なり」。日本の弘法、読んで云わく「大日経

ろくなん くい うち だいにちきよう しゃか と

は六難九易の内にあらず。大日経は釈迦の説くところの

いっさいきよう ほか ほっしんだいにちによらい しょせつ ひと

一切経の外、法身大日如来の所説なり」。またある人云わ

けごんきよう ほうしんによらい しょせつ ろくなん くい うち

く「華嚴経は報身如来の所説、六難九易の内にはあらず」。

ししゅう がんそとう よ なが 汲

この四宗の元祖等かように読みければ、その流れをくむ

すうせん がくととう けん 出

数千の学徒等もまたこの見をいはず。

にちれん 歎

い

かみ

しよにん

ぎ

そう

ひ

日蓮なげいて云わく、上の諸人の義を左右なく非なりと

とうせい

しよにんおもて

む

ひ ひ

重

いわば、当世の諸人面を向くべからず。非に非をかさね、

けつく こくしゆ

ざんそう

いのち

およ

われ

じふ

結句は国主に讒奏して命に及ぶべし。ただし、我らが慈父、

そうりんさいご

ごゆいごん

のたま

ほう

よ

ひと

よ

ひと

よ

とう

双林最後の御遺言に云わく「法に依つて人に依らざれ」等

うんぬん

ひと

よ

とう

しよえ

にえ

さんえ

だいしえ

よ

とう

云々。「人に依らざれ」等とは、初依・二依・三依・第四依、

ふげん

もんじゆとう

とうがく

ぼさつ

ほうもん

と

たま

きよう

て

普賢・文殊等の等覚の菩薩、法門を説き給うとも、経を手

握

もち

りようぎきよう

よ

ににぎらざらんをば用いるべからず。「了義経に依つて

ふりようぎきよう

よ

さだ

きよう

なか

りようぎ

ふりようぎきよう

よ

不了義経に依らざれ」と定めて、経の中にも了義・不了義経

きゆうめい

しんじゆ

そうち

りゆうじゆ ぼさつ

を糾明して信受すべきこそ候いぬれ。竜樹菩薩の

じゆうじゆうびばしやろん

い

しゆたら

よ

こくろん

十住毘婆沙論に云わく「修多羅に依らざるは黒論なり。

しゆたら

よ

びやくろん

とううんぬん

てんだいだいしい

修多羅に依るは白論なり」等云々。天台大師云わく「修多羅

あ

ろく

もち

もんな

ぎな

しんじゆ

と合わば、録してこれを用いる。文無く義無ければ信受す

とううんぬん

でんぎようだいしい

ぶつせつ

えびよう

くでん

べからず」等云々。伝教大師云わく「仏説に依憑せよ。口伝

しん

とううんぬん

えんちんちしようだいしい

もん

を信ずることなかれ」等云々。円珍智証大師云わく「文に依

つた

とううんぬん

つて伝うべし」等云々。

かみ

挙

しよし

しゃく

みないちぶんいちぶん

きようろん

よ

上にあぐるところの諸師の釈、皆一分一分、経論に依つ

しようれつ

わきま

みなじしゆう

かた

しんじゆ

せんし

て勝劣を弁うるようなれども、皆自宗を堅く信受し先師

みようぎ

正

ま

しじよう

え

しようれつ

の謬義をたださざるゆえに、「曲げて私情に会す」の勝劣な

ごんぎ しょうごん

ほうもん

ほとけ

めつご

とくし

ほうごう

り、「己義を莊嚴す」の法門なり。仏の滅後の犢子・方広、

ごかん いご

げてん

ぶつぼうげ

げどう

けん

さんごうごてい

後漢已後の外典は、仏法外の外道の見よりも、三皇五帝の

じゆしよ

じゃけんごうじよう

じゃほうたく

けごん

ほつそう

儒書よりも、邪見強盛なり、邪法巧みなり。華嚴・法相・

しんごんとう

にんし

てんだいしゆう

しyouぎ

そね

じつきよう

もん

え

真言等の大師、天台宗の正義を嫉むゆえに、実経の文を会

ごんぎ

じゆん

ごうじよう

どうしん

して権義に順ぜしむること強盛なり。しかれども、道心あ

ひと

へんとう

捨

じたしゆう

争

ひと

悔

らん人、偏党をすて、自他宗をあらそわず、人をあなずる

ことなかれ。

ほけきよう

い

いこんとう

とううんぬん

みようらくい

法華経に云わく「已今当」等云々。妙楽云わく「たとい

きようあ

しよきよう

おう

い

いこんとう

せつ

もつと

経有つて『諸経の王なり』と云うとも、『已今当の説に最

だいいち

い

とうろんぬん

い

いこんとう

もこれ第一なり』とは云わず」等云々。また云わく「已今当

みよう

かた まよ

ほうぼう

つみ

くじようこう

なが

の妙、ここにおいて固く迷えり。謗法の罪は、苦長劫に流

とうろんぬん

きようしゃく

いつさいきよう

にんし

る」等云々。この経釈におどろいて、一切経ならびに人師

しよしゃく

み

こぎ

こおり解

いま

しんごん

ぐしゃとう

いん

の疏釈を見るに、狐疑の氷とけぬ。今、真言の愚者等、印・

しんごん

有

頼

しんごんしゆう

ほけきよう

勝

真言のあるをたのみて「真言宗は法華経にすぐれたり」と

じかくだいしとう

しんごんすぐ

仰

おもい、「慈覚大師等の真言勝れたりとおおせられぬれば」

思

なんどおもえるは、いうにかいなきことなり。

みつごんきよう

い

じゆうじ

けごんとう

だいじゆ

じんずう

しyouまん

密厳経に云わく「十地・華嚴等の大樹と神通と、勝鬘お

よきよう

みな

きよう

い

よび余経とは、皆この経より出でたり。かくのごとき

みつごんきよう

いつさいきよう

なk

すぐ

とううんぬん

密厳経は、一切経の中に勝れたり」等云々。

だいうんきよう

い

きよう

すなわ

しよきよう

てんりんじようおう

大雲経に云わく「この経は即ちこれ諸経の転輪聖王

なに

ゆえ

きようてん

なか

しゆじよう

じつしよう

なり。何をもつての故に。この經典の中に衆生の実性・

ぶつしよう

じようじゆう

ほうぞう

せんぜつ

ゆえ

とううんぬん

仏性・常住の法蔵を宣説するが故に」等云々。

ろくはらみつきよう

い

かこむりよう

しよぶつ

と

六波羅蜜経に云わく「いわゆる過去無量の諸仏の説くと

しようほう

わ

いまと

はちまんよんせん

ころの正法、および我が今説くところのいわゆる八万四千

もろもろ

みようほううん

おき

ごぶん

いち

そたらん

に

の諸の妙法蘊〇撰めて五分となす。一には索胆纜、二に

びなや

さん

あびだつま

し

はんにやはらみつ

ご

は毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜、五には

だらにもん

ごしゆ

ぞう

うじよう

きようけ

か

陀羅尼門なり。この五種の蔵もて有情を教化す〇もし彼の

うじよう

かいきよう

じようぶく

たいほう

はんにや

じゆじ

あた

有情、契経・調伏・対法・般若を受持すること能わず、

うじよう

もろもろ

あくごう

しじゆう

はちじゆう

ごむけんざい

あるいはまた有情、諸の悪業・四重・八重・五無間罪・

ぼうほうどうきよう

いつせんだいとう

しゆじゆ

じゆうざい

つく

しようめつ

謗方等経・一闍提等の種々の重罪を造るに、消滅して

そくしつ

げだつ

とみ

ねはん

さと

え

え

かれ

速疾に解脱し、頓に涅槃を悟ることを得せしめ、彼がため

もろもろ

だらにぞう

と

いつ

ほうぞう

たと

にゆう

に諸の陀羅尼蔵を説く。この五つの法蔵は、譬えば乳・

らく

しょうそ

じゆくそ

たえ

だいご

そうじもん

たと

酪・生蘇・熟蘇および妙なる醍醐のごとし○総持門は、譬え

だいご

だいご

あじ

にゆう

らく

そ

なか

みみようだいいち

ば醍醐のごとし。醍醐の味は、乳・酪・蘇の中に微妙第一

よ

もろもろ

やまい

のぞ

もろもろ

うじよう

しんしんあんらく

にして、能く諸の病を除き、諸の有情をして身心安楽

そうじもん

かいきようとう

なか

もつと

だいいち

よ

ならしむ。総持門は、契経等の中に最も第一となす。能く

じゆうざい のぞ とううんぬん  
重罪を除く」等云々。

げじんみつきよう い とき しょうぎしょうぼさつ ほとけ もう

解深密経に云わく「その時に、勝義生菩薩また仏に白し

もう せそん はじ いちじ はらなつし せんになだしよ

て言さく『世尊、初め一時において波羅痾斯の仙人墮処の

せろくりん なか ましま しょうもんじよう ほつしゆ もの

施鹿林の中に在して、ただ声聞乗を発趣する者のために

したい そゆう しょうほうりん てん

のみ、四諦の相をもつて正法輪を転じたまいき。これ

甚 き けう いったいせけん もろもろ

はなはだ奇、はなはだこれ希有にして、一切世間の諸の

てんにんとう さき よ ほう てん ものあ

天人等、先より能く法のごとく転ずる者有ることなしとい

か とき てん ほうりん うじよう

えども、彼の時において転じたもうところの法輪は有上な

うよう りようぎ もろもろ じようろんあんそく

り、有容なり、これいまだ了義ならず、これ諸の諍論安足



じしようねはん

むじしよう

しよう

けんりよう

そう

自性涅槃にして無自性の性なるによつて、顕了の相をも

しようほうりん てん

だいいち 甚

き

もつと

つて正法輪を転じたもう。第一はなはだ奇にして、最も

けう

いませそんてん

ほうりん

むじよう

むよう

これ希有なり。今世尊轉じたもうところの法輪、無上・無容

しん

りようぎ

もろもろ

じようろんあんそく

ところ

にして、これ真の了義なり。諸の諍論安足の処所にあら

とううんぬん

ず』と」等云々。

だいはんにやきよう

い

ちようもん

よ

しゆつせ

ほう

大般若経に云わく「聴聞するところの世・出世の法に

したが

みなよ

ほうべん

はんにやじんじん

りしゆ

えにゆう

もろもろ

随つて、皆能く方便もて般若甚深の理趣に会入し、諸の

ぞうさ

せけん

じぎう

はんにや

ほつしよう

造作するところの世間の事業もまた般若をもつて法性に

えにゆう

いちじ

ほつしよう

い

もの

み

とううんぬん

会入し、一事として法性を出ずる者を見ず」等云々。

だいにちきようだいいち

い

ひみつしゆ

だいじようぎよう

むえんじよう

大日経第一に云わく「秘密主よ。大乗行あり。無縁乗

こころ

おこ

ほう

がしような

なに

ゆえ

か

おうじやく

の心を発す。法に我性無し。何をもつての故に。彼の往昔

しゆぎよう

もの

うん

あらや

かんさつ

かくのごとく修行せし者のごとく、蓋の阿頼耶を觀察して、

じしよう

まぼろし

し

とううんぬん

い

ひみつしゆ

自性は幻のごとしと知る」等云々。また云わく「秘密主よ。

かれ

むがす

しんしゆじぎい

じしん

彼はかくのごとく無我を捨て、心主自在にして、自心の

ほんぶじよう

さと

とううんぬん

い

くうじよう

こんきよう

本不生を覚る」等云々。また云わく「いわゆる空性は根境

はな

むそう

きようがいな

もろもろ

けろん

こ

こくう

を離れ、無相にして境界無く、諸の戲論に越えて虚空に

とうどう

ないしごくむじしよう

とううんぬん

い

だいにちそん

等同なり乃至極無自性」等云々。また云わく「大日尊は、

ひみつしゆ

つ

のたま

ひみつしゆ

ぼだい

い

秘密主に告げて言わく『秘密主よ。いかなが菩提。謂わく、

実じつのごとく自心じしんを知るし』と」等とう云々うんぬん。

けごんきよう い いっさいせかい もろもろ ぐんじよう しょうもんどう もと

華嚴経けごんきように云いわく「一切世界いっさいせかいの諸もろもろの群生ぐんじよう、声聞道しょうもんどうを求め

ほつ あ すくな えんがく もと もの うた

んと欲ほつすること有あること尠すくなし。縁覚えんがくを求もとむる者はもの転うたたまた

すく だいじよう もと もの 甚 けう だいじよう もと

少すくなし。大乘だいじようを求もとむる者はものはなはだ希有けうなり。大乘だいじようを求もとむ

やす よ ほう しん

ることはやすなよお易ほうしとなし、能しんくこの法しんを信しんずることはしんはな

かた しゆぎよう しんじつ げ さんぜんだいせんかい

はだ難かたしとなす。いわんや、能よく受持じゆじし、正憶念しょうおくねんし、説せつの

しゆぎよう しんじつ げ さんぜんだいせんかい

ごとく修行しゆぎようし、真実しんじつに解げせんをや。もし三千大千界さんぜんだいせんかいをもつ

ちようだい いっこう みどう か しよさ かた

て頂戴ちようだいすること一劫いっこう、身動みどうぜざらんも、彼の所作か しよさいまだ難かた

ほう しん ほう しん かつ

しとなさず。この法ほうを信しんずるはしんはなはだ難かたしとなす。

だいせんじんじゆ だ しゆじよう じ たぐ た いつこうもろもろ い らくぐ ら くよう く か

大千塵数の衆生の類に一劫諸の樂具を供養するも、彼

くどく く すぐ す こと こ すぐ

の功德いまだ勝れたりとなさず。この法を信ずるは殊に勝

たなごころ た じゆうぶつせつ じ たも た こくう こ なか

れたりとなす。もし掌をもつて十仏刹を持ち、虚空の中

じゆう じ いつこう い か しよさ し かた

において住すること一劫なるも、彼の所作いまだ難しとな

ほう ほ しん かた

さず。この法を信ずることははなはだ難しとなす。

じゆうぶつせつじん じ しゆじよう し たぐ いつこうもろもろ い らくぐ ら くよう く

十仏刹塵の衆生の類に一劫諸の樂具を供養せんも、

か くどく く すぐ ほう ほ しん

彼の功德いまだ勝れたりとなさず。この法を信ずることは

こと こ すぐ じゆうぶつせつじん じ もろもろ も によらい いつこうくぎよう

殊に勝れたりとなす。十仏刹塵の諸の如来を一劫恭敬し

くよう く よ ほん じゆじ くどく かれ

て供養せんに、もし能くこの品を受持せば、功德は彼より

もつと すぐ

とうとうんぬん

も最も勝れたりとなす」等云々。

ねはんきよう

い

もろもろ

だいじようほうどうきようてん

むりよう

涅槃経に云わく「この諸の大乗方等經典も、また無量

くどく

じようじゆ

きよう

ひ

ほつ

の功徳を成就すといえども、この経に比せんと欲するに、

たと

え

ひやくばいせんばいひやくせんまん

ないしさんじゆ

ひゆ

喩えとなすことを得ず。百倍千倍百千万、乃至算数・譬喩

およ

あた

ぜんなんし

たと

うし

も及ぶこと能わざるところなり。善男子よ。譬えば、牛よ

にゆう

い

にゆう

らく

い

らく

しようそ

い

り乳を出だし、乳より酪を出だし、酪より生蘇を出だし、

しようそ

じゆくそ

い

じゆくそ

だいご

い

だいご

生蘇より熟蘇を出だし、熟蘇より醍醐を出だすに、醍醐は

さいじよう

ふく

しゆびようみなのぞ

最上にして、もし服することあらば、衆病皆除こり、あ

もろもろ

くすり

なか

い

らゆる諸の薬もことごとくその中に入るがごとし。

ぜんなんし ほとけ

ほとけ じゅうにぶきよう い

善男子よ。仏もまたかくのごとし。仏より十二部経を出だ

じゅうにぶきよう しゆたら い しゆたら ほうどうきよう い

し、十二部経より修多羅を出だし、修多羅より方等経を出

ほうどうきよう はんにははらみつ い はんにははらみつ

だし、方等経より般若波羅蜜を出だし、般若波羅蜜より

だいねはん い だいご い ぶつしよう

大涅槃を出だす。なお醍醐のごとし。醍醐と言うは、仏性

たと とううんぬん

を喩う」等云々。

きようもん ほけきよう いこんとう ろくなんくい そうたい

これらの経文を法華経の已今当・六難九易に相對すれば、

つき ほし くせん しゆみ あ 似

月に星をならべ、九山に須弥を合わせたるににたり。しか

けこんしゅう ちようかん ほつそう さんろん しんごんとう じおん かじよう

れども、華嚴宗の澄観、法相・三論・真言等の慈恩・嘉祥・

こうぼうとう ぶつげん ひと もん 惑

弘法等の仏眼のごとくなる人、なおこの文にまどえり。い

もうげん

とうせい

がくしゃとう

しようれつ

わきま

かにいわんや、盲眼のごとくなる当世の学者等、勝劣を弁

こくびやく

明

しゅみ

けし

うべしや。黑白のごとくあきらかに、須弥・芥子のごとく

しようれつ

こくう

り

なる勝劣なおまどえり。いわんや、虚空のごとくなる理に

惑

まよ

きよう

せんじん

知

り

せんじん

わきま

迷わざるべしや。教の浅深をしらざれば、理の浅深を弁う

者

るものなし。

かん

隔

もんぜんご

きようもん

いろわきま

もん

巻をへだて文前後すれば、教門の色弁えがたければ、文

い

ぐしや

たす

おう

しようおう

だいおう

いっさい

を出だして愚者を扶けんとおもう。王に小王・大王、一切

しょうぶん

ぜんぶん

ごにゆう

ぜんゆ

ぶんゆ

わきま

ろくはらみつきよう

に少分・全分、五乳に全喩・分喩を弁うべし。六波羅蜜経

うじよう

じようぶつ

むじよう

じようぶつ

は有情の成仏あつて無性の成仏なし。いかにいわんや

くおんじつじよう

明

ねはんきよう

ごみ

及

久遠実成をあかさず。なお涅槃経の五味におよばず。いか

ほけきよう

しやくもん

ほんもん

対

にいわんや、法華経の迹門・本門にたいすべしや。しかる

にほん

こうぼうだいし

きようもん

惑

たま

ほけきよう

に、日本の弘法大師、この经文にまどい給いて、法華経を

だいし

じゆくそみ

い

たま

だいご

そうじもん

だいごみ

第四の熟蘇味に入れ給えり。第五の総持門の醍醐味すら

ねはんきよう

およ

たま

しんたん

涅槃経に及ばず。いかにし給いけるやらん。しかるを「震旦

にんし

あらし

だいご

ぬす

てんだいとう

ぬすびと

書

たま

の人師、諍って醍醐を盗む」と天台等を盗人とかき給えり。

お

こけんだいご

な

とう

じたん

「惜しいかな、古賢醍醐を嘗めず」等と自歎せられたり。

置

わ

いちもん

もの

記

たにん

これらはさておく。我が一門の者のためにしるす。他人は

しん

ぎやくえん

いったい

嘗

だいかい

潮

知

信ぜざれば、逆縁なるべし。一涕をなめて大海のしおをし

り、一花を見て春を推せよ。万里をわたつて宋に入らずと

いつか み はる すい ばんり 渡 そう い  
さんかねん へ りようぜん りゆうじゆ

も、三箇年を経て靈山にいたらずとも、竜樹のごとく

りゆうぐう い むじやくぼさつ みろくぼさつ

竜宮に入らずとも、無著菩薩のごとく弥勒菩薩にあわずと

にしよさんえ あ いちだい しようれつ 知

も、二三所三会に値わずとも、一代の勝劣はこれをしれるな

へび なのか うち こうずい りゆう けんぞく

るべし。蛇は七日が内の洪水をしる、竜の眷属なるゆえ。

からす ねんちゆう きつきよう かこ おんみようじ とり

鳥は年中の吉凶をしれり、過去に陰陽師なりしゆえ。鳥

飛 とく ひと 勝 にちれん しようれつ

はとぶ徳、人にすぐれたり。日蓮は諸経の勝劣をしるこ

けごん ちようかん さんろん かじよう ほつそう じおん しんごん こうぼう

と、華嚴の澄観、三論の嘉祥、法相の慈恩、真言の弘法に

てんだい だんぎよう あと 徳 か ひとびと

すぐれたり。天台・伝教の跡をしのおゆえなり。彼の人々

は天台・伝教に帰せさせ給わずば、てんだい でんぎよう き たま 謗法の失脱れさせ給うほうぼう とがのが たも べしや。

当世日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命はとうせい にほんこく だいいち と もの にちれん いのち

法華經にたてまつり、名をば後代に留むべし。大海の主とほけきよう な こうだい とど だいかい しゆ

なれば、諸の河神皆したがう。須弥山の王に諸の山神しもろもろ かしんみな 従 しゆみせん おう もろもろ さんじん

たがわざるべしや。法華經の六難九易を弁うれば、一切經ほけきよう ろくなんく い わきま いたさいきよう

よまざるにしたがうべし。読 従

宝塔品の三箇の勅宣の上に、提婆品に二箇の諫曉あり。ほうとうほん さんか ちよくせん うえ だいばほん にか かんぎよう

提婆達多は一闡提なり。天王如来と記せらる。涅槃經四十卷だいばだつた いっせんだい てんのうによらい き ねはんきようしじゆつかん

げんしよう

ほん

ぜんしよう

あじやせとう

むりよう

ごぎやく

の現証は、この品にあり。善星・阿闍世等の無量の五逆・

ほうぼう

もの

ひと

挙

かしら

よろず

収

えだ

謗法の者の一りをあげ、頭をあげ、万をおさめ、枝を

従

いつさい

ごぎやく

しちぎやく

ほうぼう

せんだい

てんのうによらい

表

したがう。一切の五逆・七逆・謗法・闍提、天王如来にあらわ

お

どくやくへん

かんろ

しゆみ

勝

れ了わんぬ。毒薬變じて甘露となる。衆味にすぐれたり。

りゆうによ

じようぶつ

いちにん

いつさい

によにん

じようぶつ

竜女が成仏、これ一人にはあらず。一切の女人の成仏を

ほけきよういぜん

もろもろ

しようじようきよう

によにん

じようぶつ

あらわす。法華経已前の諸の小乗経には女人の成仏

もろもろ

だいじようきよう

じようぶつ

おうじよう

をゆるさず。諸の大乗経には成仏・往生をゆるすよ

かいてん

じようぶつ

いちねんさんぜん

じようぶつ

うなれども、あるいは改転の成仏にして一念三千の成仏

うみようむじつ

じようぶつ

おうじよう

いち

あ

にあらざれば、有名無実の成仏・往生なり。「一を挙げて

もろもろ

れい

もつ

りゆうによ

じようぶつ

まつだい

によにん

諸に例す」と申して、竜女が成仏は末代の女人の

じようぶつ

おうじよう

みち

踏

開

成仏・往生の道をふみあけたるなるべし。

じゆか

こうよう

こんじよう

みらい

ふぼ

たす

儒家の孝養は今生にかぎる。未来の父母を扶けざれば、

げけ

せいけん

うみようむじつ

げどう

かみ

ふぼ

外家の聖賢は有名無実なり。外道は過・未をしれども父母を

たす

みち

ぶつどう

ふぼ

ごせ

たす

せいけん

な

扶くる道なし。仏道こそ父母の後世を扶くれば、聖賢の名は

ほけきよういぜんとう

だいししようじよう

きようしゆう

あるべけれ。しかれども、法華経已前等の大小乗の経宗

じしん

とくごう

叶

ふぼ

は、自身の得道なおかないがたし。いかにいわんや父母を

もん

いま

ほけきよう

とき

によにん

や。ただ文のみあつて義なし。今、法華経の時こそ、女人

じようぶつ

ときひも

じようぶつ

あらわ

だった

あくにんじようぶつ

ときじぶ

成仏の時悲母の成仏も顕れ、達多の悪人成仏の時慈父

じようぶつ あらわ

きよう ないてん こうきよう

にか 諫

の成仏も顕るれ。この経は内典の孝経なり。二箇のいさ

お

め了わんぬ。

いじよう ごか ほうしよう 驚

かんじほん ぐきよう

已上、五箇の鳳詔におどろきて、勸持品の弘経あり。

みようきよう きようもん い とうせい ぜん りつ ねんぶつしゃ

明鏡の経文を出だして当世の禅・律・念仏者ならびに諸

だんな ほうぼう

檀那の謗法をしらしめん。

にちれん もの こぞのとしくがつじゅうにちねうしるとき ぐび刎

日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑時に頸はねられ

こんぱく さどのくに かえ とし ながつ せつちゆう

ぬ。これは魂魄、佐土国にいたりて、返る年の二月、雪中

記 うえん でし 送

にしるして有縁の弟子へおくれれば、おそろしくておそろし

見 ひと 怖

しゃか たほう じつぼう

からず。みんないかにおじぬらん。これは釈迦・多宝・十方

しよぶつ 未来いにほんこくとうせい 映 たも みようきよう 形 見

の諸仏の未来日本国当世をうつし給う明鏡なり。かたみ

見

ともみるべし。

かんじほん い ねが うらおも

勸持品に云わく「ただ願わくは慮いをなしたまわされ。

ほとけめつど のち くふあくせ なか われ まさ ひろ と

仏滅度して後、恐怖悪世の中において、我らは当に広く説

もろもろ むち ひと あつく めりとう どうじよう

くべし。諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖

くわ ものあ われ みなまさ しの あくせ なか びく

を加うる者有らん。我らは皆当に忍ぶべし。悪世の中の比丘

じゃち こころてんごく え おも え

は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂つて得たりと

がまん こころ じゆうまん あれんにや のうえ

なし、我慢の心は充満せん。あるいは阿練若に納衣にし

くうげん あ みずか しん どう ぎよう おも じんげん

て空閑に在って、自ら真の道を行わずと謂つて、人間を

きようせん

ものあ

りよう

とんじやく

ゆえ

びやくえ

軽賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣のため

ほう

と

よ

くぎよう

ろくつう

らかん

に法を説いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢

ひと

あくしん

いだ

つね

せぞく

じ

おも

のごとくならん。この人は悪心を懐き、常に世俗の事を念い、

な あれんにや

か

この

われ

とが

い

つね

名を阿練若に仮りて、好んで我らが過を出ださん○常に

だいしゆ

なか

あ

われ

そし

ほつ

ゆえ

こくおう

大衆の中に在って我らを毀らんと欲するが故に、国王・

だいじん

ぼらもん

こじ

よ

びくしゆ

む

ひぼう

大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向かつて、誹謗し

わ

あく

と

じゃけん

ひと

げどう

ろんぎ

と

て我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂

じゃつこうあくせ

なか

おお

もろもろ

くふあ

あつき

わん○濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼は

み い

われ

めり

きにく

じよくせ

あくびく

ほとけ

その身に入つて、我を罵詈・毀辱せん○濁世の悪比丘は、仏

ほうべん よろ したが と ほう し  
の方便、宜しきに随つて説きたもうところの法を知らず、

あつく ひんしゆく ひんずい とううんぬん  
悪口して顰蹙し、しばしば擯出せられん」等云々。

き はち い もん みつ はじ いちぎよう つう  
記の八に云わく「文に三つあり。初めに一行は通じて

じゃにん あ すなわ ぞくしゆ つぎ いちぎよう どうもんぞうじようまん  
邪人を明かす。即ち俗衆なり。次に一行は道門増上慢の

もの あ さん しちぎよう せんししようぞうじようまん もの あ  
者を明かす。三に七行は僭聖増上慢の者を明かす。この

みつ なか はじ しの つぎ さき す だいさん もと はなは  
三つの中、初めは忍ぶべし。次は前に過ぐ。第三は最も甚

のちのち もの うた し がた ゆえ とううんぬん  
だし。後々の者は転た識り難きをもつての故に」等云々。

とうしゆん ちどほっしい はじ もろもろ しも ぎぎよう  
東春に智度法師云わく「初めに『諸の』より下の五行は

だいいち いちげ さんごう あく しの げ あくにん つぎ  
○第一に一偈は三業の悪を忍ぶ。これ外の悪人なり。次に

あくせ

しも いちげ

じようまん

しゅつけ

ひと

だいさん

『悪世』より下の一偈は、これ上慢の出家の人なり。第三

あれんにや

しも

さんげ

すなわ

しゅつけ

に『あるいは阿練若に』より下の三偈は、即ちこれ出家の

ところ いったい

あくにん

おき

とううんぬん

い

つね

だいしゅ

処に一切の悪人を撰む」等云々。また云わく『常に大衆の

なか あ

しも

りようぎよう

くじよ

む

ほう

そし

ひと

中に在って』より下の兩行は、公処に向かつて法を毀り人

ぼう

とううんぬん

を謗ず」等云々。

ねはんきよう

く

い

ぜんなんし

いっせんだいあ

らかん

かたち

涅槃經の九に云わく「善男子よ。一闍提有つて、羅漢の像

な

かうしよ

じゆう

ほうどうだいじようきようてん

ひぼう

もろもろ

を作して空処に住し、方等大乗經典を誹謗す。諸の

ぼんぷにんみお

みな

しん

あらかん

だいぼさつ

凡夫人見已わつて、皆『真の阿羅漢にして、これ大菩薩な

い

とううんぬん

い

とき

きよう

えんぶだい

り』と謂わん」等云々。また云わく「その時、この經、閻浮提

において当まさにひろく流布すべし。この時とき、当まさに諸もろもろの悪比丘有あくびくあ

つて、この経を抄略し、分わかちて多分たぶんと作し、能よく正法しようほう

の色香美味を滅めつすべし。この諸もろもろの悪人あくにん、またかくのごと

き經典を讀誦すといえども、如来の深密の要義を滅除して

世間の莊嚴の文飾・無義の語を安置す。前さきを抄つて後あとに著

け、後を抄つて前に著け、前後ぜんごを中なかに著け、中なかを前後ぜんごに著け

ん。当まさに知るべし、かくのごとき諸もろもろの悪比丘あくびくは、これ魔まの

伴ばん侶りよなり」等とう云々うんぬん。

六卷の般泥洹經はつないおんききやうに云いわく「阿羅漢あらかんに似にたる一闍提いっせんたいにして

あくごう ぎょう

いっせんだい に

あらかん

じしん

悪業を行ずるものと、一闍提に似たる阿羅漢にして慈心を

な あ

らんかん に

いっせんだい あ

もろもろ

作すものと有らん。羅漢に似たる一闍提有りとは、この諸

しゅじょう

ほうどう

ひぼう

いっせんだい

に

あらかん

の衆生の方等を誹謗せるなり。一闍提に似たる阿羅漢とは、

しょうもん

きし

ひろ

ほうどう

と

しゅじょう

かた

い

声聞を毀訾して広く方等を説き、衆生に語つて言わく『我、

なんだち

ぼさつ

ゆえん

いっさいみな

によらい

汝等とともにこれ菩薩なり。所以はいかん。一切皆、如来の

しょうあ

ゆえ

か

しゅじょう

いっせんだい

おも

性有るが故に』。しかるに、彼の衆生は、一闍提なりと謂

とううんぬん

わん」等云々。

ねはんきょう

い

われねはん

のちないしししょうほうめつ

のち

ぞうほう

涅槃経に云わく「我涅槃して後乃至正法滅して後、像法

なか

まさ

びくあ

りつ

たも

に

すこ

の中において、当に比丘有るべし。律を持つに似像せて少し

きよう ぞくじゆ おんじき とんし み じようよう けさ

く 経を讀誦し、 飲食を貪嗜してその身を長養す○袈裟を

き 服るといへども、 なお獵師の細めに視て徐かに行くがごと

ねこ ねずみ うかが つね ことば とな われ

く、猫の鼠を伺うがごとし。常にこの言を唱えん、『我、

らかん え そと けんぜん げん うち とんしつ いだ

羅漢を得たり』と○外には賢善を現じ、内には貪嫉を懐く。

あほう う ぼらもんとう じつ しゃもん

啞法を受けたる婆羅門等のごとし。 実には沙門にあらずし

しゃもん かたち げん じゃけんしじよう しょうほう ひぼう とう

て沙門の像を現じ、 邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等

うんぬん

云々。

そ

じゆぶ そうりん にちがつ びだん とうしゆん みようきよう とうせい

夫れ、鷲峰・双林の日月、 毘湛・東春の明鏡に当世の

しよしゆう こくちゆう ぜん りつ ねんぶつしゃ しゆうめん う

諸宗ならびに 国中の禅・律・念仏者が 醜面を浮かべたる

に、一分もくもりなし。

みようほけきよう

い

ほとけめつど

のち

くふあくせ

なか

妙法華経に云わく「仏滅度して後、恐怖悪世の中におい

あんらくぎようほん

い

のち

あくせ

い

のち

まつせ

ほうめつ

て」。安楽行品に云わく「後の悪世において」。また云わく

まつせ

なか

い

のち

まつせ

い

のち

まつせ

ほうめつ

い

まつせ

ほうめつ

「末世の中において」。また云わく「後の末世の法滅せんと

ほつ

とき

い

ふんべつくだくほん

い

い

あくせまつぼう

い

あくせまつぼう

とき

い

あくせまつぼう

とき

欲せん時において」。分別功德品に云わく「悪世末法の時」。

やくおうほん

い

のち

ごひやくさい

い

とううんぬん

しょうほけきよう

い

かんぜつほん

い

しょうほけきよう

い

かんぜつほん

薬王品に云わく「後の五百歳」等云々。正法華経の勸説品に

い

のち

まつせ

云わく「しかして後、末世に」。また云わく「しかして後來

まつせ

とううんぬん

い

のち

まつせ

い

のち

まつせ

い

のち

まつせ

い

のち

の末世に」等云々。添品法華経に云わく等。

てんだい

い

ぞうほう

い

ちゆう

なんさんほくしち

い

ほうけきよう

おんてき

い

ほうけきよう

おんてき

天台云わく「像法の中、南三北七は法華経の怨敵なり」。

でんぎようい

ぞうほう

まつ

なんとろくしゅう

がくしや

ほっけ

おんてき

伝教云わく「像法の末、南都六宗の学者は法華の怨敵な

とうらんぬん

かれ

とき

ふんみよう

り」等云々。彼らの時は、いまだ分明ならず。

きようしゆしやくそん

たほうぶつ

ほうとう

なか

にちがつ

なら

これは、教主釈尊・多宝仏、宝塔の中に日月の並ぶが

じつほうふんじん

しよぶつ

じゆげ

ほし

つら

なか

ごとく、十方分身の諸仏、樹下に星を列ねたりし中にして、

しようほういつせんねん

ぞうほういつせんねん

にせんねん過

まつぼう

はじ

正法一千年・像法一千年、二千年すぎて末法の始めに

ほけきよう

おんてきさんるい

はちじゆうまんおくなゆた

もろもろ

ぼさつ

法華經の怨敵三類あるべしと八十万億那由他の諸の菩薩

さだ

たま

こもう

とうせい

によらい

めつご

の定め給いし、虚妄となるべしや。当世は如来の滅後

にせんにひやくよねん

だいち

さ

外

はる

はな

咲

二千二百余年なり。大地は指さばはずるとも、春は花はさか

さんるい

てきじんかなら

にほんこく

ずとも、三類の敵人必ず日本国にあるべし。さるにては、

誰々ひとびとさんるいうち

たればとほけきよう

たれたれの人々か三類の内なるらん、また誰人か法華経の

ぎようじや指かさんるい

行者なりとさされたるらん、おぼつかなし。彼の三類の

おんてきわれいほけきようぎようじやうち

怨敵に我ら入りてやあるらん、また法華経の行者の内にて

やあるらん、おぼつかなし。

しゆうだいしししようおうぎようにじゆうよねんきのえとらしがつようかやちゆう

周の第四昭王の御宇二十四年甲寅四月八日の夜中に、

そらごしきこうきなんぼくわたひるだいちろくしゆしんどう

天に五色の光気南北に亘つて昼のごとし。大地六種に震動

あめこうがせいちみず増いつさいそうもくはな咲

し、雨ふらずして江河・井池の水まさり、一切の草木に花さ

み生ふしぎしろうおうおおおどろ

き菓なりたりけり。不思議なりしことなり。昭王大いに驚

たいしそゆううらないさいほうせいじんうしろうおう

き、太史蘇由占つて云わく「西方に聖人生まれたり」。昭王

と 問うて云わく「この国いかに」。答えて云わく「事なし。」

いっせんねん のち か せいごん くに しゅじょう り  
一千年の後に、彼の聖言この国にわたつて衆生を利すべ

し」。彼のわずかの外典の、一毫もいまだ見思を断ぜざる者、

しかれども一千年のことをしる。はたして、仏教、

いっせんじゅうごねん もう ごかん だいにめいてい えいへいじゅうねんひのとうのとし  
一千一十五年と申せし後漢の第二明帝の永平十年丁卯年、

ぶつぼうかんど  
仏法漢土にわたる。

に しゃか たほう じつぼうふんじん ほとけ みまえ  
これは似るべくもなき釈迦・多宝・十方分身の仏の御前

もろもろ ぼさつ みらいき どうせいにほんこく さんるい ほけきょう  
の 諸の菩薩の未来記なり。当世日本国に三類の法華経の

てきじん  
敵人なかるべしや。

ほとけ

ふほうぞうきようとう

しる

のたま

わ

めつご

されば、仏、付法蔵経等に記して云わく「我が滅後に

しょうほういつせんねん

あいだ

わ

しょうほう

ひろ

ひとにじゅうしにん

しだい

正法一千年が間、我が正法を弘むべき人二十四人、次第

そうぞく

かしよう

あなんとう

いつぴやくねん

きよう

に相続すべし」。迦葉・阿難等はさておきぬ、一百年の脇

びく

ろっぴやくねん

めみよう

しちひやくねん

りゆうじゆぼさつとう

いちぶん

違

比丘、六百年の馬鳴、七百年の竜樹菩薩等、一分もたが

既

い

たま

虚

わずすでに出で給いぬ。このこと、いかんがむなしかるべ

そうい

いつきようみなそうい

き。このこと相違せば、一経皆相違すべし。いわゆる、

しやりほつ

みらい

けこうによらい

かしよう

こうみようによらい

みなもうせつ

舍利弗が未来の華光如来、迦葉の光明如来も、皆妄説とな

にぜんかえ

いちじよう

ようふじようぶつ

しよししようもん

るべし。爾前返って一定となつて、永不成仏の諸声聞な

いぬ

やかん

くよう

あなんとう

くよう

り。犬・野干をば供養すとも、阿難等をば供養すべからず

となん。いかんがせん、いかんがせん。

だいいち

もろもろ

むち

ひとあ

い

きようもん

だいに

第一の「諸の無智の人<sup>あ</sup>有らん」と云うは、<sup>い</sup>経文の第二

あくせ

なか

びく

だいきん

のうえ

びく

だいだんなとう

の「悪世の中の比丘」と第三の「納衣の比丘」の大檀那等と

み

みようらくだいし

ぞくしゆ

とううんぬん

とうしゆん

見えたり。したがって妙楽大師は「俗衆」等云々。東春に

い

くじよ

む

とううんぬん

云わく「公処<sup>い</sup>に向かつて」等云々。

だいに

ほけきよう

おんてき

きよう

い

あくせ

なか

びく

第二の法華経の怨敵は、<sup>え</sup>経に云わく「悪世の中の比丘は、

じやち

こころてんごく

え

おも

え

邪智にして心<sup>え</sup>諂曲に、<sup>え</sup>いまだ得ざるを謂つて得たりとなし、

がまん

こころ

じゆうまん

とううんぬん

ねはんきよう

い

とき

我慢の心は充満せん」等云々。涅槃経に云わく「この時、

まさ

もろもろ

あくびくあ

ないし

もろもろ

あくにん

当に諸の悪比丘有るべし乃至この諸の悪人、またかく

きょうてん ぶくじゆ

によらい じんみつ ようぎ

のごとき經典を讀誦すといえども、如来の深密の要義を

めつじよ

とううんぬん しかん い

しんな たか しようきよう

滅除せん」等云々。止觀に云わく「もし信無くば、高く聖境

お おの ちぶん

ちな ぞうじようまん

を推して、己が智分にあらずとす。もし智無くば、増上慢

お おのれほとけ ひと おも とううんぬん

を起こし、己仏に均しと謂う」等云々。

どうしゃくぜんじ い に り ふか げ わず よ

道綽禪師が云わく「二に理は深く解は微かなるに由る」

とううんぬん ほうねん い しよぎよう き とき うしな とううんぬん

等云々。法然云わく「諸行は機にあらず、時を失う」等云々。

き じゆう い おそ ひとあやま げ もの しようしん

記の十に云わく「恐らくは、人謬つて解せる者、初心の

くどく だい し く じようい ゆず しようしん

功德の大なることを識らずして、功を上位に推り、この初心

あなご ゆえ いま か ぎようあき くふか しめ

を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深きことを示して、も

きようりき

あらわ

とううんぬん

でんぎようだいしい

しようぞう

す

つて経力を顕す」等云々。伝教大師云わく「正像やや過

お

まつぼう

ちか

あ

ほっけいちじよう

き

いま

ぎ已わつて、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の機、今

まき

とき

なに

し

う

正しくその時なり。何をもつてか知ることを得る。

あんらくぎようほん

い

まつせ

ほうめつ

とき

とううんぬん

安樂行品に云わく『末世の法滅せん時』となり」等云々。

えしんい

にほんいつしゆう

えんきじゆんいち

とううんぬん

恵心云わく「日本一州、円機純一なり」等云々。

どうしやく

でんぎよう

ほうねん

えしん

しん

道綽と伝教と、法然と恵心と、いずれこれを信ずべし

かれ

いつさいきよう

しようもん

まさ

ほけきよう

や。彼は一切経に証文なし。これは正しく法華経によれ

うえ

にほんこくいちどう

えいざん

だいし

じゆかい

し

なん

り。その上、日本国一同に叡山の大師は受戒の師なり。何ぞ、

てんま

付

ほうねん

こころ

寄

わ

ていざ

し

抛

天魔のつける法然に心をよせ、我が剃頭の師をなげすつる

ほうねんちしゃ

なん

しやく

せんちやく

の

わえ

や。法然智者ならば、何ぞこの釈を選択に載せて和会せ

ひと

り

隠

もの

だいに

あくせ

なか

びく

ざる。人の理をかくせる者なり。第二の「悪世の中の比丘」

さ

ほうねんとう

むかい

じゃけん

もの

と指さるるは、法然等の無戒・邪見の者なり。

ねはんきよう

い

われ

じゃけん

ひと

な

とう

涅槃経に云わく「我らことごとく邪見の人と名づく」等

うんぬん

みようらくい

みずか

さんぎよう

さ

みなじゃけん

な

云々。妙楽云わく「自ら三教を指して、皆邪見と名づく」

とううんぬん

しかん

い

だいきよう

い

さき

われ

等云々。止観に云わく「大経に云わく『これよりの前は我

みなじゃけん

ひと

な

じゃ

あく

とう

ら皆邪見の人と名づく』となり。邪あに悪にあらずや」等

うんぬん

ぐけつ

い

じゃ

すなわ

あく

ゆえ

まさ

云々。弘決に云わく「邪は即ちこれ悪なり。この故に当に

し

えん

ぜん

ふた

こころあ

いち

知るべし、ただ円を善となす。また二つの意有り。一には

したがしたが 順ぜんうをもつて善となし、背そむくをもつて悪あくとなす。相待そうだいの意い

なり○著じやくするをもつて悪あくとなし、達たつするをもつて善ぜんとなす。

相待そうだい・絶ぜつ待だいともあにくすはべなからなくは悪あくをはななるなべし。円えんにじやく著しやくするす

ら、なあおく悪あくなり。いよわんやぬまたん余んをぬやん等ん云ん々ん。

外げ道どうの善ぜん悪あくは、小しょう乘じよう經きようにたい対たいすみれなばあ皆く悪く道どう。小しょう乘じようの

善ぜん道どう、乃な至し四し味み三さん教ぎようは、法ほ華け經きにたい対たいすみれなばあ皆く邪じや悪あく。たほだつ法ほ華け

のしみし正ぜん善ぜんなり。爾に前ぜんのえん円えんはそう相そう待だい妙みよう。絶ぜつ待だい妙みようにたい対たいすみれなばあ

おあ悪くなり。前ぜん三さん教ぎようにせつ撰せんすあれくばあなあおく悪く道どうなり。爾に前ぜんのごととく

彼かのき經ぎようのご極き理りをぎ行ぎずあるく、なあおく悪く道どうなり。いいわわんんやや、観かん經ぎよう

とう けごん ほんにやきようとう およ しょうほう もと

等の、なお華嚴・般若経等に及ばざる小法を本として

ほげきよう かんぎよう と い かえ ねんぶつ たい かくほうへいしゃ

法華経を觀經に取り入れて、還つて念仏に対して閣抛閉捨

ほうねん しよけ でしとう だんなとう ひぼうしようほう

せるは、法然ならびに所化の弟子等・檀那等は誹謗正法の

もの

者にあらずや。

しゃか たほおう じつぼう しよぶつ ほう ひさ じゆう

釈迦・多宝・十方の諸仏は、法をして久しく住せしめん

ゆえ らいし ほうねん にほんこく

が故に、ここに來至したまえり。法然ならびに日本国の

ねんぶつしやとう ほげきよう まつぼう ねんぶつ さき めつじん

念仏者等は、法華経は末法に念仏より前に滅尽すべしと。

さんしよう おんてき

あに三聖の怨敵にあらずや。

だいさん ほげきよう い あれんにや のうえ

第三は法華経に云わく「あるいは阿練若に納衣にして

くうげん

あ

ないしびやくえ

ほう

と

よ

くぎよう

空閑に在つて乃至白衣のために法を説いて、世の恭敬する

ろくつう

らかん

あ

とううんぬん

ところとなること、六通の羅漢のごときもの有らん」等云々。

ろっかん

はつないおんぎよう

い

らかん

に

いっせんだい

あくごう

六卷の般泥洹經に云わく「羅漢に似たる一闍提にして悪業

ぎよう

いっせんだい

に

あらかん

じしん

な

を行ずるものと、一闍提に似たる阿羅漢にして慈心を作す

あ

らかん

に

いっせんだい

もろもろ

ものと有らん。羅漢に似たる一闍提有りとは、この諸の

しゆじよう

ほうどう

ひぼう

いっせんだい

に

あらかん

衆生の方等を誹謗せるなり。一闍提に似たる阿羅漢とは、

ししようもん

きし

ひろ

ほうどう

と

しゆじよう

かた

のたま

声聞を毀訾して広く方等を説き、衆生に語つて言わく

われ

なんだち

ぼさつ

ゆえん

いっさいみな

『我、汝等とともにこれ菩薩なり。所以はいかん。一切皆、

によらい

ししようあ

ゆえ

か

しゆじよう

いっせんだい

如来の性有るが故に』。しかるに、彼の衆生は、一闍提な

おも

とううんぬん

ねはんきよう

い

われねはん

のち

ぞうほう

りと謂わん」等云々。涅槃經に云わく「我涅槃して後○像法

なか

まさ

びくあ

りつ

たも

に

すこ

の中において、当に比丘有るべし。律を持つに似像せて少し

きようてん

どくじゆ

おんじき

とんし

み

じようよう

けさ

く經典を讀誦し、飲食を貪嗜してその身を長養す○袈裟

き

りようし

ほそ

み

しず

い

を服るといへども、なお獵師の細めに視て徐かに行くがご

ねこ

ねずみ

うかが

つね

ことば

とな

われ

とく、猫の鼠を伺うがごとし。常にこの言を唱えん、『我、

らかん

え

そと

けんぜん

げん

うち

とんしつ

いだ

羅漢を得たり』と○外には賢善を現じ、内には貪嫉を懐く。

あほう

う

ばらもんとう

じつ

しゃもん

啞法を受けたる婆羅門等のごとし。実には沙門にあらずし

しゃもん

かたち

げん

じゃけんしじよう

しようほう

ひぼう

とう

て沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等

うんぬん

みようらくい

だいさん

もつと

はなは

のちのち

もの

うた

云々。妙楽云わく「第三は最も甚だし。後々の者は転た

し 識り難きをもつての故に」等云々。東春に云わく「第三に

『あるいは阿練若に』より下の三偈は、即ちこれ出家の処

に一切の悪人を撰む」等云々。

東春に「即ちこれ出家の処に一切の悪人を撰む」等と

は、当世日本国には、いずれの処ぞや。叡山か、園城か、

東寺か、南都か、建仁寺か、寿福寺か、建長寺か、よくよ

くたずぬべし。延暦寺の出家の頭に甲冑をよろうをさす

べきか。園城寺の五分法身の膚に鎧杖を帯せるか。彼ら

は、経文に「納衣にして空閑に在り」と指すにはにず、「世

くぎよう

ろくつう らかん

の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん

ひと

うた し がた ゆえ

と人おもわず、また「転た識り難きが故に」というべしや。

からく

しょういちとう

かまくら

りようかんとう

似

ひと

怨

華洛には聖一等、鎌倉には良観等にいたり。人をあだむ

まなこ

きようもん

わ み 合

ことなかれ。眼あらば、経文に我が身をあわせよ。

しかん

だいいち

い

しかん

みようじよう

ぜんだい

止観の第一に云わく「止観の明静なることは、前代に

き

とううんぬん

ぐ いち い

かん めいてい

よるゆめ

いまだ聞かず」等云々。弘の一に云わく「漢の明帝、夜夢み

ちんちよう

およ

ぜんもん

あず

まじ

えはつでんじゆ

しより陳朝に泊ぶまで○禅門に予かり廁わつて、衣鉢伝授

もの

とううんぬん

ほちゆう

い

えはつでんじゆ

だるま

さ

する者」等云々。補注に云わく「衣鉢伝授とは、達磨を指す」

とううんぬん

し ご

い

いっしゆ

ぜんにんないしもう

は

し

等云々。止の五に云わく「また一種の禅人乃至盲・跛の師・

と ふた だらく とううんぬん し しち い 二の

徒、二りともに墮落す」等云々。止の七に云わく「九つの

こころ せけん もんじ ほつし とも じそう ぜんじ とも

意、世間の文字の法師と共ならず。また事相の禅師と共な

いっしゆ ぜんじ かんじん いちい あ あさ

らず。一種の禅師はただ観心の一意のみ有り。あるいは浅く、

いっわ よ 二の まった な そらじと

あるいは偽る。余の九つは全く無し。これ虚言にあらず。

こうけん まなこあ もの まさ しようち ぐ しち い

後賢、眼有らん者は、当に証知すべきなり」。弘の七に云わ

もんじ ほつし うち かんげな ほつそう

く『『文字の法師』とは、内に観解無くしてただ法相のみを

かま じそう ぜんじ きようち なら びきやく こころ とど

構う。『事相の禅師』とは、境智を閑わずして鼻隔に心を止

ないしこんほんうろじようとう いっし かんじん いちい あ

む乃至根本有漏定等なり。『一師はただ観心の一意のみ有

とう あた ろん うば すなわ

り』等とは、これはしばらく与えて論をなす。奪えば則ち

かんげ

か

せけん

ぜんにん

りかん

たつと

すで

観解ともに闕く。世間の禅人はひとえに理観を尚ぶ。既に

きょう そら

かん

きょう

しょう

はちじゃはつぷう

かぞ

教を諳んぜざれば、観をもつて経を消し、八邪八風を数

じょうろく

ほとけ

ごおんさんどく

がつ

な

はちじゃ

えて丈六の仏となし、五陰三毒を合して名づけて八邪と

ろくにゆう

ろくつう

しだい

したい

なし、六入をもつて六通となし、四大をもつて四諦となす。

きょう

げ

ぎ

なか

ぎ

なん

あさ

かくのごとく経を解するは偽の中の偽なり。何の浅きをか

ろん

とううんぬん

しかん

しち

い

むかし

ぎょう

らく

ぜんじ

論ずべけん」等云々。止観の七に云わく「昔、鄴・洛の禅師、

な かかい

し

じゆう

しほうくも

あお

名は河海に播き、住するときんば四方雲のごとくに仰ぎ、

さ

せんぱくぐん

な

いんいん(じうじう)

なん

りえき

去るときんば阡陌群を成し、隠々轟々たり。また何の利益か

あ

りんじゆう

みなく

とううんぬん

ぐ

しち

い

ぎょう

らく

有る。臨終に皆悔ゆ」等云々。弘の七に云わく「『鄴・洛の

ぜんじ

ぎよう

そうしゆう

あ

すなわ

せい

ぎ

みやこ

禅師』とは、『鄴』は相州に在り。即ち齊・魏の都する

ところ

おほ

ぶつぼう

おこ

ぜんそ

はじ

ち

おうけ

所なり。大いに仏法を興す。禅祖の一めなり、その地を王化

とき

ひと

こころ

まも

な

い

らく

すなわ

す。時の人の意を護つて、その名を出ださず。『洛』は即

らくよう

とううんぬん

ろっかん

はつないおんぎよう

い

くきよう

ところ

ち洛陽なり」等云々。六卷の般泥洹経に云わく「究竟の処

み

か

いっせんだい

やから

くきよう

あくごう

み

を見ずとは、彼の一闡提の輩の究竟の悪業を見ざるなり」

とううんぬん

みようらくい

だいさん

もつと

はなは

うた

し

がた

等云々。妙楽云わく「第三は最も甚だし。転た識り難き

ゆえ

とう

が故に」等。

むげん

もの

いちげん

もの

じゃけん

もの

まつぼう

はじ

さんるい

み

無眼の者・一眼の者・邪見の者は、末法の始めの三類を見

いちぶん

ぶつげん

え

者

知

るべからず。一分の仏眼を得るもの、これをしるべし。

こくおう だいじん ばらもん こじ む とううんぬん とうしゆん  
「国王・大臣・婆羅門・居士に向かつて」等云々。東春に

い くじよ む ほう そし ひと ぼう とううんぬん そ  
云わく「公処に向かつて法を毀り人を謗ず」等云々。夫れ、

むかし ぞうほう まつ ごみよう しゆえんとう そうじよう 捧 でんぎようだいし  
昔、像法の末には護命・修円等、奏状をささげて伝教大師

ざんそう いま まっぼう はじ りようかん ねんあとう ぎしよ しる  
を讒奏す。今、末法の始めには良觀・然阿等、偽書を注し

しようぐんけ さんるい おんてき  
て將軍家にささぐ。あに三類の怨敵にあらずや。

とうせい ねんぶつしやとう てんだい ほつけしゆう だんな こくおう だいじん  
当世の念仏者等、天台法華宗の檀那の国王・大臣・

ばらもん こじとう む ほう そし ひと ぼう とううんぬん そ  
婆羅門・居士等に向かつて云わく「法華経は理深く、我ら

げわす ほう いた ふか き いた あさ とう もう  
は解微かなり。法は至つて深く、機は至つて浅し」等と申し

疎 たか しょうきよう お おの ちぶん  
うとむるは、「高く聖境を推して、己が智分にあらずとす」

もの

ぜんしゅうい

ほけきよう

つき

ゆび

ぜんしゅう

の者にあらずや。禅宗云わく「法華経は月をさす指、禅宗

つき

つき

得

ゆび

ぜん

ほとけ

こころ

ほけきよう

は月なり。月をえて、指なにかせん。禅は仏の心、法華経

ほとけ

みこと

ほとけ

ほけきようとう

いつさいきよう

たま

のち

は仏の言なり。仏、法華経等の一切経をとかせ給いて後、

さいご

いち

房

はな

かしよういちにん

授

証

最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさずく。そのしるし

ほとけ

おんけさ

かしよう

ふぞく

ないし

ふほうぞう

にじゅうはち

に、仏の御袈裟を迦葉に付嘱し、乃至、付法蔵の二十八・

ろくそ

つた

とううんぬん

だいもうご

こくちゆう

おうすい

六祖までに伝う」等云々。これらの大妄語、国中を誑酔せ

年 久

しめてとしひさし。

てんだいしんごん

こうそうとう

な

いえ

得

わ

また、天台真言の高僧等、名はその家にえたれども、我が

しゅう

暗

とんよく

ふか

くげ

ぶけ

ぎ

宗にくらし。貪欲は深く、公家・武家をおそれて、この義

しょうぶく

さんだん

むかし

たほう

ふんじん

しよぶつ

ほけきよう

を証伏し讚歎す。昔の多宝・分身の諸仏は、法華經の

りようぼうくじゆう

しょうみやう

いま

てんだいしゆう

せきとく

りじんげみ

令法久住を証明す。今の天台宗の碩徳は、理深解微を

しょうぶく

にほんこく

ほけきよう

な

証伏せり。かるがゆえに、日本国にただ法華經の名のみあ

とくどう

ひといちにん

たれ

ほけきよう

ぎようじや

つて、得道の人一人もなし。誰をか法華經の行者とせん。

じとう

や

るさい

そうりよ

数

知

くげ

寺塔を焼いて流罪せらるる僧侶はかずをしらず。公家・

ぶけ

へつら

憎

こうそう

おお

ほけきよう

武家に諛ってにくまるる高僧これ多し。これらを法華經の

ぎようじや

行者というべきか。

ぶつこ

虚

さんるい

おんてき

こくちゆう

じゆうまん

仏語むなしからざれば、三類の怨敵すでに国中に充満

きんげん

破

故

ほけきよう

ぎようじや

せり。金言のやぶるべきかのゆえに、法華經の行者なし。

いかんがせん、いかんがせん。

誰

ひと

しゅぞく

あつく

めり

たれ

そもそも、たれやの人か衆俗に悪口・罵詈せらるる。誰の

そう

とうじよう

くわ

たれ

そう

ほけきよう

くげ

僧か刀杖を加えらるる。誰の僧をか法華経のゆえに公家・

ぶけ

そう

たれ

そう

ひんずい

たびたび

武家に奏する。誰の僧か「しばしば擯出せられん」と度々

流

にちれん

ほか

にほんこく

と い

ながさるる。日蓮より外に日本国に取り出ださんとするに

ひと

人なし。

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

てん

捨

たも

日蓮は法華経の行者にあらず。天これをすて給うゆえに。

たれ

とうせい

ほけきよう

ぎようじや

ぶつご

じつご

ほとけ

誰をか当世の法華経の行者として仏語を実語とせん。仏

だいは

み

かげ

しようじよう

離

しやうとくたいし

と提婆とは身と影とのごとし。生々にはなれず。聖徳太子

もりや れんげ けかどうじ

ほけきよう ぎようじや

と守屋とは蓮華の華菓同時なるがごとし。法華經の行者あ

かなら さんるい おんてき さんるい

らば、必ず三類の怨敵あるべし。三類はすでにあり。法華經

ぎようじや たれ もと し いちげん かめ う

の行者は誰なるらん。求めて師とすべし。一眼の亀の浮き

ぎ あ

木に値うなるべし。

ひと い とうせい さんるい あ 似

ある人云わく、当世の三類はほぼ有るにいたり。ただし

ほけきよう ぎようじや なんじ ほけきよう ぎようじや

法華經の行者なし。汝を法華經の行者といわんとすれば、

おほ そうい きよう い てん もろもろ どうじ

大なる相違あり。この經に云わく「天の諸の童子は、

きゆうし とうじよう くわ どく がい あた

もつて給使をなさん。刀杖も加えず、毒も害すること能わ

い ひと にく の くち すなわ へいそく

じ」。また云わく「もし人、悪み罵らば、口は則ち閉塞せ

ん」等。とうまた云わく「現世安穩げんせあんのんにして、後に善処のち ぜんじよに生ぜん」

等云々。とううんぬんまた「頭破こうべわれて七分しちぶんに作るなこと、阿梨樹ありじゆの枝えだのご

とくならん」。また云わく「また現世げんせにおいて、その福報ふくほうを

得ん」等。えまた云わく「もしまたこの經典きやうてんを受持じゆじせん者を

見て、その過惡かあくを出ださば、もしは実じつにもあれ、もしは不実ふじつ

にもあれ、この人は現世ひと げんせに白癩びやくらいの病やまいを得ん」等云々。え

答えて云わく、汝こたが疑いい大なんじいに吉うたがし。ついでに不審ふしんを晴は

らさん。不輕品ふきようぼんに云わく「悪口あつく・罵詈めり」等。とうまた云わく「あ

るいは杖木じやうもく・瓦石がしやくをもつて、これを打擲ちやうちやくす」等云々。とううんぬん

ねはんぎよう い ころ がい とううんぬん ほけきよう

涅槃経に云わく「もしは殺し、もしは害せん」等云々。法華経

い きよう によらい げん いま おんしつ

に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉

おほ とううんぬん

多し」等云々。

ほとけ こゆび だいば くおう だいなん あ たも

仏は小指を提婆にやぶられ、九横の大難に値い給う。こ

ほけきよう ぎようじや ふきようぼさつ いちじよう ぎようじや

れは法華経の行者にあらずや。不軽菩薩は一乗の行者と

もくれん ちくじよう ころ ほけきようきべつ のち

いわれまじきか。目連は竹杖に殺さる。法華経記別の後な

ふほうぞう だいじゆうし だいばぼさつ だいにじゆうご ししそんじや ににん

り。付法蔵の第十四の提婆菩薩、第二十五の師子尊者の二人

ひと ころ ほけきよう ぎようじや

は人に殺されぬ。これらは法華経の行者にはあらざるか。

じく どうしよう そざん なが ほうどう かなやき かお 焼 こうなん

竺の道生は蘇山に流されぬ。法道は火印を面にやいて江南

移

にうつさる。北野天神、白居易これらは法華經の行者なら

きたのてんじん

はくきよい

ほけきよう

ぎようじゃ

ざるか。

こと

こころ

あん

ぜんしよう

ほけきようひぼう

つみ

事の心を案ずるに、前生に法華經誹謗の罪なきもの

こんじよう

ほけきよう

ぎよう

せけん

とが

寄

つみ

今生に法華經を行ず、これを世間の失によせ、あるいは罪

怨

げんぼち

しゆら

たいしやく

なきをあだすれば、たちまちに現罰あるか。修羅が帝釈を

射

こんじちよう

あのくち

い

とう

かなら

かえ

いちじ

そん

いる、金翅鳥の阿耨池に入る等、必ず返つて一時に損ずる

てんだい

いま

わ

しつく

みなかこ

よ

こんじよう

がごとし。天台云わく「今の我が疾苦は皆過去に由る。今生

しゆふく

ほう

しようらい

あ

とううんぬん

しんじかんぎよう

い

かこ

の修福は報、将来に在り」等云々。心地觀經に云わく「過去

いん

し

ほつ

げんざい

か

み

みらい

か

し

の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未来の果を知

らんと欲せば、その現在の因を見よ」等云々。不軽品に云わ  
く「その罪は畢え已わつて」等云々。不軽菩薩は、過去に  
法華經を謗じ給う罪身に有るゆえに、瓦石をかぼるとみえ  
たり。

また、順次生に必ず地獄に墮つべき者は、重罪を造る

とも現罰なし。一闍提人これなり。涅槃經に云わく「迦葉

菩薩、仏に白して言さく『世尊よ、仏の所説のごとく、

大涅槃の光、一切衆生の毛孔に入る』と」等云々。また云

わく「迦葉菩薩、仏に白して言さく『世尊よ、いかんぞ、

いまだ菩提心を発さざる者、菩提の因を得ん』と』等云々。

ほとけ

と

こた

のたま

ほとけ

かしよう

つ

仏この問いを答えて云わく「仏、迦葉に告げたまわく』も

だいねはんきよう

き

われ

ぼだいしん

おこ

しこの大涅槃経を聞くことあつて、我は菩提心を発すこと

もち

い

しようほう

ひぼう

ひと

そくじ

よる

ゆめ

を用いずと言つて正法を誹謗せん。この人、即時に夜の夢

なか

らせつ

かたち

み

しんちゆう

ふい

らせつ

かた

の中において羅刹の像を見て心中に怖畏す。羅刹語つて

い

つたな

ぜんなんし

なんじいま

ぼだいしん

おこ

言わく、咄いかな、善男子よ。汝今もし菩提心を発さず

まさ

なんじ

いのち

た

ひとおうふ

さ

お

んば、当に汝が命を断つべしと。この人惶怖し、寤め已わ

すなわ

ぼだい

こころ

おこ

まさ

し

ひと

つて、即ち菩提の心を発す○当に知るべし、この人はこ

だいぼさつ

とううんぬん

甚

だいあくにん

もの

れ大菩薩なり』と』等云々。いとうの大悪人ならざる者の

しょうほう ひぼう

そくじ ゆめ

翻

こころしょう

正法を誹謗すれば、即時に夢みてひるがえる心生ず。

い こもく しやくせん とう

い い しゆかんう

また云わく「枯木・石山」等。また云わく「焦れる種甘雨

あ みようじゆおでい とう

に遇うといえども」等。また「明珠淤泥」等。また云わく

ひと て きず どくやく と

とう い

「人の手に創あるに、毒薬を捉るがごとし」等。また云わ

だいう かう じゆう とううんぬん

おお たと

く「大雨、空に住せず」等云々。これらの多くの譬えあり。

せん じようぼん いっせんだいにん じゆんじしよう

詮ずるところは、上品の一闡提人になりぬれば、順次生に

かなら むけんごく お げんばち

れい か けつ

必ず無間獄に墮つべきゆえに現罰なし。例せば、夏の桀・

いん ちゆう よ てんぺん じゆうかあ かなら よ 滅

殷の紂の世には天変なし。重科有って必ず世ほろぶべき

ゆえか。

また守護神しゅごしんこの国くにをすつるゆえに現罰げんばちなきか。謗法ほうぼうの世よ

をば守護神しゅごしんすてて去り、諸天しよてんまぼるべからず。かるがゆえ

に、正法しやうほうを行ぎやうずるものにしるしなし。還かえつて大難だいなんに値あう

べし。金光明経こんこうみやうきやうに云いわく「善業ぜんごうを修しゆする者は日々ものひびに衰減すいげんす」

等云々とううんぬん。悪国あっこく・悪時あくじこれなり。つぶさには立正安国論りつしやうあんこくろんに

勘勘かんがえたるがごとし。

詮せんずるところは、天てんもすて給たまえ、諸難しよなんにもあえ、身命しんみやうを

期ごとせん。身子しんしが六十劫ろくじつごうの菩薩ぼさつの行ぎやうを退たいせし、乞眼こつげんの

婆羅門ばらもんの責せめを堪たえざるゆえ。久遠くおん・大通だいつうの者ものの三さん・五ごの塵じん

經

あくちしき あ

ぜん つ あく

ほけきよう

をふる、悪知識に値うゆえなり。善に付け悪につけ、法華經

捨

じごく ごう

だいがん た

ひほんこく くらい

をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本国の位

讓

ほけきよう

かんぎようとう

ごしよう 期

をゆずらん、法華經をすてて觀經等について後生をこそせよ、

ふぼ くび は

ねんぶつもう

しゅじゅ だいなんしゅつたい

父母の頸を刎ねん、念仏申さずばなんどの種々の大難出来

ちしや わ ぎ

もち

ほか

すとも、智者に我が義やぶられずば用いじとなり。その外の

だいなん かぜ まえ ちり

われにほん はしら

われにほん

大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならん、我日本

がんもく

われにほん たいせん

とう

誓

ねが

の眼目とならん、我日本の大船とならん等とちかいし願

破

やぶるべからず。

うたが

い

なんじ

るざい

しざいとう

かこ

疑って云わく、いかにとして汝が流罪・死罪等を過去の

しゆくじゆう 知

宿習としらん。

こた い どうきよう しきぎよう あらわ しんおうけんぎ かがみ

答えて云わく、銅鏡は色形を顕す。秦王驗偽の鏡は

げんざい つみ あらわ ぶつぼう かがみ かこ ごういん あらわ

現在の罪を顕す。仏法の鏡は過去の業因を現す。

はつないおんきよう い ぜんなんし かこ むりよう しょざい

般泥洹経に云わく「善男子よ。過去にかつて無量の諸罪、

しゆくじゆ あくごう つく もろもろ ざいほう きようい

種々の悪業を作るに、この諸の罪報は○あるいは輕易せ

ぎようじゆうしゆる えぶくた おんじきそ たから もと

られ、あるいはは形状醜陋、衣服足らず、飲食麤疎、財を求

むるに利あらず、貧賤の家・邪見の家に生まれ、あるいは

おうなん あ よ しゆくじゆ にんげん くほう げんせ かる

王難に遭い、および余の種々の人間の苦報あらん。現世に輕

く受くるは、これ護法の功德力に由るが故なり」等云々。

う ごほう くだくりき よ ゆえ とううんぬん

く受くるは、これ護法の功德力に由るが故なり」等云々。

きようもん にちれん み

ふけい

こぎ

こおり

この経文、日蓮が身にあたかも符契のごとし。狐疑の氷

解

せんまん なん よし

いちいち

く

わ み

合

とけぬ。千万の難も由なし。一々の句を我が身にあわせん。

きようい

とううんぬん

ほけきよう

い

きようせんぞうしつ

「あるいは軽易せらる」等云々。法華経に云わく「軽賤憎嫉」

とううんぬん

にじゆうよねん

あいだ

きようまん

等云々。二十余年が間の軽慢せらる。「あるいは

ぎようじようしゆる

い

えぶくた

よ み

おんじき

形状醜陋」、また云わく「衣服足らず」、予が身なり。「飲食

そそ

よ み

たから

もと

り

よ み

麤疎」、予が身なり。「財を求むるに利あらず」、予が身な

ひんせん

いえ

う

よ み

おうなん

あ

り。「貧賤の家に生まる」、予が身なり。「あるいは王難に遭

とう

きようもん

ひとうたが

ほけきよう

い

う」等、この経文、人疑うべしや。法華経に云わく「し

ひんずい

きようもん

い

しゆじゆ

とううんぬん

ばしば擯出せられん」。この経文に云わく「種々」等云々。

「これ護法の功德力に由るが故なり」等とは、摩訶止觀の

だいご い さんぜんみじやく どう いた

第五に云わく「散善微弱なるは動ぜしむること能わず。今、

しかん しゆ ごんぴようか しょうじ りん どう とううんぬん

止觀を修して健病虧けざれば、生死の輪を動ず」等云々。

い さんしょうしま ふんぜん きそ お とううんぬん

また云わく「三障四魔、紛然として競い起こる」等云々。

われ むし あくおう う ほけきよう ぎようじや

我、無始よりこのかた、悪王と生まれて、法華經の行者

えじき でんぱたとう うば 取 数 知 とうせい

の衣食・田畠等を奪いとりせしこと、かずしらず。当世

にほんこく しょうにん ほけきよう さんじ 倒

日本国の諸人の、法華經の山寺をたおすがごとし。また

ほけきよう ぎようじや くび は かず

法華經の行者の頸を刎ぬること、その数をしらず。これら

じゆうざい 果 果

の重罪、はたせるもあり、いまだはたさざるもあるらん。

は

よごん

尽

しやうじ

はな

とき

かなら

果たすも、余残いまだつきず。生死を離るる時は、必ずこ

じゆうざい

消果

しゆつり

くどく

せんきやう

の重罪をけしはてて出離すべし。功德は浅軽なり、これ

つみ

じんじゆう

ごんきやう

ぎやう

じゆうざい

らの罪は深重なり。権経を行ぜしには、この重罪いま

起

くろがね

や

甚

鍛

かく

だおこらず。鉄を熱くにいとうきたわざれば、きず隠れ

見

たびたび責

現

あき

み

搾

てみえず。度々せむれば、きずあらわる。麻の子をしぼる

責

あぶらすく

に、つよくせめざれば、油少なきがごとし。

いま

にちれん

ごうじやう

こくど

ほうぼう

せ

だいなん

きた

今、日蓮、強盛に国土の謗法を責むればこの大難の来る

かこ

じゆうざい

こんじやう

ごほう

まね

い

は、過去の重罪の今生の護法に招き出だせるなるべし。

くろがね

ひ

あ

くろ

ひ

あ

あか

き

鉄の火に値わざれば黒し、火と合いぬれば赤し。木をも

はやきながれ 掻

なみやま

ねむ

しし て

付

つて急流をかけば、波山のごとし。睡れる師子に手をつく

おほ ほ

れば大いに吼ゆ。

ねはんぎよう

い

たと

ひんによ

こけ

くご

ものあ

涅槃経に云わく「譬えば貧女のごとし。居家、救護の者有

くわ

びようく

けかち

せ

ることなく、加うるにまた、病苦・飢渴の逼むるところと

ゆぎよう

こつがい

た

きやくしや

とど

よ

いっし

なつて、遊行・乞丐す。他の客舎に止まり、寄つて一子を

しよう

きやくしや

しゆ

くちく

さ

さん

生ず。この客舎の主、駆逐して去らしむ。その産してい

ひさ

こ

たずさ

いだ

たこく

いた

ほつ

まだ久しからず、この児を携え抱いて他国に至らんと欲し、

りゆうろ

あくふうう

あ

かんくなら

いた

おお

その中路において、悪風雨に遇つて、寒苦並び至り、多く

か

あぶ

はち

いらむし

どくちゆう

す

く

ごうが

蚊・虻・蜂・螫・毒虫の咬い食うところとなる。恒河に

逕由けいゆし児こを抱いだいて渡わたる。その水漂疾みずひょうしつなれども、放はなち捨すてず。

ここにおぼいて、母子ぼしついにとももつに没もつしぬ。かくのごとき女人にょにん

は慈念じねんの功徳くどくもて命終みょうじゆうの後のち梵天ぼんてんに生しょうず。文殊師利もんじゆしりよ。も

し善男子ぜんなんし有あつて正法しょうほうを護まもらんと欲ほつせば○彼の貧女か ひんによの恒河ごうが

に在あつて子こを愛念あいねんするがたしんみようめに身命すを捨すつるがごとくせ

よ。善男子ぜんなんしよ。護法ごほうの菩薩ぼさつもまた応おうにかくのごとくひとなるべ

し。むしろ身命しんみようを捨すてよ○かくのごときの人ひと、解脱げだつを求め

ずといえども、解脱げだつに自おのずから至いたること、彼の貧女か ひんによの梵天ぼんてんを

求めもつざれども、梵天ぼんてんに自おのずから至いたるがごとし」等とううんぬん云々。

きようもん

しょうあんだいし

さんしょう

しゃく

たま

この経文は、章安大師、三障をもつて釈し給えり。そ

びんにん

ほうざい

無

によにん

れをみるべし。「貧人」とは、法財のなきなり。「女人」と

いちぶん

じ

もの

きやくしや

えど

いっし

は、一分の慈ある者なり。「客舎」とは、穢土なり。「一子」

ほけきよう

しんじん

りよういん

こ

しゃ

しゆ

くちく

とは、法華経の信心、了因の子なり。「舎の主、驅逐す」

るざい

さん

ひや

とは、流罪せらる。「その産していまだ久しからず」とは、

しん

久

あくふう

るざい

ちよくせん

いまだ信じてひさしからず。「悪風」とは、流罪の勅宣な

か あぶ とう

もろもろ

むち

ひと

あつく

めりとう

り。「蚊・虻」等とは、「諸の無智の人の、悪口・罵詈等す

あ

ぼ したも

もつ

つい

ほけきよう

るもの有らん」なり。「母子共に没す」とは、終に法華経の

しんじん

破

こうへ

は

ぼんてん

信心をやぶらずして頭を刎ねらるるなり。「梵天」とは、

ぶっかい う

仏界に生まるるをいうなり。

いんごう もう ぶっかい 変

引業と申すは、仏界まかわらず。日本・漢土の万国の諸人

ころ ぎやく ほうぼう むけんじごく お よ

を殺すとも、五逆・謗法なければ、無間地獄には堕ちず。余

あくどう たさい 経 しきてん う まんかい たも

の悪道にして多歳をふべし。色天に生まるること、万戒を持

まんぜん 修 さんぜん う ぼんてんのう

てども万善をすすれども、散善にては生まれず。また梵天王

うろ いんごう うえ じひ くわ しやう いま

となること、有漏の引業の上に慈悲を加えて生ずべし。今

ひんによ こ おも ぼんてん う つね しやうそ

この貧女が子を念うゆえに梵天に生まるるは、常の性相に

そうい しょうあん に せん こ おも

は相違せり。章安の二はあれども、詮ずるところは子を念

じねん ほか ねん いっきやう じやう に

う慈念より外のことなし。念を一境にするは、定に似た

り。専ら子もつぱを思こうは、また慈悲おもにもじひにたり。かるがゆえに、  
他事たじなけれども天てんに生うまるるか。

また仏ほとけになる道みちは、華嚴けごんの唯心ゆいしん法界ほっかい、三論さんろんの八不はつぷ、法相ほつそう

の唯識ゆいしき、真言しんごんの五輪觀等ごりんかんとうも実じつには叶かなうべしともみえず。た

だ天台てんだいの一念三千いちねんさんぜんこそ仏ほとけになるべき道みちとみゆれ。この一念いちねん

三千も我らさんぜん一分われの慧解いちぶんもなし。しかれども、一代えいげ経きよう々の中なか

にはこの経きようばかり一念三千いちねんさんぜんの玉たまをいだけり。余経あぶらの理りは玉たま

に似にたる黄石こうせきなり。沙すなをしぼるに油あぶらなし、石女しゃくによに子このな

きがごとし。諸経しよきようは智者ちしやなお仏ほとけにならず、この経きようは愚人ぐにん

も仏因を種うべし。解脱を求めずとも、解脱に自ずから至

る」等云々。

我ならびに我が弟子、諸難ありとも疑う心なくば、自然

に仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑わざれ。現世

の安穩ならざることをなげかざれ。我が弟子に朝夕教えし

かども、疑いをおこして皆すてけん。つたなき者のならい

は、約束せし事をまことの時はわするるなるべし。

妻子を不便とおもうゆえ、現身にわかれんことをなげく

らん。多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか、

ぶつどう

離

おな 別

わが

仏道のためにはなれしか。いつも同じわかれなるべし。我、

ほけきよう

しんじん

破

りようぜん

詣

かえ

法華経の信心をやぶらずして、靈山にまいりて返つて

導

みちびけかし。

うたが

い

ねんぶつしや

ぜんしゆうとう

むけん

もう

あらそ

疑つて云わく、念仏者と禪宗等を無間と申すは、諍う

こころ

しゅらどう

お

ほけきよう

心あり。修羅道にや墮つべかるらん。また法華経の

あんらくぎようほん

い

ねが

ひと

きようてん

とが

と

安樂行品に云わく「樂つて人および經典の過を説かざれ。

しよよ

ほつし

きようまん

とううんぬん

なんじ

きようもん

また諸余の法師を輕慢せざれ」等云々。汝この經文に

そうい

てん

捨

相違するゆえに、天にすてられたるか。

こた

い

しかん

い

そ

ほとけ

りようせつ

いち

答えて云わく、止觀に云わく「夫れ、仏に両説あり。一

にはしょう撰に、二には折しやくなり。安楽行あんらくぎように『長短ちようたんを称しょうせざれ』

というがしょうごときは、これ撰ぎの義だいきようなり。大経とうじように『刀杖しゆうじを執持しゆうじ

し乃至ないしくび首きを斬きれ』というは、これ折しやくの義ぎなり。与奪途よだつみちを殊こと

にすといえども、ともに利益りやくせしむとうろんぬん」等云々。

弘決ぐけつに云いわく『夫それ、仏ほとけに両説りようせつあり』等とうとは○『大経だいきよう

に刀杖とうじようを執持しゆうじす』とは、第三だいさんに云いわく『正法しょうほうを護まもる者ものは、

五戒ごかいを受けず、威儀いぎを修しゆせず』○『乃至ないし』より下しもの文もんは、仙予せんよ

国王等こくおうとうの文もんなり。また『新医しんい禁いめて云いわく、もしさらにな

すことあらば、当まさにその首くびを断たつべし』と、かくのごとき等とう

の文もん、ならびはほうにこれ破法ひとの人しやくぶくを折伏いつさいす。一切きやうろんの経論ふたこの二いつを出とうらんぬんでず」等云々。

もんぐい 文句とに云だいきやうわく「問あう。大経こくおうには、国王しんぷに親付ゆみし弓じを持あし

やたい 矢あくにんを帶さいぶくし悪人あを摧伏きやうせよと明ごうせいかす。この経おんりは、『豪勢ごうせいを遠離おんり

し、謙下けんげし慈善じぜんせよ』と。剛柔ごうにゆう碩おおいに乖そむけり。いことかんぞ異こと

ならざらん。答こたう。大経だいきやうはひとえに折伏しやくぶくを論ろんずれども、

『一子地いつしじに住じゆうす』と。何なんぞかしょうじゆつて撰受な無なからん。この経きやう

はひとえに撰受しょうじゆを明あかせども、『頭破こづへれて七分しちぶんに作なる』と。

折伏しやくぶく無なきにあらず。各おのおの一端いつたんを挙あげて、時ときに適かなうのみ」等とう

うんぬん

云々。

ねはんきよう しょ い しゅつけ ざいけ ほう まも

涅槃經の疏に云わく「出家・在家、法を護らんには、そ

がんしん しょい と じ す り せん だいきよう たす ひろ

の元心の所為を取り、事を棄て理を存して大教を匡け弘む。

ゆえ しょうほう ごじ い しょうせつ かかわ ゆえ

故に『正法を護持せんには』と言う。小節に拘らず。故

いぎ しゆ い むかし とき たい ほうひろ

に『威儀を修せず』と言う○昔の時は平らかにして法弘ま

まさ かい たも じよう たも いま とき けん

る。応に戒を持つべし。杖を持つことなかれ。今の時は嶮

ほうか まさ じよう たも かい たも

にして法翳くる。応に杖を持つべし。戒を持つことなかれ。

こんじゃく けん まさ じよう たも こんじゃく

今昔ともに嶮ならば、応にとも杖を持つべし。今昔と

たい かい たも しゅしやよろ

もに平らかならば、応にとも戒を持つべし。取捨宜しき

え いうこう  
を得て、一向にすべからず」等云々。

とううんぬん

なんじ ふしん せけん がくしや たぶん どうり

汝が不審をば、世間の学者、多分は道理とおもう。いか

かんぎよう

にちれん

でしとう

思

捨

に諫曉すれども、日蓮が弟子等もこのおもいをすてず。

いっせんだいにん

てんだい

みようらくとう

しゃく

出

一闡提人のごとくなるゆえに、まず天台・妙楽等の釈をい

じやなん

防

だして、かれが邪難をふせぐ。

そ

しょうじゆ

しゃくぶく

もう

ほうもん

すいか

ひ

みず

夫れ、撰受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水

厭

みず

ひ

憎

しょうじゆ

もの

しゃくぶく

笑

をいとう。水は火をにくむ。撰受の者は折伏をわらう。

しゃくぶく

もの

しょうじゆ

悲

折伏の者は撰受をかなしむ。

むち

あくにん

こくど

じゅうまん

とき

しょうじゆ

さき

無智・悪人の国土に充満の時は、撰受を前とす。

あんらくぎようほん

じゃち

ほうぼう

もの

おお

とき

しゃくぶく

さき

安楽行品のごとし。邪智・謗法の者の多き時は、折伏を前

じようふきようほん

たと

あつ

とき

かんすい

もち

とす。常不軽品のごとし。譬えば、熱き時に寒水を用い、

さむ

とき

ひ

好

そうもく

にちりん

けんぞく

さむ

つき

寒き時に火をこのむがごとし。草木は日輪の眷属、寒き月に

く

得

しよすい

げつりん

しよじゆう

あつ

とき

ほんしゆう

うしな

苦をう。諸水は月輪の所従、熱き時に本性を失う。

まつぼう

しようじゆ

しゃくぶく

あつこく

はほう

りようこく

末法に摂受・折伏あるべし。いわゆる悪国・破法の両国

にほんこく

とうせい

あつこく

はほう

くに

知

あるべきゆえなり。日本国の当世は悪国か破法の国かとし

るべし。

と

い

しようじゆ

ときしゃくぶく

ぎよう

しゃくぶく

とき

問うて云わく、摂受の時折伏を行ずると、折伏の時

しようじゆ

ぎよう

りやく

摂受を行ずると、利益あるべしや。

こた い ねはんぎよう い かしようぼさつ ほとけ もう  
答えて云わく、涅槃経に云わく「迦葉菩薩、仏に白して

もう

によらい ほっしん こんごうふえ

しよいん

言さく○『如来の法身は金剛不壊なり。しかるにいまだ所因

し

あた ほとけのたま

かしよう よ しようほう

を知ること能わず、いかん』。仏言わく『迦葉よ。能く正法

ごじ

いんねん

ゆえ

こんごうしん じようじゆ

を護持する因縁をもつての故に、この金剛身を成就するこ

え

かしよう

われ しようほう

ごじ

いんねん

いま

とを得たり。迦葉よ。我、正法を護持する因縁もて、今こ

こんごうしん

じようじゆ

え

じようじゆう

やぶ

の金剛身を成就することを得たり。常住にして壊れず。

ぜんなんし

しようほう

ごじ

もの

ごかい

う

いぎ

しゆ

善男子よ。正法を護持せん者は、五戒を受けず、威儀を修

まさ

とうけん

きゆうせん

じ

しゆじゆ

ほう

せず、応に刀剣・弓箭を持すべし○かくのごとく種々に法

と

ししく

あた

ひほう

あくにん

を説くも、しかもなお師子吼すること能わず○非法の悪人

いづれ

あた

びく

じり

を降伏すること能わず、かくのごとき比丘、自利しおよび

しゅじよう

り

あた

まさ

し

やから

けたい

衆生を利すること能わず。当に知るべし、この輩は懈怠・

らんだ

よ

かい

たも

じようぎよう

しゅじ

まさ

し

懶惰なり。能く戒を持ち浄行を守護すといえども、当に知

ひと

よ

ないしとき

はかい

るべし、この人は能くならずところなからん乃至時に破戒の

ものあ

ことば

き

お

とも

しんに

者有つてこの語を聞き已わつて、みな共に瞋恚してこの

ほっし

がい

せつぽう

もの

みようじゆう

法師を害せん。この説法の者、たといまた命終すとも、

じかい

じりりた

な

とううんぬん

しやうあんい

しゅしや

なお持戒・自利利他と名づく』と』等云々。章安云わく「取捨

よろ

え

いつこう

とう

てんだい

とき

かな

宜しきを得て、一向にすべからず」等。天台云わく「時に適

とううんぬん

たと

あき

お

たね

お

でんばた

うのみ」等云々。譬えば、秋の終わりに種子を下ろし田畠を

かえさんに、稲米をうることかたし。

けんになねんちゆう

ほうねん

だいにち

ににんしゅつたい

ねんぶつしゆう

ぜんしゆう

建仁年中に法然・大日の二人出来して、念仏宗・禅宗

こうぎよう

ほうねん

ほけきよう

まつぼう

い

を興行す。法然云わく「法華経は末法に入つては、いまだ

いちにん

う

ものあ

せん

なか

ひと

な

とううんぬん

だいにちい

一人も得る者有らず、千の中に一りも無し」等云々。大日云

きようげ

べつでん

とううんぬん

りようぎ

こくど

じゆうまん

わく「教外に別伝す」等云々。この両義、国土に充満せり。

てんだいしんごん

がくしやとう

ねんぶつ

ぜん

だんな

詔

恐

天台真言の学者等、念仏・禅の檀那をへつらいおそるるこ

いぬ

あるじ

尾

振

ねこ

恐

と、犬の主におをふり、ねずみの猫をおそるるがごとし。

こくおう

しやうぐん

宮

仕

はぶつぼう

いんねん

はこく

いんねん

よ

国王・将軍にみやづかい、破仏法の因縁、破国の因縁を能

と

よ

てんだいしんごん

がくしやとう

こんじよう

く説き、能くかたるなり。天台真言の学者等、今生には

がきどう お ごしよう あび まね さんりん 交

餓鬼道に堕ち、後生には阿鼻を招くべし。たとい山林にまじ

いちねんさんぜん かん 凝 ふうげん さんみつ あぶら

わって一念三千の觀をこらすとも、空閑にして三密の油を

じき しょうしゃく にもん わきま

こぼさずとも、時機をしらず撰折の二門を弁えずば、い

しょうじ はな

かでか生死を離るべき。

と い ねんぶつしゃ ぜんしゆうとう せ かれ 怨

問うて云わく、念仏者・禅宗等を責めて彼らにあだまれ

りやく

たる、いかなる利益かあるや。

こた い ねはんぎよう い ぜんびく

答えて云わく、涅槃経に云わく「もし善比丘あつて、法を

やぶ もの み お かしゃく くけん こしよ まさ し

壊る者を見て、置いて、呵責し驅遣し挙処せずんば、当に知

ひと ぶつぼう なか あだ よ くけん かしゃく

るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く驅遣し呵責し

こしよ わ でし しん しようもん どううんぬん ぶつぼう

挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」等云々。「仏法を

えらん ぶつぼう なか あだ じな いたわ した

壊乱するは、仏法の中の怨なり。慈無くして詐り親しむは、

か あだ よ きゆうじ ごほう しようもん しん

これ彼が怨なり。能く糾治せんは、これ護法の声聞、真の

わ でし か あく のぞ すなわ か おや

我が弟子なり。彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親な

よ かしやく わ でし くけん

り。能く呵責せんは、これ我が弟子なり。驅遣せざらんは、

ぶつぼう なか あだ どううんぬん

仏法の中の怨なり」等云々。

そ ほけきよう ほうとうほん はいけん しゃか たほう じつぼうふんじん

夫れ、法華経の宝塔品を拝見するに、釈迦・多宝・十方分身

しよぶつ らいじゆう 何 ころろ ほう ひさ じゆう

の諸仏の来集はなに心ぞ。「法をして久しく住せしめん

ゆえ らいし どううんぬん さんぶつ みらい

が故に、ここに来至したまえり」等云々。三仏の未来に

ほけきよう ひろ みらい いっさい ぶっし 与 思

法華経を弘めて未来の一切の仏子にあたえんとおぼしめす

みこころ なか 推 ふぼ いっし だいく あ み

御心の中をすいするに、父母の一子の大苦に値うを見るよ

ごうじよう 見 ほうねん 勞 思

りも強盛にこそみえたるを、法然いたわしともおもわで、

まつぼう ほけきよう もん かた と ひと い 塞 きようじ

末法には法華経の門を堅く閉じて人を入れじとせき、狂児

誑 たから 捨 ほけきよう なげう

をたぼらかして宝をすてさするように、法華経を抛てさ

こころ むざん み そうら わ ふぼ ひと ころ

せける心こそ無慙に見え候え。我が父母を人の殺さんに、

ふぼ 告 あくし すいきよう ふぼ ころ

父母につげざるべしや。悪子の酔狂して父母を殺すを、

制 あくにん じとう ひ はな

せいせざるべしや。悪人、寺塔に火を放たんに、せいせざ

いっし じゆうびよう やいと にほん ぜん

るべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禅と

ねんぶつしゃ

み

制

者

じな

念仏者とを見てせいせざるものは、かくのごとし。「慈無く

いつわ した

かれ あだ

とううんぬん

して詐り親しむは、これ彼が怨なり」等云々。

にちれん にほんこく しょにん

主 師 親

日蓮は日本国の諸人にしゅうし父母なり。

いっさい てんだいしゅう

ひと

かれ

だいおんてき

か

あく

一切の天台宗の人は彼らが大怨敵なり。「彼がために悪

のぞ

すなわ

か

おや

とううんぬん

むどうしん

もの

しょうじ

を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。無道心の者、生死

離

をはなるることはなきなり。

きょうしゆしゃくそん

いっさい

げどう

だいあくにん

めり

たま

教主釈尊の一切の外道に大悪人と罵詈せられさせ給い、

てんだいだいし

なんぼく

とくいっ

さんずん

した

ごしやく

み

天台大師の南北ならびに得一に「三寸の舌もて五尺の身を

断

でんぎようだいし

なんきよう

しょにん

さいちよう

とうと

たつ」と、伝教大師の南京の諸人に「最澄いまだ唐都を

みとう言

たま

みなほけきよう

恥

見ず」等といわれさせ給いし、皆、法華經のゆえなればはじ

ぐにん褒

だいいち

恥

にちれん

ならず。愚人にほめられたるは第一のはじなり。日蓮が

ごかんき

被

てんだいしんごん

ほつしとう

よろこ

思

御勘気をかばれば、天台真言の法師等、悦ばしくやおもう

無慙

奇怪

らん。かつはむざんなり、かつはきかいなり。

そ

しやくそん

しやば

い

らじゆう

しん

い

でんぎよう

しな

夫れ、釈尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、伝教は尸那

い

だいいば

しし

み

捨

やくおう

ひじ

焼

じようぐう

に入り、提婆・師子は身をすつ。薬王は臂をやく。上宮は

てかわ

剥

しやかぼさつ

にく

売

ぎようぼう

ほね

ふで

手の皮をはぐ。釈迦菩薩は肉をうる。楽法は骨を筆とす。

てんだい

い

とき

かな

とううんぬん

ぶつぼう

とき

天台云わく「時に適うのみ」等云々。仏法は時によるべし。

にちれん

るざい

こんじよう

しようく

歎

ごしよう

日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず。後生には

だいらく 受  
大樂をうくべければ大いおおに悦よろこばし。